

瑞龍古墳群

県立常陸太田特別支援学校施設
整備事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成28年3月

茨城県教育委員会
公益財團法人茨城県教育財團

瑞 龍 古 墳 群

県立常陸太田特別支援学校施設
整備事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成28年3月

茨城県教育委員会
公益財団法人茨城県教育財団



調査区全景（北西から）



第11号方形周溝墓出土土器

序

公益財団法人茨城県教育財団は、国や県などの各事業者から委託を受けて埋蔵文化財の発掘調査と整理業務を実施することを主な目的として、昭和52年に調査課が設置されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として発掘調査報告書を刊行してきました。

この度、茨城県教育委員会による県立常陸太田特別支援学校施設整備事業に伴って実施した、常陸太田市瑞龍古墳群の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

今回の調査によって古墳時代の方形周溝墓や古墳が確認でき、県北地域における古墳時代の墓制の一端が明らかになりました。

本書が、学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上のための資料として広く活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多大な御協力を賜りました委託者である茨城県教育委員会に厚く御礼申し上げますとともに、常陸太田市教育委員会をはじめ、御指導、御協力をいただきました関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

平成28年3月

公益財団法人茨城県教育財団

理事長 鈴木欣一

例　　言

- 1 本書は、茨城県教育委員会の委託により、公益財団法人茨城県教育財團が平成 26 年度に発掘調査を実施した。茨城県常陸太田市瑞龍町 1,032 番 1 に所在する瑞龍古墳群の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。
調査 平成 26 年 6 月 1 日～8 月 29 日
整理 平成 27 年 4 月 1 日～8 月 31 日
- 3 発掘調査は、調査課長白田正子のもと、以下の者が担当した。
首席調査員兼班長　　寺内久永
首席調査員　　奥沢哲也
調査員　　根本康弘　　平成 26 年 6 月 1 日～7 月 31 日
調査員　　榊 孝雄　　平成 26 年 8 月 1 日～8 月 29 日
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長後藤一成のもと、首席調査員兼班長奥沢哲也が担当した。
- 5 本書の作成にあたり、方形周溝墓・古墳及び出土土器について、茨城大学人文学部教授田中裕氏に御指導いただいた。
- 6 第 4 号墳から出土した人骨の歯牙について、岩手医科大学名誉教授であるつくば歯科衛生専門学校長野坂洋一郎氏に鑑定を依頼した。
- 7 第 2 号方形周溝墓（第 8 号墳）及び第 6 号墳の覆土の火山灰分析については、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、考察は付章として巻末に掲載した。

凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IV系座標に準拠し、X = + 62,680 m, Y = + 62,520 mの交点を基準点（A 1 al）とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A, B, C …, 西から東へ 1, 2, 3 …とし、「A 1 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へ a, b, c … j, 西から東へ 1, 2, 3, … 0 と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 al 区」のように呼称した。

2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 FP - 炉跡 P - ピット SE - 井戸跡 SI - 壁穴建物跡 SK - 土坑 TM - 古墳

遺物 DP - 土製品 M - 銭貨 Q - 石器・石核・剥片 TP - 拓本記録土器

土層 K - 扰乱

3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 400 分の 1, 各遺構の実測図は原則として 60 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として 3 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

■	焼土・赤彩・施釉	■	炉・織維土器
■	黒色処理	■	煤
●	土器	□	石器
△	銭貨	---	硬化面

4 土層観察と遺物における色調の判定は、「新版標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。

5 遺構一覧表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。

(1) 計測値の単位は m, cm, g で示した。なお、現存値は () を、推定値は [] を付して示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

6 壁穴建物跡の「主軸」は、炉を通る軸線とし、方形周溝墓の「主軸」は、南北軸とする。主軸方向は、その他の遺構の長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N - 10° - E）。

7 今回の報告分で、整理作業の段階で遺構名を変更したもの及び欠番にしたものは以下のとおりである。

変更 SD 1 → 第 1 号円形周溝状遺構 SD 2 → 第 4 号墳 SK17 → 第 1 号壁穴遺構

欠番 SK19

目 次

序
例 言
凡 例
目 次

瑞龍古墳群の概要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	4
第1節 位置と地形	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	11
第1節 調査の概要	11
第2節 基本層序	11
第3節 遺構と遺物	12
1 縄文時代の遺構と遺物	12
(1) 竪穴建物跡	12
(2) 土坑	18
2 弥生時代の遺構と遺物	21
土坑	21
3 古墳時代の遺構と遺物	22
(1) 方形周溝墓	22
(2) 古墳	51
(3) 土坑	59
4 鎌倉時代の遺構と遺物	60
竪穴遺構	60
5 室町時代の遺構と遺物	61
土坑	61
6 その他の遺構と遺物	64
(1) 円形周溝状遺構	65
(2) 井戸跡	65
(3) 炉跡	67
(4) 土坑	67
(5) 遺構外出土遺物	71

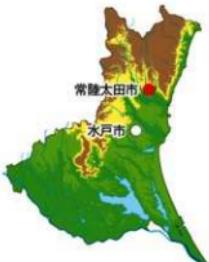
第4節　まとめ	74
付 章	89
写真図版	PL 1 ~ PL22
抄 錄	

瑞龍古墳群の概要

遺跡の位置と調査の目的

瑞龍古墳群は、常陸太田市の南部に位置し、里川右岸の標高約47mの台地縁辺部に立地しています。

当遺跡の調査は県立常陸太田特別支援学校施設整備事業に伴い、平成26年6月から8月までの3か月間、茨城県教育財団が実施しました。調査面積は、3,000m²で、調査する以前は瑞竜小学校の校庭でした。



調査の内容

昭和61年に常陸太田市教育委員会が行った調査では、古墳3基と平安時代の堅穴建物跡5棟が確認されています。第5号墳の周溝から出土した「ヘラ状の器物を持つ女子像埴輪」は常陸太田市の指定文化財になっています。今回の調査では、古墳時代前期（約1,700年前）の方形周溝墓14基、中期（約1,600年前）と後期（約1,500年前）の古墳2基のほか、縄文時代の堅穴建物跡3棟や縄文時代から室町時代にかけての土坑などを確認しました。県北地区で、方形周溝墓がまとまって見つかるることは珍しく貴重な資料となりました。



遺跡全景（北西から）



第1号方形周溝墓の遺物出土状況



第3号方形周溝墓の遺物出土状況



第4号墳の箱式石棺と人骨出土状況



第2号方形周溝墓から出土した土器

調査の結果

今回の調査では、方形周溝墓が台地の縁辺部に14基まとまって造られていましたことが確認できました。方形周溝墓は、茨城県域では4世紀頃に東京湾周辺に住んでいた人々によってもたらされた文化だと考えられています。第2号方形周溝墓からは、東京湾周辺の影響を受けた甕が出土しました。この地に移り住んできた人々や、新しい文化をもった人たちと交流のある人々が、方形周溝墓に葬られたと考えられます。また、周溝から出土した土器は、底に穴があけられていたり、打ち欠かれていたりしており、亡くなった人を弔う儀式を行っていたことが想像できます。

また、6世紀と考えられる第4号墳では、雲母片岩と呼ばれる石を組み合わせた箱式石棺が見つかりました。出土した人骨や歯から、埋葬された人は30歳から40歳代の男性で、この地の有力者であったと考えられます。

このように、瑞龍古墳群は多くの方形周溝墓や古墳が集中して造られ、当時の墓域であったことが分かりました。

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

茨城県は、常陸太田市において、県立常陸太田特別支援学校の施設整備事業を進めている。

平成25年9月27日、茨城県教育委員会教育長（教育府財務課扱い）は、茨城県教育委員会教育長（教育府文化課扱い）あてに県立常陸太田特別支援学校施設整備事業地内における、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会した。これを受けた茨城県教育委員会は、平成25年10月10日に現地踏査を、平成25年11月6日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成25年11月15日、茨城県教育委員会教育長（教育府文化課扱い）は、茨城県教育委員会教育長（教育府財務課扱い）あてに県立常陸太田特別支援学校の施設整備事業地内に瑞龍古墳群が所在すること及びその取扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成26年1月16日、茨城県教育委員会教育長（教育府財務課扱い）は、茨城県教育委員会教育長（教育府文化課扱い）あてに文化財保護法第94条に基づく土木工事の通知を提出した。平成26年2月19日、茨城県教育委員会教育長（教育府文化課扱い）は、茨城県教育委員会教育長（教育府財務課扱い）あてに、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成26年3月13日、茨城県教育委員会教育長（教育府財務課扱い）は、茨城県教育委員会教育長（教育府文化課扱い）あてに県立常陸太田特別支援学校施設整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議書を提出した。平成26年3月14日、茨城県教育委員会教育長（教育府文化課扱い）は、茨城県教育委員会教育長（教育府財務課扱い）あてに、瑞龍古墳群について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて調査機関として、公益財団法人茨城県教育財團を紹介した。公益財団法人茨城県教育財團は、茨城県教育委員会教育長（教育府財務課扱い）から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成26年6月1日から8月29日まで発掘調査を実施した。

第2節 調査経過

瑞龍古墳群の調査は、平成26年6月1日から8月29日までの3か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

期間	6月	7月	8月
調査準備 表土除去 遺構確認			
遺構調査			
遺物洗浄 注写真整理			
撤収			

第2章 位置と環境

第1節 位置と地形

瑞龍古墳群は、茨城県常陸太田市瑞龍町1,032番1に所在している。

常陸太田市は、県の北部に位置し、南北に長い形状で、北は福島県東白川郡塙町・矢祭町、東は高萩市、日立市、南は那珂市、西は常陸大宮市、久慈郡大子町と接している。

市の地形は、北部が山地、中部が丘陵・台地、南部が低地と変化に富んでいる。久慈川が市の南を北西から南東に流れしており、そこに市域を南北に並行して流れる浅川、山田川、里川の各支流が合流する。それら各河川の流域に低地が広がり、水田として利用されている¹⁾。

北部の阿武隈山地は久慈川の支流を境界として細別されており、里川の東が多賀山地、西が久慈山地、さらに久慈山地は山田川の東が東金砂山地、西が男体山地に分けられる。阿武隈山地の南端に位置する市の南東部には、西堂平成岩、玉簾変成岩で構成され、変成作用を受けた鉱物や岩石類が分布しており、それらが古くから人々に利用されてきた²⁾。

当遺跡は常陸太田市の南部に位置し、里川右岸の標高約47mの台地縁辺部に立地している。遺跡が立地する台地は幅300~700mで、南へ1.5km延びる舌状台地である。東側は里川に面し、西側には亜支谷が入り込んでいる。調査区は、その台地の東側へ張り出した部分の南東縁辺部に位置しており、台地と低地との比高は15mほどである。調査前の現況は旧瑞竜小学校の校庭である。

第2節 歴史的環境

瑞龍古墳群の所在する常陸太田市は、北部の阿武隈山地から延びる台地と各河川の流域に展開する低地を中心いて古くから人々が生活を営んでおり、多くの遺跡が確認されている³⁾。また、周辺が山地に囲まれているという、その地理的環境を利用して中世以降多くの城館が築かれている。

縄文時代は、早期から晩期までの遺跡が確認されている。轄山遺跡（29）では早期・中期・後期の土器が出土している。それらは、遺構に伴うものではなく古墳の封土や旧表土下からの出土によるものであるが、周辺での長期の生活痕跡がうかがえる⁴⁾。その他に早期の土器は、八反内遺跡（16）や十国崎遺跡で確認されている⁵⁾。前期に比定される土器が主体をなす遺跡は、森東貝塚（43）と築崎貝塚（44）がある。いずれも発掘調査が行われており、森東貝塚は、ヤマトシジミを主体とする混土貝層が貝塚を形成しており、土器は前期の花積下層式・関山式・黒浜式が出土している⁶⁾。築崎貝塚は、貝層の主体をヤマトシジミが占め、アカニシ・ハマグリ・カキなどの貝類や、スズキ・クロダイといった魚類、カモなどの鳥類、イノシシ・シカなどの哺乳類の骨も確認されている。土器は、前期の花積下層式を中心に、早期の田戸下層式・前期の関山式が出土している⁷⁾。中期は、瑞龍遺跡（2）で加曾利E式、馬場遺跡（48）からは加曾利E II・III式、坂口遺跡では加曾利E II～IV式、真弓宿遺跡・岡町遺跡では中期後葉の土器が確認されている⁸⁾。後期・晩期の遺跡では、轄山遺跡（40）が発掘調査されており、後期中葉から晩期後葉の土器が確認され、土坑から注口土器や土偶が出土している⁹⁾。

弥生時代の遺跡は、その規模や性格について明確でない部分が多い。中期の土器は、坂口遺跡や瑞龍遺跡で

確認されているが、資料数はわずかである。坂口遺跡では小形の長頸壺形土器が出土している。また、瑞龍遺跡では胴部の膨らむ壺形土器が出土しており、長く瑞龍小学校に保管されていた¹⁰⁾。その他、当該地域で出土した土器は後期後半の十王台式が最も多く、瑞龍遺跡・幡山遺跡・幡台遺跡・森東貝塚・築崎貝塚・馬場遺跡・岡田台遺跡などで確認されている¹¹⁾。幡山遺跡では、当該期の堅穴建物跡が古墳の墳丘下から確認されており、台地の南西を流れる里川によって開析された低地を利用した水田を生活基盤とする集落の存在が想定されている¹²⁾。しかし、台地と低地の比高が約 50 m あり、水田耕作以外の生産についても考慮する必要性が指摘されている¹³⁾。中期後半及び後期前半の資料は確認例が少数であり、詳細は不明である。

古墳時代に入ると、当該地域に方形周溝墓や古墳が築造される。本遺跡から 1 kmほど南に所在する小野崎城跡（3）では、方形周溝墓 1 基が確認されている。当遺跡との関連が想定されるが、詳細は不明である¹⁴⁾。また、前期に比定されている梵天山古墳群は、島町の久慈川を望む標高約 20 m の独立丘陵上に位置している。丘陵の北西端には、県内第 2 位の規模を誇る全長 151 m の梵天山古墳が位置し、その南東に 12 基の円墳があり、南斜面に百穴と呼ばれる横穴墓群が存在している¹⁵⁾。梵天山古墳は久慈川流域を支配した久自国造の祖、船瀬足尼の墓であるという言い伝えが残っている。中期には、当財團が平成 22 年度に調査した日向遺跡で 5 世紀中葉に比定される円墳が調査されている¹⁶⁾。また、瑞龍古墳群では昭和 61 年に第 1 次調査が常陸太田市教育委員会によって実施され、その際に円墳 2 基（第 5・6 号墳）を調査し、箱式石棺 1 基（第 4 号墳）を確認している。第 5 号墳では墳丘と周溝から箱式石棺が確認され、石棺内から人骨とともに鉄鎌が出土している。また、周溝からは、市指定文化財である「ヘラ状の器を持つ女子像埴輪」が出土している¹⁷⁾。後期にかけて、当該地域では古墳の築造が増加していく。後期に比定される幡山古墳群（31）は、南北に長い舌状台地上のほぼ中央に位置する 1 基の前方後円墳を含む 20 数基の円墳からなる古墳群である。同古墳群の第 12 号墳からは直刀・單鳳環柄頭・金環・鐵鎌などが出土している¹⁸⁾。同じく後期の入淨塚古墳からは、直刀や刀子・金環・金象嵌の鐔・刀装品が出土している¹⁹⁾。その他の古墳群として、白鷦古墳群（8）・高貴古墳群（35）・幡台古墳群（39）・塚原古墳群・よい塚古墳群などがある。

さらに、当該地域は県内でも有数の横穴墓群が盛行する地域であり、古墳時代後期に築造され、奈良時代まで継続して埋葬施設となっている。当遺跡周辺でも、同じ台地に瑞龍 A 横穴墓群（4）や瑞龍 B 横穴墓群（5）・身隠山横穴墓群（6）・白鷦横穴墓群（9）などが集中して築造されている。また、里川左岸の標高約 50 m の台地には幡山北横穴墓群（27）・幡山西横穴墓群（30）・幡山東横穴墓群（32）が集中しており、南の斜面には、70 基ほどの横穴墓が確認されている幡ヶ背ヶ横穴墓群（41）がある。同横穴墓群では線刻で描かれた壁画が確認されており、第 6 号横穴墓には鳥・竜・三重塔・兔・帆船、第 11 号横穴墓には人物・鳥・家屋・鳥居が描かれている²⁰⁾。横穴墓群の時期については、身隠山横穴墓群²¹⁾は 7 世紀後半から 8 世紀前半、釜田横穴墓群²²⁾は 8 世紀後半に比定されている。その他にも多くの横穴墓群が、当地域の丘陵や台地の斜面で確認されている。

古墳や横穴墓群の調査・確認事例に比して、集落の様相を示す資料は乏しい。瑞龍遺跡では、古墳時代前期から後期にかけての集落跡が確認されており、当遺跡との関連が想定される²³⁾。里川左岸では、縄文時代から平安時代までの複合遺跡である幡台遺跡で 7 世紀前葉の堅穴建物跡が確認されている²⁴⁾。また、前述した日向遺跡でも、弥生時代から平安時代までの堅穴建物跡 134 棟が調査され、その内当該期の堅穴建物跡は 36 棟である²⁵⁾。また、生産遺跡としては埴輪の窯跡である元太田山埴輪窯跡²⁶⁾（60）、7 世紀後半以降の須恵器の窯跡が 3 基確認されている幡山須恵器窯跡（28）などがある²⁷⁾。当窯跡で製造された須恵器は、幡山古墳群や幡山東横穴墓群で出土しており、古墳時代に当該地域で造られた埴輪や須恵器が古墳に供献されていたこ

とがわかる³⁰⁾。このように、当地域での古墳文化の盛行がうかがえる。

奈良・平安時代の当地域は、『倭名類聚抄』に記載されている久慈郡大田郷に属している。当該期の集落は、前述した昭和61年の当遺跡の調査で10世紀代と考えられる堅穴建物跡が確認されている³¹⁾。さらに、瑞龍遺跡でも、堅穴建物跡や掘立柱建物跡が確認されており、当遺跡が立地する台地上には当該期の集落が広がっていたことが想定される³²⁾。また、里川左岸の幡台遺跡でも8世紀後葉から10世紀中葉にかけての堅穴建物跡4棟が確認されている³³⁾。なお、久慈郡衙跡は、大里町に所在する長者屋敷遺跡の周辺に比定されている。長者屋敷遺跡は、調査以前から焼米や布目瓦が確認されており、郡衙や駅家、寺院などの存在が想定されてきた。調査によって確認された基壇遺構や掘立柱建物跡、『久寺』と書かれた墨書き土器の出土から、寺院に関連する施設の可能性が指摘されている³⁴⁾。また、当市域には古代東海道の駅家である雄薩駅³⁵⁾が所在していたと考えられており、当地域が常陸國の北方において重要な地域であったことがわかる。当遺跡南東1kmほどの里川流域の低地には条里制が確認できる遺跡として中井川遺跡（45）があり、広大な河川流域の開発を行う大田部との関連が想定されている³⁶⁾。さらに、里川左岸の幡山の台地上には機織りの神として奉られている長幡部神社がある。『常陸國風土記』には、崇神天皇の世に長幡部の祖多彌命が三野（美濃）から久慈に移り機殿を造って縄を織り、毎年神へ奉納されていたということが当神社の起源として記述されている³⁷⁾。縄は平安時代まで調として納められており、当地域の律令制下での生産体制をうかがい知ることができる。

中世の当地域は佐竹氏の本拠地であり、関連する城館や神社などが数多く存在している。佐竹氏に関連する城館は太田城跡（53）、小野崎城跡、小野館跡（11）、今宮館跡（10）、馬潤館跡（50）、幡館跡（42）などがあり、当地域に及ぶ佐竹氏の勢力をうかがうことができる。前述の小野崎城跡は佐竹氏に臣従した小野崎氏の居城であったとされ、昭和39年の調査で土坑から「東」「西」「南」「北」とそれぞれ墨書きされた土師質土器の小皿が出土している³⁸⁾。

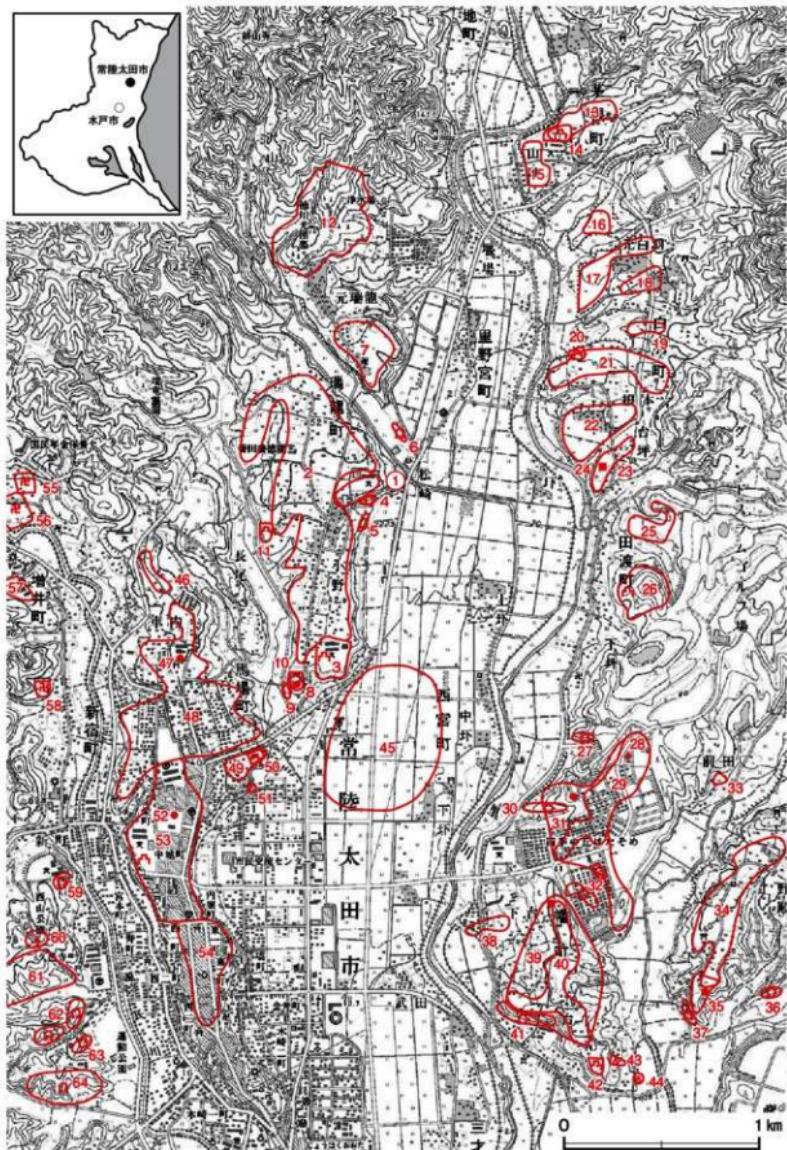
近世には水戸城に本拠を移していた佐竹氏が秋田に移封され、水戸徳川氏が代わって水戸城に入城する。当地域は水戸藩領に属し、水戸藩の初代藩主徳川頼房以降、水戸徳川家墓所（12）が瑞龍に定められたことや、二代藩主の徳川光圀が西山莊に隠居して『大日本史』を編さんするなど、水戸藩ゆかりの地としての色合いを強める。当地域における近世の遺跡は、町田に所在する町田焼窯跡がある³⁹⁾。町田焼は、第9代水戸藩主の徳川齐昭が推進した殖産興業の一つである磁器生産を目的として操業を開始した。染付磁器碗や擂鉢などの他に、焼台など窯道具が出土しており、江戸時代後期の在地窯業の様子を伝えている。

* 文中の〈 〉内の番号は、表1、第1図の該当遺跡番号と同じである。

註

- 1) 常陸太田市史編さん委員会編『常陸太田市史 通史編 上巻』常陸太田市役所 1984年3月
 - 2) 日本の地質『関東地方』編集委員会編『日本の地質3 関東地方』共立出版 2007年5月
 - 3) 茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図（地名表編・地図編）』茨城県教育委員会 2001年3月
 - 4) 常陸太田市教育委員会『幡山道路発掘調査報告』常陸太田市 1978年5月
 - 5) 註1に同じ
 - 6) 常陸太田市史編さん委員会『常陸太田市内貝塚確認調査報告 森東貝塚・磐崎貝塚』常陸太田市役所 1984年3月
 - 7) 註6に同じ
 - 8) a 註1に同じ
- b 発掘調査遺跡現地説明会資料『瑞龍遺跡』茨城県教育財团 2014年2月、9月
- 9) 西野保『幡台遺跡発掘調査報告書』常陸太田市教育委員会 2001年3月

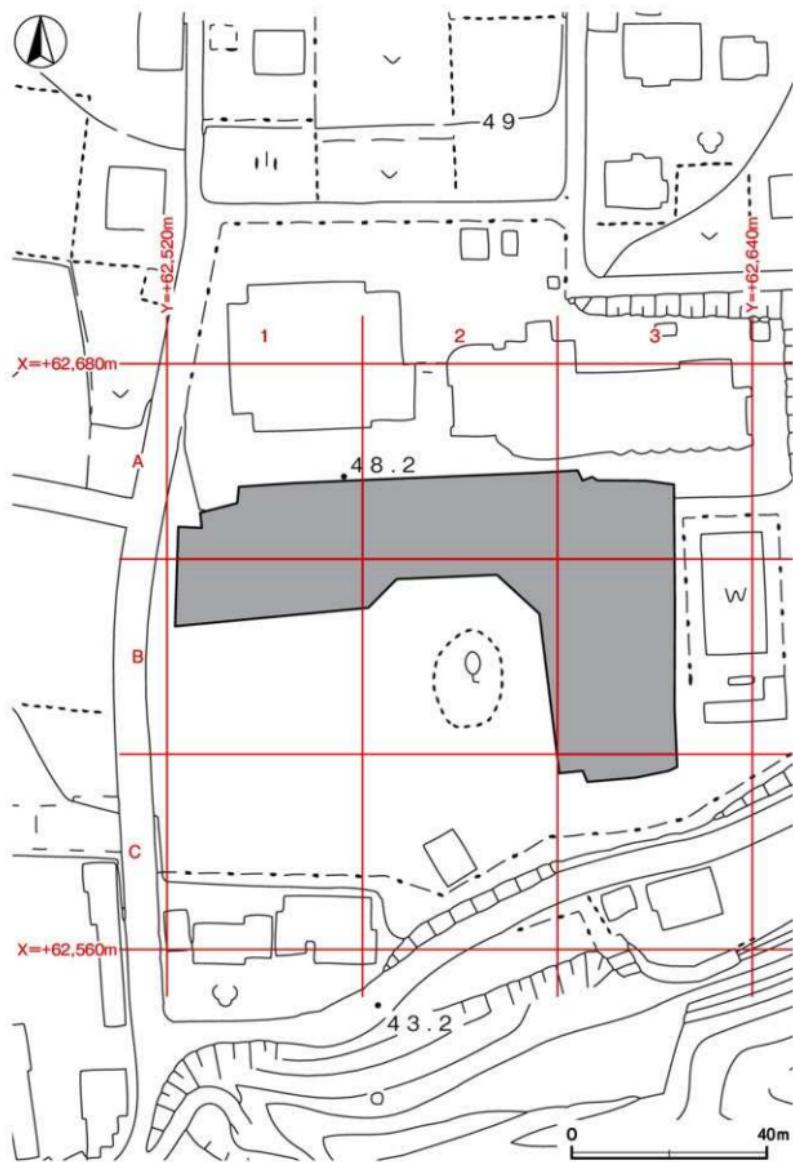
- 10) a 註1に同じ
b 高橋博之 横倉要次「常陸太田市瑞竜小学校所蔵の弥生式土器について」『婆良岐考古』第5号 婆良岐考古同人会 1983年4月
- 11) 註1に同じ
12) 註4に同じ
13) 海老沢稔「幡山遺跡」『茨城県資料 考古資料編 弥生時代』茨城県 1991年3月
- 14) a 山岸良二編「関東の方形周溝墓」同成社 1991年3月
b 鈴木敏弘編「歴史墓制研究5－方形周溝墓研究その5－『研究史編』東日本』歴史墓制研究会 1977年6月
- 15) 大塚初重「梵天山古墳」『茨城県資料 考古資料編 古墳時代』茨城県 1974年2月
- 16) 小川貴行 松林秀と「日向道路・一般国道293号常陸太田東バイパス及び主要地方道日笠間線バイパス整備事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財团文化財調査報告』第365集 2013年3月
- 17) 小室勉「瑞龍古墳群発掘調査報告」常陸太田市教育委員会 1987年3月
- 18) 註4に同じ
19) 小室勉「入淨塚古墳発掘調査報告」常陸太田市教育委員会 1983年3月
- 20) 大森信英「幡ヶヶ横穴墓群」『茨城県資料 考古資料編 古墳時代』茨城県 1974年2月
- 21) 常陸太田市文化財調査会「常陸太田市瑞龍・身隠山横穴墓群調査報告」常陸太田市教育委員会 1972年9月
- 22) 常陸太田市「笠田横穴群調査報告」常陸太田市 1979年3月
- 23) 註8bに同じ
24) 註9に同じ
25) 註16に同じ
26) 註1に同じ
27) 註4に同じ
28) 海老沢稔「幡山遺跡・幡山墳惠器窯跡」『茨城の考古学散歩』茨城県考古学協会 2010年5月
- 29) 註17に同じ
30) 註8bに同じ
31) 註9に同じ
32) a 西野保「長者屋敷遺跡」『茨城の考古学散歩』茨城県考古学協会 2010年5月
b 矢ノ倉正男「主要地方道常陸郡河港山方線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 長者屋敷遺跡」『茨城県教育財团文化財調査報告』第117集 1997年3月
- 33) 註1に同じ
34) 註1に同じ
35) 茨城県立歴史館「戦国大名佐竹氏」茨城県立歴史館 2005年2月
- 36) 河野一也 水野順敏 河野眞理子「茨城県水府村 町田焼窯跡」日本窯業史研究所 2005年3月



第1図 瑞龍古墳群周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000 分の1 「常陸太田」）

表1 瑞龍古墳群周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町	江戸		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町	江戸
①	瑞龍古墳群	○	○	○				○	33	前田遺跡	○					
2	瑞龍遺跡	○	○	○	○	○	○		34	高貫遺跡	○	○	○	○		
3	小野崎城跡			○		○			35	高貫古墳群			○			
4	瑞龍A横穴墓群			○					36	高貫東横穴墓群			○			
5	瑞龍B横穴墓群			○					37	高貫西横穴墓群			○			
6	身隠山横穴墓群			○					38	幡台下遺跡			○	○		
7	元瑞龍遺跡		○	○	○				39	幡台古墳群			○			
8	白鷺古墳群			○					40	幡台遺跡	○	○	○	○		
9	白鷺横穴墓群			○					41	幡バッケ横穴墓群			○			
10	今宮館跡					○			42	幡館跡				○		
11	小野館跡					○			43	森東貝塚	○	○				
12	水戸徳川家墓所						○		44	柴崎貝塚	○	○				
13	山口遺跡				○				45	中井川遺跡				○		
14	茅根城跡						○		46	森後台遺跡			○	○		
15	根小屋遺跡			○	○				47	亀の子山古墳			○			
16	八反内遺跡	○		○	○				48	馬場遺跡	○	○	○	○		
17	元白羽遺跡			○	○				49	真淵遺跡	○	○	○	○		
18	白羽遺跡			○	○				50	馬渕館跡				○		
19	笠松遺跡			○	○				51	馬場横穴			○			
20	根本館跡						○		52	柴町古墳			○			
21	根本遺跡				○	○			53	太田城跡				○		
22	前根本遺跡	○		○	○				54	鯨ヶ丘遺跡	○	○	○			
23	田渡台遺跡			○	○				55	正法院跡				○		
24	田渡古墳			○					56	勝楽寺跡				○		
25	篠山遺跡			○	○				57	福寿台遺跡			○	○		
26	田渡城跡						○		58	極楽寺跡				○	○	
27	幡山北横穴墓群				○				59	陣馬横穴墓群			○			
28	幡山須恵器窯跡				○				60	元太田山埴輪窯跡			○			
29	幡山遺跡	○	○	○					61	山吹山横穴墓群			○			
30	幡山西横穴墓群				○				62	所化塚横穴墓群			○			
31	幡山古墳群				○				63	三昧堂横穴墓群			○			
32	幡山東横穴墓群				○				64	宮ヶ作横穴墓群			○			



第2図 瑞龍古墳群調査区設定図（常陸太田市都市計画図 2,500 分の 1）

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

瑞龍古墳群は、常陸太田市の南部に位置し、里川右岸の標高約47mの台地縁辺部に立地している。調査面積は3,000m²で、調査前の現況は旧瑞竜小学校の校庭である。

調査の結果、堅穴建物跡3棟（縄文時代）、方形周溝墓14基（古墳時代）、古墳2基（古墳時代）、堅穴造構1基（鎌倉時代）、円形周溝状造構1基（不明）、井戸跡2基（不明）、炉跡1基（不明）、土坑37基（縄文時代5、弥生時代1、古墳時代3、室町時代3、不明25）を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に15箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢・小形壺）、弥生土器（鉢・広口壺・小形壺）、土師器（壺・高台付壺・壺・装飾器台・器台・高壺・壺・台付壺・壺）、土師質土器（小皿）、陶器（平碗・鉢・壺）、磁器（盤）、土製品（形象埴輪・円筒埴輪）、石器（礫・磨石）、石核、剥片、錢貨などである。

第2節 基本層序

調査区南東部の台地上の平坦面（B2g0区）にテストピットを設定し、基本土層（第3図）の観察を行った。

第1層は調査前の現況が小学校であることから、校庭の整地層である。粘性は普通で締まりは極めて強く、層厚は30～53cmである。整地する際にローム層の上面まで削平されている。

第2層は褐色を呈するソフトローム層である。粘性・締まりともに普通で、白色粒子・黒色粒子を微量含む。層厚は10～35cmである。

第3層は褐色を呈するハードローム層への漸移層である。粘性は普通で、締まりは強く、白色粒子を少量、黒色粒子を微量含む。層厚は15～28cmである。

第4層は褐色を呈するハードローム層である。粘性は普通で締まりは強く、白色粒子・黒色粒子を微量含む。層厚は10～30cmである。

第5層は黄褐色を呈する鹿沼バミス粒子を中量含んだハードローム層である。層厚は5～15cmである。

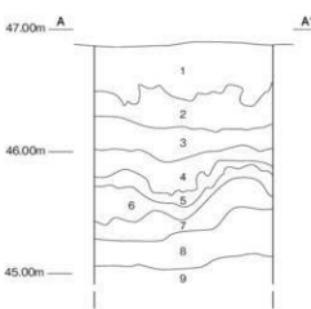
第6層は明黄褐色を呈する鹿沼軽石層である。層厚は8～33cmである。

第7層は褐色を呈するハードローム層である。粘性は普通で締まりは強く、黒色粒子を少量含む。層厚は10～25cmである。

第8層は黄褐色を呈する粘土層への漸移層である。粘性は強く、締まりは普通で、白色粒子を微量含む。層厚は20～45cmである。

第9層はにぶい黄褐色を呈する粘土層である。粘性・締まりとともに強く、下層が未掘のため層厚は不明である。

造構は、第2層の上面で確認した。



第3図 基本土層図

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴建物跡3棟、土坑5基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴建物跡

第6号竪穴建物跡（第4・5図）

位置 調査区中央部のA 2 h2 区、標高 47 m ほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第2号方形周溝墓（第9号墳）に掘り込まれている。

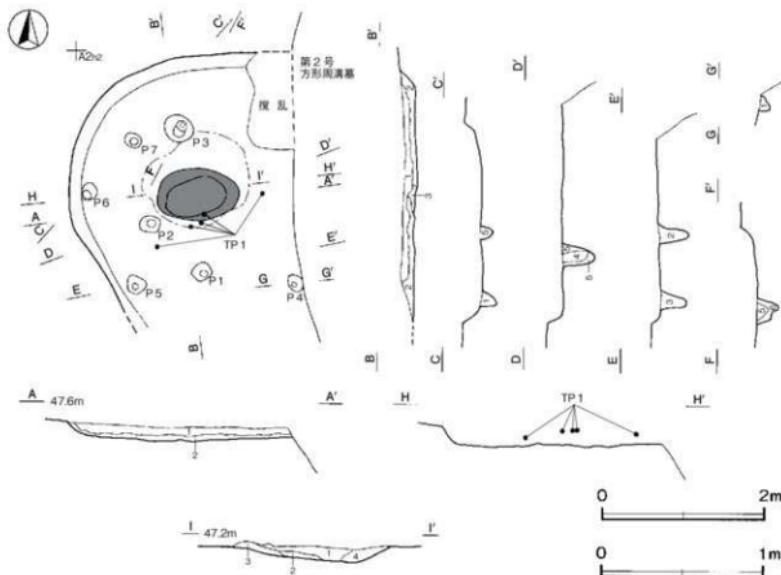
規模と形状 東部が第2号方形周溝墓の周溝に掘り込まれ、南部が削平されているため、規模は、南北軸 3.07 m、東西軸 2.79 m しか確認できなかった。楕円形で主軸方向は N - 18° - W と推定される。壁は高さ 14 ~ 23 cm で、外傾している。

床 平坦で、炉の周辺が踏み固められている。

炉 中央部に付設されると考えられ、長径 102 cm、短径 64 cm の楕円形である。地床炉で、深さ 8 cm ほど掘りくぼめて構築されている。

炉土層解説

1 にぶい赤褐色	ロームブロック中量	燒土粒子・炭化粒子少量	3 暗赤褐色	ロームブロック中量	燒土粒子少量
2 にぶい赤褐色	ロームブロック中量	燒土粒子少量	4 黄色	ロームブロック中量	



第4図 第6号竪穴建物跡実測図

ピット 7か所。P 1～P 3は深さ27～40cmで、配置及び形状から主柱穴である。P 4～P 7は深さ12～33cmで壁柱穴と考えられる。

ピット土層解説

1	暗	褐色	ロームブロック少量	4	暗	褐色	ローム粒子少量
2	黒	褐色	ローム粒子微量	5	褐	色	ロームブロック中量
3	褐	色	ローム粒子中量	6	褐	色	ロームブロック多量

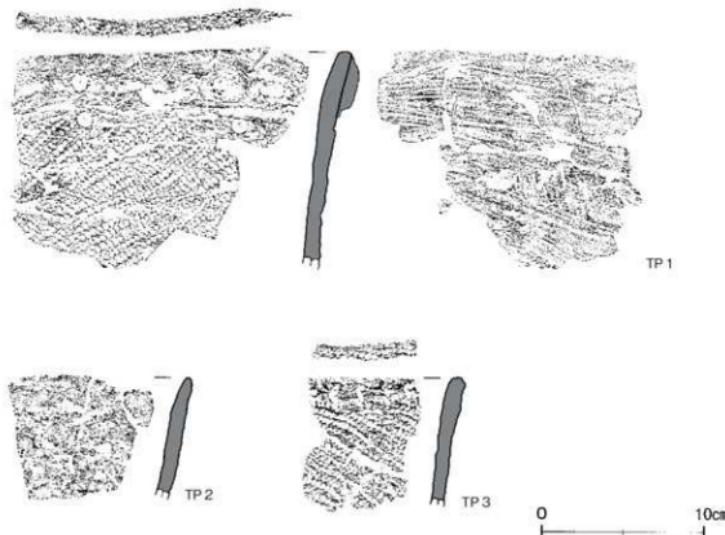
覆土 3層に分層できる。ロームブロック、焼土ブロック、炭化粒子が含まれている層が不規則に堆積しており、埋め戻されている。

土層解説

1	黒	褐色	ロームブロック中量	燒土ブロック・炭化粒子少量	3	暗	褐色	燒土ブロック中量	ロームブロック少量
2	黒	褐色	ロームブロック中量						

遺物出土状況 繩文土器片37点(深鉢)が出土している。TP 1は、炉周辺の覆土下層から廃棄された状態で出土している。TP 2・TP 3は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から前期初頭に比定できる。



第5図 第6号竪穴建物跡出土遺物実測図

第6号竪穴建物跡出土遺物観察表（第5図）

番号	種別	部種	胎土	色調	文様の特徴はいか	出土位置	備考
TP 1	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤母・斜状物質・繊維	褐	口縁部陰帯輪文 口羽部・側面に縄文場支後内形竹管による網文 番部外側LR單沿縄文 内出掛痕文	覆土下層	PL20
TP 2	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	灰褐色	無文	覆土中	PL20
TP 3	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	黒褐	口羽部縄文施文 口縁部縄文原体押正 脇部外側R L單沿縄文	覆土中	PL20

第7号竪穴建物跡（第6・7図）

位置 調査区中央部のA 2 g3 区、標高 47 m ほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第2号方形周溝墓（第9号墳）に掘り込まれている。

規模と形状 南部が第2号方形周溝墓の周溝に掘り込まれ、北部が調査区域外のため、規模は、東西軸は 4.04 m で、南北軸は 2.16 m しか確認できなかった。楕円形で、主軸方向は N - 81° - E と推定される。壁は高さ 12 ~ 23 cm で、外傾している。

床 平坦で、炉周辺から南部にかけて踏み固められている。

炉 中央部に付設されていると考えられる。大部分が調査区域外のため、確認できた規模は長径 89 cm、短径 40 cm ほどで、楕円形と推定される。地床炉で、深さ 13 cm ほど掘りくぼめて構築されている。

炉土層解説

1 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量 2 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量

ピット 5か所。P 1 ~ P 5 は深さ 10 ~ 15 cm で、配置及び形状から主柱穴と考えられる。

ピット土層解説

1 暗褐色 ロームブロック中量、炭化物少量 3 黒褐色 ロームブロック中量、炭化物微量

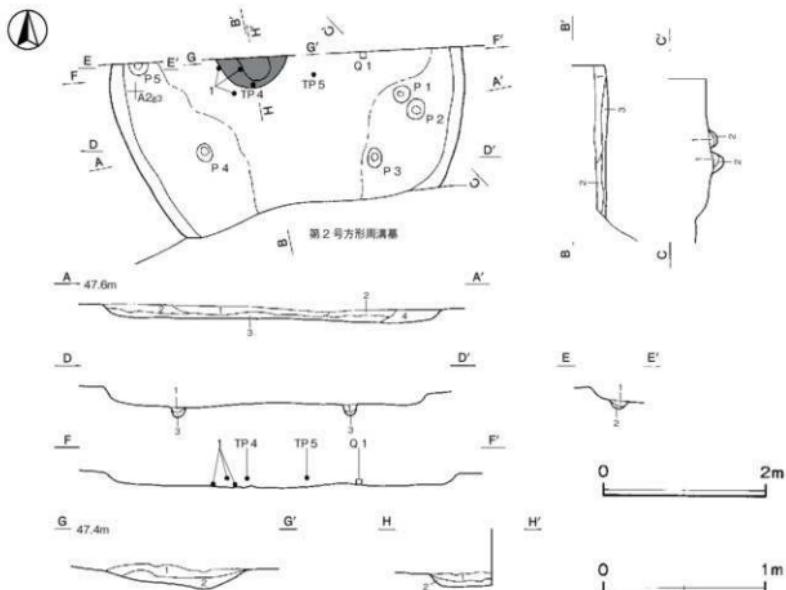
2 にぶい黄褐色 ロームブロック中量

覆土 4層に分層できる。ロームブロック、炭化物、焼土粒子が含まれている層が不規則に堆積しており、埋め戻されている。

土層解説

1 黒色 ロームブロック・炭化物・焼土粒子少量 3 暗褐色 ロームブロック多量、炭化物少量

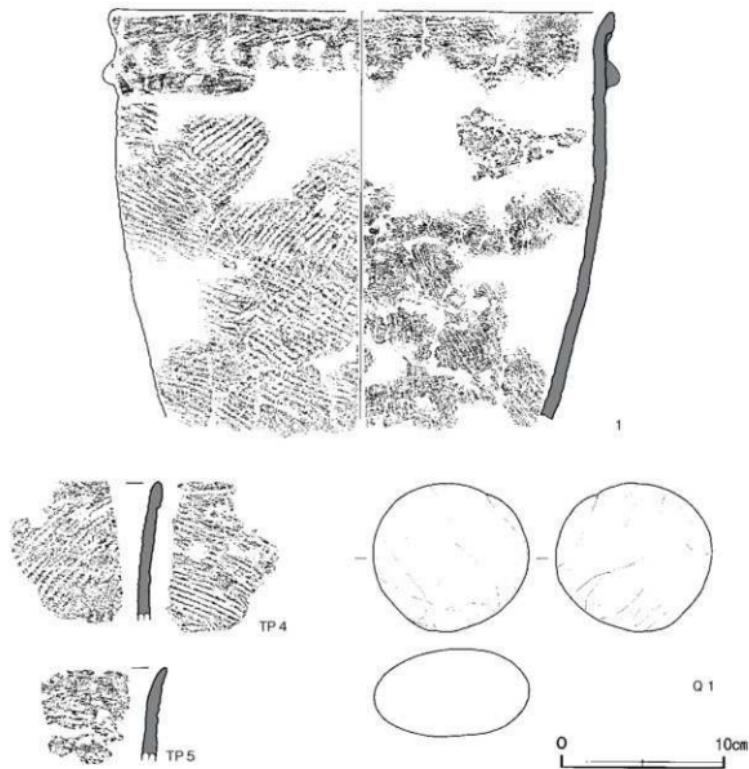
2 にぶい黄褐色 ロームブロック中量、炭化物・焼土粒子少量 4 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量



第6図 第7号竪穴建物跡実測図

遺物出土状況 縄文土器片 28 点（深鉢）、石器 1 点（磨石）、礫 1 点が出土している。1 は炉周辺の覆土下層から、廃棄された状態で出土している。TP 4・TP 5、Q 1 は炉周辺の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から前期初頭に比定できる。



第7図 第7号竪穴建物跡出土遺物実測図

第7号竪穴建物跡出土遺物観察表（第7図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴はか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	[306]	(250)	-	長石・石英・赤色粒子・織維	明赤褐色	普通	口縁部縦帯貼付後半載荷面による斜交文、胸部外側無鉛縄文による羽状構成、内面押痕文	覆土下層	20% PL20

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴はか	出土位置	備考
TP 4	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子・織維	灰黄褐色	胸部外表面 L.R 単脚縄文、内面直股条痕文	覆土下層	PL20
TP 5	縄文土器	深鉢	長石・石英・織維	灰黄褐色	無文	覆土下層	PL20

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 1	磨石	9.1	9.6	5.4	661.6	鞍山岩	全面研磨 摺面全体に擦痕	覆土下層	PL22

第8号竪穴建物跡（第8・9図）

位置 調査区中央部のA 2 h4 区、標高 47 m ほどの台地縁辺部に位置している。

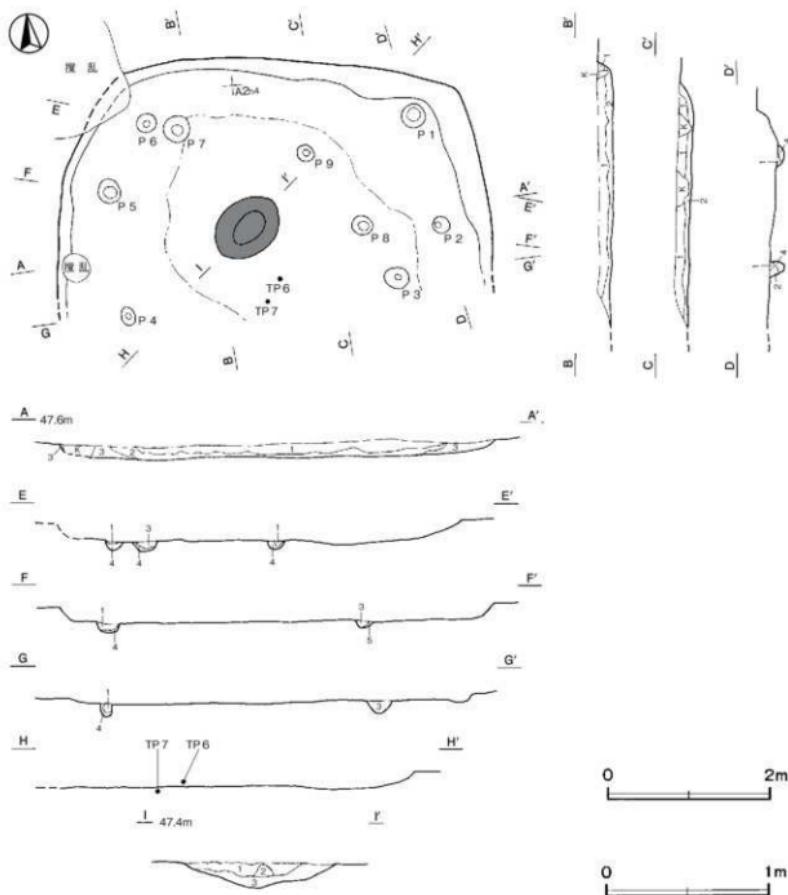
重複関係 本跡の覆土上面に、第2号方形周溝墓（第9号墳）の方台部が構築されている。

規模と形状 南部が削平されているため、規模は、東西軸は 5.25 m で、南北軸は 3.25 m しか確認できなかった。

隅丸方形で、主軸方向は N - 82° - W と推定される。壁は高さ 10 ~ 17 cm で、外傾している。

床 平坦で、炉周辺から南東方向にかけて踏み固められている。

炉 中央部に付設されており、長径 92 cm、短径 69 cm の橢円形である。地床炉で、深さ 15 cm ほど掘りくぼめて構築されている。



第8図 第8号竪穴建物跡実測図

炉土層解説

- 1 にふい赤褐色 ロームブロック中量。焼土粒子・炭化粒子少量 3 褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
2 暗赤褐色 ロームブロック中量。焼土粒子少量

ピット 9か所。P 1～P 7は深さ10～20cmで、配置及び形状から主柱穴と考える。P 8・P 9は深さ10cmで性格は不明である。

ピット土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量。焼土ブロック・炭化粒子少量 4 黒褐色 ロームブロック中量。炭化粒子微量
2 暗褐色 ローム粒子中量。炭化粒子少量 5 にふい黄褐色 ローム粒子中量。焼土粒子・炭化粒子少量
3 黒褐色 ロームブロック・炭化物・焼土粒子少量

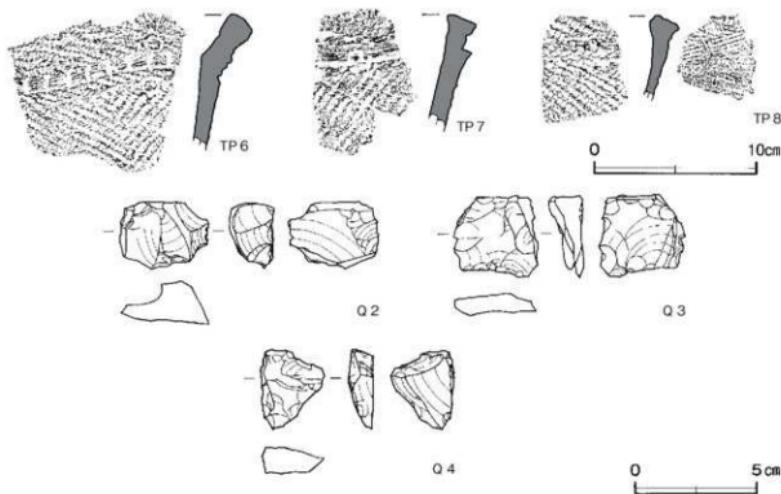
覆土 3層に分層できる。各層にロームブロックや焼土粒子が含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 3 暗褐色 ロームブロック中量。焼土粒子・炭化粒子少量
2 黒褐色 ロームブロック中量。焼土粒子少量

遺物出土状況 繩文土器片156点(深鉢), 石核2点, 刺片2点, 砧18点が出土している。TP 6・TP 7は炉周辺の覆土下層から廃棄された状態でそれぞれ出土している。TP 8, Q 2～Q 4はそれぞれ覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から前期初頭に比定できる。



第9図 第8号竪穴建物跡出土遺物実測図

第8号竪穴建物跡出土遺物観察表（第9図）

番号	種別	器種	施土	色調	文様の特徴	出土位置	備考
TP 6	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	にふい褐	口部縄文施文 口縄部手執竹管・円形竹管による刺突文 刷毛部外側上半部縄文による凹状模様	覆土下層	PL.21
TP 7	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	灰黄褐	口部縄文施文 口縄部内円形竹管による刺突文 刷毛部外面無縄文	覆土下層	PL.21
TP 8	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	にふい褐	口部縄文施文 刷毛部外側 RL 单括縄文 内面縫合条痕文	覆土中	PL.21

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 2	石核	27	37	18	16.1	珪質頁岩	原縫面残存 不定形小形剥片削出	覆土中	PL22
Q 3	石核	34	35	14	14.6	珪質頁岩	原縫面残存 不定形小形剥片削出	覆土中	PL22
Q 4	剥片	33	27	12	8.4	珪質頁岩	原縫面残存 多方向からの剥離痕	覆土中	PL22

表2 繩文時代堅穴建物跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規 模 長軸×短軸(m)	標 高 (cm)	底面	埋溝	内 部 施 設			覆 土	主な出土遺物	時 期	備 考	
								3個穴	蓋口	ビット					
6	A 2 b2	N - 18° - W	円形	(3.07) × (2.79)	14 - 23	平坦	-	3	-	4	1	-	人為	縄文土器	前期初頭 本跡→TM 9
7	A 2 g3	N - 81° - E	円形	4.04 × (2.16)	12 - 23	平坦	-	5	-	-	1	-	人為	縄文土器、石器、灘	前期初頭 本跡→TM 9
8	A 2 b4	N - 82° - W	圓角方形	5.25 × (3.25)	16 - 17	平坦	-	7	-	2	1	-	人為	縄文土器、石核、剥片	前期初頭 本跡→TM 9

(2) 土坑

第27号土坑(第10図)

位置 調査区南東部のC 3 a4 区、標高46 mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第13号方形周溝墓(第20号墳)に掘り込まれている。

規模と形状 東部が第13号方形周溝墓の周溝に掘り込まれているため、規模は長径1.28 mで、短径は1.10 mしか確認できなかった。梢円形で、長径方向はN - 20° - Wと推定される。深さは82 cmで、底面は平坦である。壁はほぼ直立している。

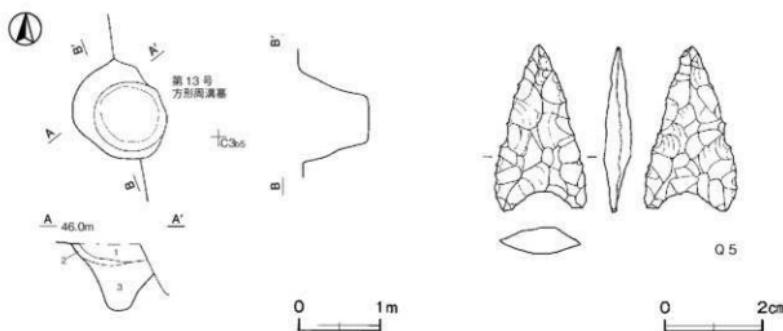
覆土 3層に分層できる。各層にロームブロック、焼土ブロック、炭化粒子が含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|----------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量 | 3 にぼい黄褐色 | ロームブロック多量 |
| 2 黒色 | ロームブロック・焼土ブロック中量・炭化粒子少量 | | |

遺物出土状況 石器1点(鐵)が覆土中から出土している。

所見 時期は、覆土と遺物、周囲の遺構との関係から中期と考えられる。



第10図 第27号土坑・出土遺物実測図

第27号土坑出土遺物観察表（第10図）

番号	基種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q5	漆	34	19	0.6	24	チャート	内面押付痕跡 四周無基盤	覆土中	PL.22

第28号土坑（第11図）

位置 調査区南東部のC 3 a4 区、標高 46 m ほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第13号方形周溝墓（第20号墳）に掘り込まれている。

規模と形状 東部以外は第13号方形周溝墓の周溝に掘り込まれているため、規模は長径 1.60 m で、短径は 1.20 m しか確認できなかった。楕円形で、長径方向は N - 50° - E と推定される。深さは 83cm で、底面は平坦であるが、中央やや北東よりに径 30cm、深さ 20cm ほどの小ビットが確認された。壁は直立している。

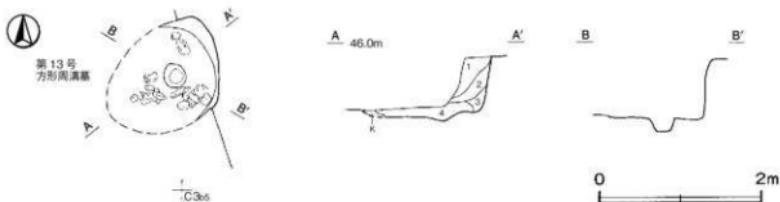
覆土 4 層に分層できる。各層にロームブロック、焼土ブロック、炭化物を含んでいることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|-----------------------------------|--------------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック・白色粒子中量、焼土ブロック・炭化物少量 | 3 黒褐色 ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量 | 4 にい青褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量 |

遺物出土状況 縄 18 点が、底面から遺棄された状態で出土している。縄は、火熱を受けたり、壊されたりした様子はない。小ビットの周辺を囲むように配置されているが、性格は不明である。

所見 時期は、覆土と周囲の遺構との関係から中期と考えられる。



第11図 第28号土坑実測図

第34号土坑（第12図）

位置 調査区南東部のB 3 12 区、標高 46 m ほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 本跡の上部に、第11号方形周溝墓（第18号墳）の方台部が構築されている。

規模と形状 径 1.20 m ほどの円形で、深さは 42cm である。底面は平坦で、壁はほぼ直立している。

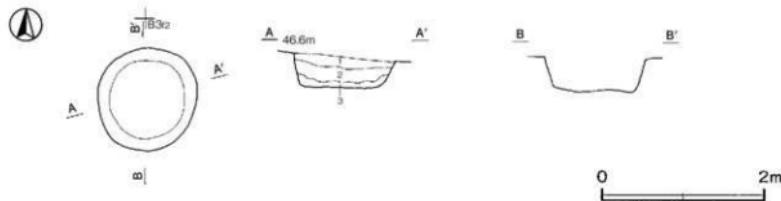
覆土 3 層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|-------------------------------|-----------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量 | 3 暗褐色 ロームブロック中量 |
| 2 黑褐色 ロームブロック中量 | |

遺物出土状況 縄文土器片 2 点（深鉢）が覆土中から出土している。遺物は細片のため、図示できなかった。

所見 時期は、出土土器から中期と考えられる。



第12図 第34号土坑実測図

第35号土坑（第13図）

位置 調査区南東部のB3e3区、標高46mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 本跡の上部に、第11号方形周溝墓（第18号墳）の方台部が構築されている。

規模と形状 開口部は径120mほどの円形である。底面は平坦で、規模は長径133m、短径117mほどの椭円形である。深さは60cmで、壁は底面から内傾し、くびれ部からやや外傾している。底面からくびれ部までの高さは38cmである。

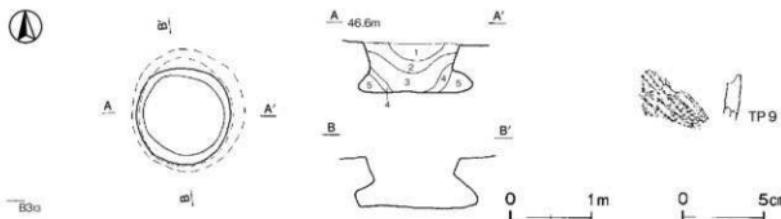
覆土 5層に分層できる。ロームブロック、焼土粒子、炭化粒子が含まれている層が不規則に堆積しており、埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・白色粒子 少量	3 暗褐色	ロームブロック中量
2 暗褐色	ロームブロック中量、白色粒子少量	4 暗褐色	ローム粒子中量

遺物出土状況 純文土器片2点（深鉢）が出土している。TP9は覆土中から出土している。

所見 形状から袋状土坑である。時期は、遺構の形状と出土土器から中期中葉と考えられる。



第13図 第35号土坑・出土遺物実測図

第35号土坑出土遺物観察表（第13図）

番号	種別	記種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP9	純文土器	深鉢	瓦石・石英・薺葉・赤色粒子	褐	RL 単脚純文	覆土中	

第37号土坑（第14図）

位置 調査区南東部のB3g3区、標高46mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第11号方形周溝墓（第18号墳）に掘り込まれている。

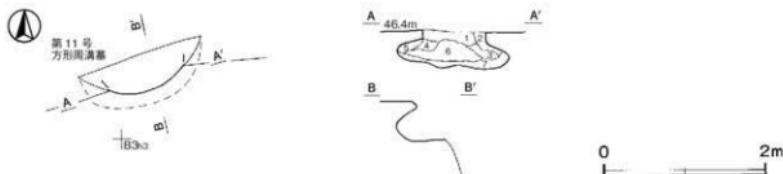
規模と形状 南部以外は、第11号方形周溝墓の周溝に掘り込まれているため、規模は、開口部が長径0.92m、短径0.14m、底面が長径1.58m、短径0.62mしか確認できなかった。円形または楕円形と推定でき、底面はやや凹凸がある。深さは44cmで、壁は底面から内側し、くびれ部からほぼ直立している。底面からくびれ部までの高さは30cmである。

覆土 7層に分層できる。ロームブロックが含まれる層が不規則に堆積しており、埋め戻されている。

土層解説

1	にふい黄褐色	ロームブロック中量	白色粒子少量	5	にふい黄褐色	ロームブロック中量	
2	褐	色	ロームブロック中量	6	黒	褐色	ロームブロック・白色粒子少量
3	灰	黄褐色	ローム粒子中量	7	褐	色	ローム粒子多量
4	暗	褐色	ロームブロック少量				白色粒子微量

所見 形状から袋状土坑である。遺物は出土していないが、時期は、遺構の形状と周囲の遺構との関係から中期中葉と考えられる。



第14図 第37号土坑実測図

表3 繩文時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
27	C 3a4	N - 20° - W	【楕円形】	1.28 × (1.10)	82	平坦	直立	人為	石器	本跡→TM20
28	C 3a4	N - 50° - E	【楕円形】	(1.60) × (1.20)	83	平坦	直立	人為	稚	本跡→TM20
34	B 3e2	-	円形	1.20 × 1.20	42	平坦	直立	人為	縄文土器	本跡→TM18
35	B 3e3	-	円形	1.24 × 1.20	60	平坦	内側・外傾	人為	縄文土器	本跡→TM18
37	B 3g3	-	【円形・椭円形】	(0.92) × (0.14)	44	凹凸	内側・直立	人為		本跡→TM18

2 弥生時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、土坑1基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

第8号土坑（第15図）

位置 調査区東部のB 3b3区、標高46mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第12号方形周溝墓（第19号墳）、第6号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 第12号方形周溝墓の周溝と第6号土坑に掘り込まれているため、規模・形状は明確ではないが、長径1.52m、短径1.06mほどの不整楕円形で、長径方向はN - 4° - Wと推定される。深さは72cmで、底面は平坦である。壁はほぼ直立している。

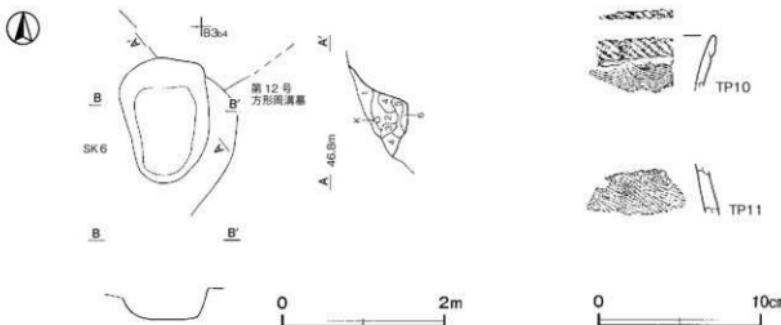
覆土 6層に分層できる。ロームブロックが含まれる層が不規則に堆積しており、埋め戻されている。

土層解説

1	褐	色	ローム粒子少量	4	褐	色	ロームブロック多量
2	褐	色	ローム粒子中量	5	黒	褐	ロームブロック少量
3	暗	褐色	ローム粒子中量	6	黒	褐	ローム粒子少量

遺物出土状況 弥生土器片 9点（広口壺）が出土している。TP10・TP11は、覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から後期前半と考えられる。



第15図 第8号土坑・出土遺物実測図

第8号土坑出土遺物観察表（第15図）

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP10	弥生土器	広口壺	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	口縁部織文原体押正 口縁部折り返し後 RL 単面織文施文 斜部4半周側面による連弧文	覆土中	PL21
TP11	弥生土器	広口壺	長石・石英	にぶい黄褐色	無文	覆土中	

3 古墳時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、方形周溝墓 14基、古墳 2基、土坑 3基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

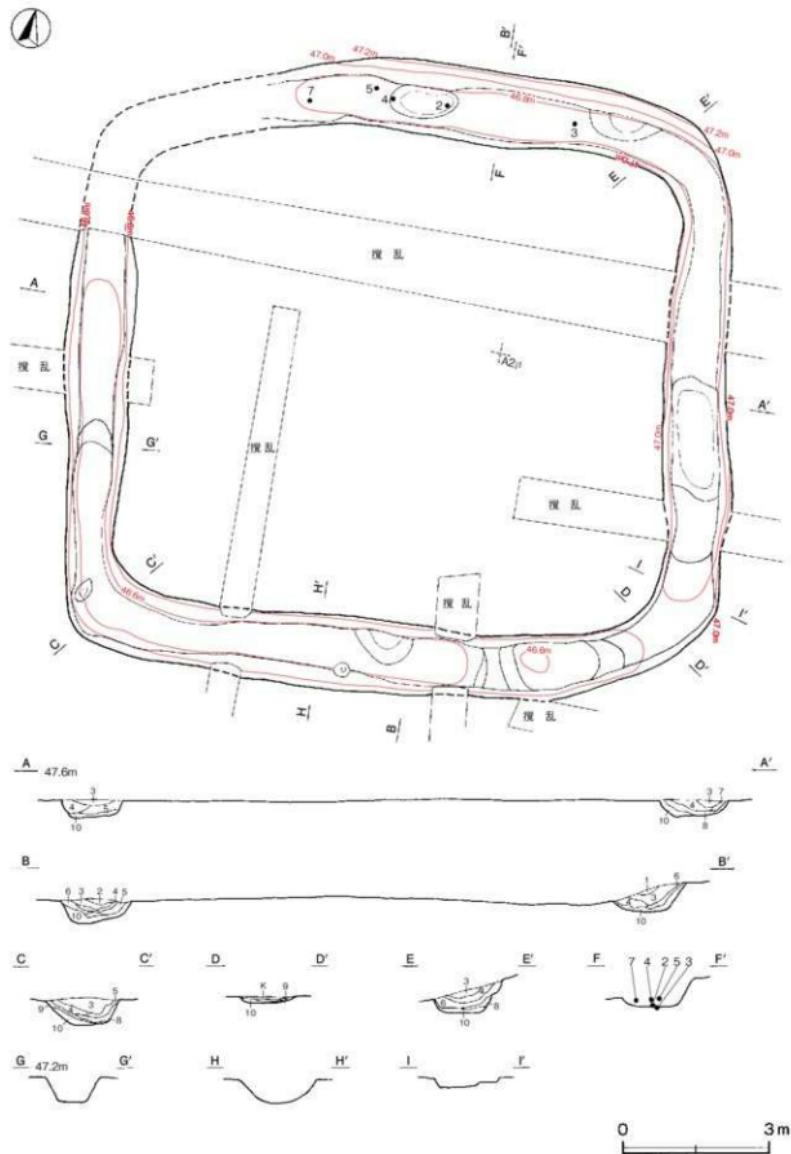
(1) 方形周溝墓

第1号方形周溝墓（第8号墳）（第16～19図）

位置 調査区中央部のA 1h8～B 2a2区、標高47mほどの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 内法が東西軸1128m、南北軸1040m、外法が東西軸1370m、南北軸1295mである。軸方向は座標北を基準とするとN-7°-Wで、周溝北西コーナー部が搅乱を受けているが、平面形は隅丸方形と推定される。方台部は上部が削平されており、盛土及び埋葬施設は不明である。

周溝 全周していると推定される。外縁部は北辺の中央でやや膨らみ、他辺はほぼ直線状である。上幅0.94～1.60m、下幅0.52～1.16m、深さは21～49cmで、断面は一様ではないがほぼ逆台形を呈する。底面はやや凸凹があり、各辺の中央が深く掘られている。北辺の中央が最も深く、南東コーナー部が最も浅くなっている。壁は方台部側、外縁部側とともにほぼ直立しているが、方台部側の傾斜が急である。



第16図 第1号方形周溝墓実測図

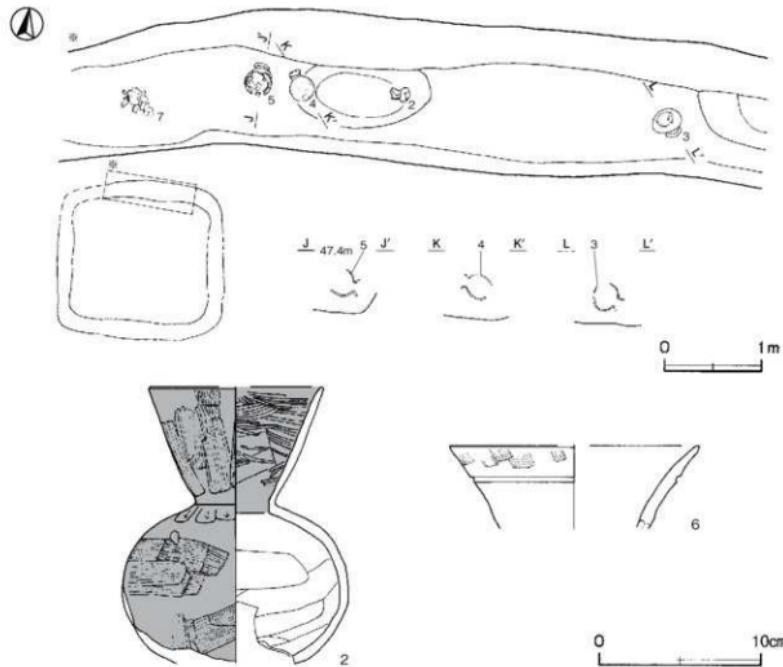
覆土 10層に分層できる。第8～10層はロームブロック・ローム粒子を主体とする褐色・暗褐色土で、構築後の早い段階において盛土及び壁面が崩落した流入土である。第5～7層はロームブロック・ローム粒子を含む黒褐色土で、盛土が崩落した流入土である。第1～4層は黒色・黒褐色土で、旧表土が周囲から流入した堆積状況を示している。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・細縫微量	6 黒褐色	ローム粒子少量
2 黒色	ローム粒子微量	7 黒褐色	ロームブロック少量
3 黒色	ローム粒子少量	8 暗褐色	ローム粒子中量
4 黒色	ロームブロック微量	9 黒褐色	ロームブロック中量
5 黒褐色	ローム粒子中量	10 黒褐色	ロームブロック多量

遺物出土状況 土器片54点（壺1、壺20、甕33）のほか、縄文土器片78点（深鉢）、石器1点（鐵）、礫7点（石英5、雲母片岩2）が、周溝北辺の覆土中層を中心に出土している。2～5は覆土中層から横位で出土しており、方台部から転落した状況を呈している。2～5は底部が打ち欠かれている。6は覆土中、7は覆土中層から出土している。

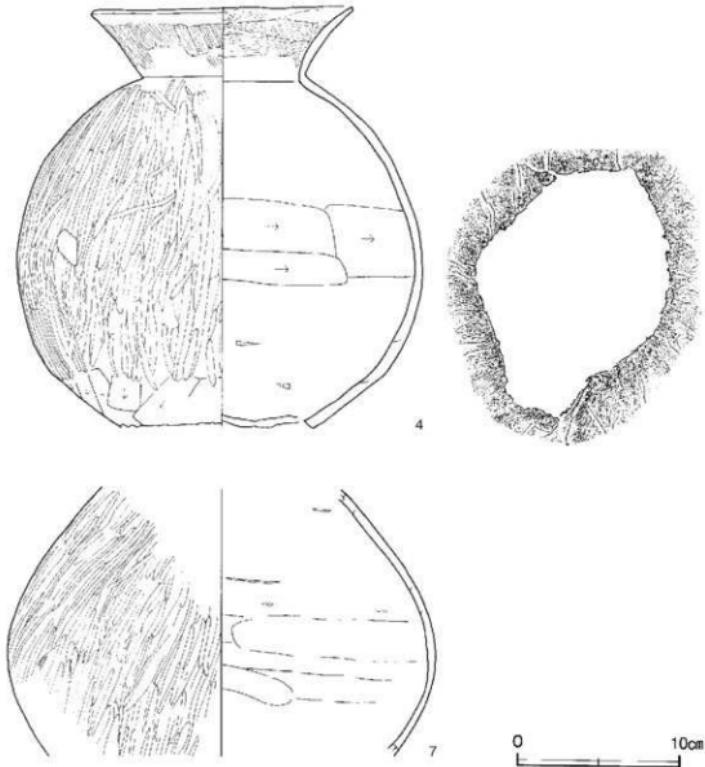
所見 時期は、出土土器から4世紀前半に比定できる。遺物は覆土中層から完形に近い状態で出土しており、構築後、一定期間が経過した段階で、方台部に据え置かれていたものが周溝内に転落したと考えられる。底部の打ち欠きは、葬送儀礼に伴うものと考えられる。



第17図 第1号方形周溝墓・出土遺物実測図



第18図 第1号方形周溝墓出土遺物実測図(1)



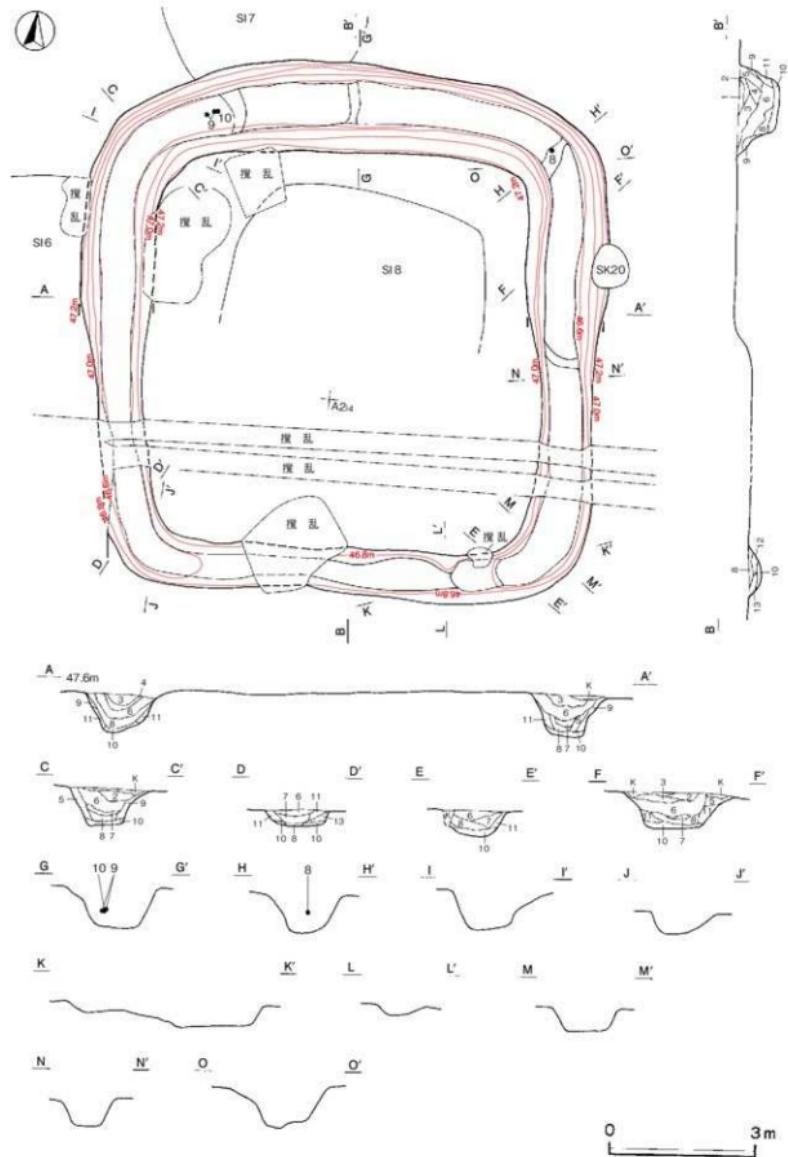
第19図 第1号方形周溝墓出土遺物実測図(2)

第1号方形周溝墓出土遺物観察表(第17~19図)

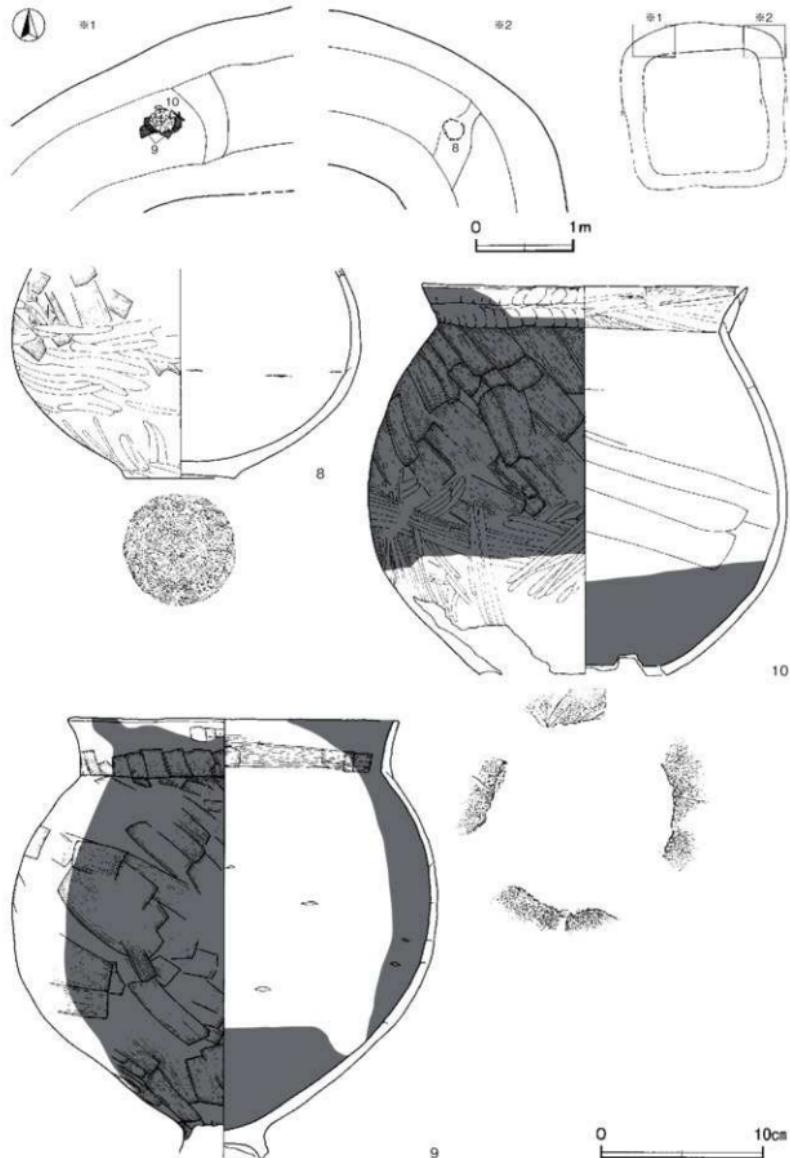
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2	土師器	壺	[106]	(16.9)	-	長石・石英、雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外側ハケ目調整後ヘラ削き 内面ヘラ削き 胸部外側ヘラ削り 体部外側ハケ目調整後ヘラ削き 内面ナデ 外縁・口縁部内面赤彩	覆土中層	50% PL17
3	土師器	壺	150	(25.6)	-	長石・石英、雲母	橙	普通	口縁部外側ハケ目調整後ヘラ削き 体部外側ヘラ削き 内面ナデ 外縁指擦痕 体部打ち込み	覆土中層	80% PL18
4	土師器	壺	159	(25.7)	-	長石・石英、雲母	にぶい橙	普通	口縁部外側ハケ目調整後ヘラ削き 内面ヘラ削き 体部外側下面ヘラ削り後全面ヘラ削き 内面中身ヘラ削り 底部打ち込み	覆土中層	90% PL18
5	土師器	壺	170	(27.7)	-	長石・石英、雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外側ハケ目調整後ナデ 内面ハケ目調整後外側ヘラ削き 内面指擦痕 底部打ち込み	覆土中層	90% PL18
6	土師器	壺	[153]	(5.1)	-	長石・石英、雲母・赤色粒子、画繩	明黄褐	普通	口縁部外側ハケ目調整 上部に沈線	覆土中	5%
7	土師器	壺	-	(16.4)	-	長石・石英、雲母	にぶい橙	普通	体部外側ヘラ削き 内面ヘラナデ	覆土中層	10%

第2号方形周溝墓(第9号墳)(第20・21図)

位置 調査区中央部のA 2 g2 ~ A 2 i5区、標高47 mほどの台地縁辺部に位置している。



第20図 第2号方形周溝墓実測図



第21図 第2号方形周溝墓・出土遺物実測図

重複関係 第6・7号竪穴建物跡を掘り込み、第8号竪穴建物跡の上部に本跡の方台部が構築されている。第20号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南部の方台部・周溝の上部が搅乱を受けているため、確認できた規模は内法が南北軸900m、東西軸8.62m、外法が南北軸10.78m、東西軸10.92mである。軸方向は座標北を基準とするとN-5°-Wで、平面形は隅丸方形である。方台部は削平されており、盛土及び埋葬施設は不明である。

周溝 全周している。外縁部は北辺の中央でやや膨らみ、他辺は直線状である。上幅1.45~1.85m、下幅0.33~0.86m、深さは22~85cmで、断面は一様ではないがほぼ逆台形を呈する。底面はほぼ平坦であるが、南部が浅くなっている。壁は方台部側、外縁部側とともにほぼ直立している。

覆土 13層に分層できる。第9~13層はロームブロック・ローム粒子を主体とする褐色・暗褐色土で、構築後の早い段階において盛土及び壁面から崩落した流入土である。第4~8層はロームブロック・ローム粒子を含む黒色・黒褐色土で、盛土が崩落した流入土である。第1~3層は黒色・黒褐色土で、旧表土が周囲から流入した堆積状況を示している。

土層解説

1 黒 色 ロームブロック微量	8 黒 褐 色 ローム粒子中量
2 黒 色 ローム粒子・赤色粒子微量	9 暗 褐 色 ロームブロック中量
3 黒 褐 色 ローム粒子中量、砂粒少量	10 暗 褐 色 ロームブロック多量
4 黒 色 ローム粒子少量	11 暗 褐 色 ローム粒子多量
5 黒 褐 色 ロームブロック中量	12 黒 褐 色 ロームブロック多量、炭化粒子少量
6 黒 色 ローム粒子中量、赤色粒子少量	13 暗 褐 色 ローム粒子中量
7 黒 褐 色 ローム粒子多量	

遺物出土状況 土師器片36点(壺2、台付壺1、甕33)のほか、繩文土器片55点(深鉢)、弥生土器片1点(広口壺)が、周溝北辺の覆土中層を中心に出土している。8は北東コーナー部の覆土中層から、9・10は北辺西の覆土中層から2個体がほぼ同一か所につぶれた状態で出土している。

所見 時期は、出土遺物から4世紀前半に比定できる。遺物は覆土中層から出土しており、構築後、一定期間が経過した段階で転落あるいは投棄されたものと考える。8は体部中央から底部にかけての個体で、方台部から周溝内に転落したものと考えられる。9・10はほぼ同一か所につぶれて重なった状態で出土しており、方台部に据え置かれたものが転落したとは考えにくいことから、葬送儀礼として周溝内に投棄・破碎された可能性がある。

第2号方形周溝墓出土遺物観察表(第21図)

番号	種 別	器種	口径	高 底	底 状	胎 土	色 調	地 成	手 法 の 特 徴	は か	出土位置	備 考
8	土師器	壺	-	(128)	6.8	長石・石英・赤色粒子	褐色	普通	体部外面ハケ目調整後ヘラ削き 底部多方向の 削り・削り	覆土中層	40% PL17	
9	土師器	台付壺	200	(268)	-	長石・石英・赤色粒子	黄褐色	普通	口縁部外面輪郭削痕・ハケ目調整後十子型 内面ハ ケ目調整 体部外面ハケ目調整 台部打ち欠き	覆土中層	70% PL17 保付着	
10	土師器	甕	200	(239)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐色	普通	口縁部外面輪郭削痕・指圧圧痕 内面ハケ目調整 後ヘラ削き 体部外面ハケ目調整後ヘラ削き 底部打ち欠き	覆土中層	80% PL17 保付着	

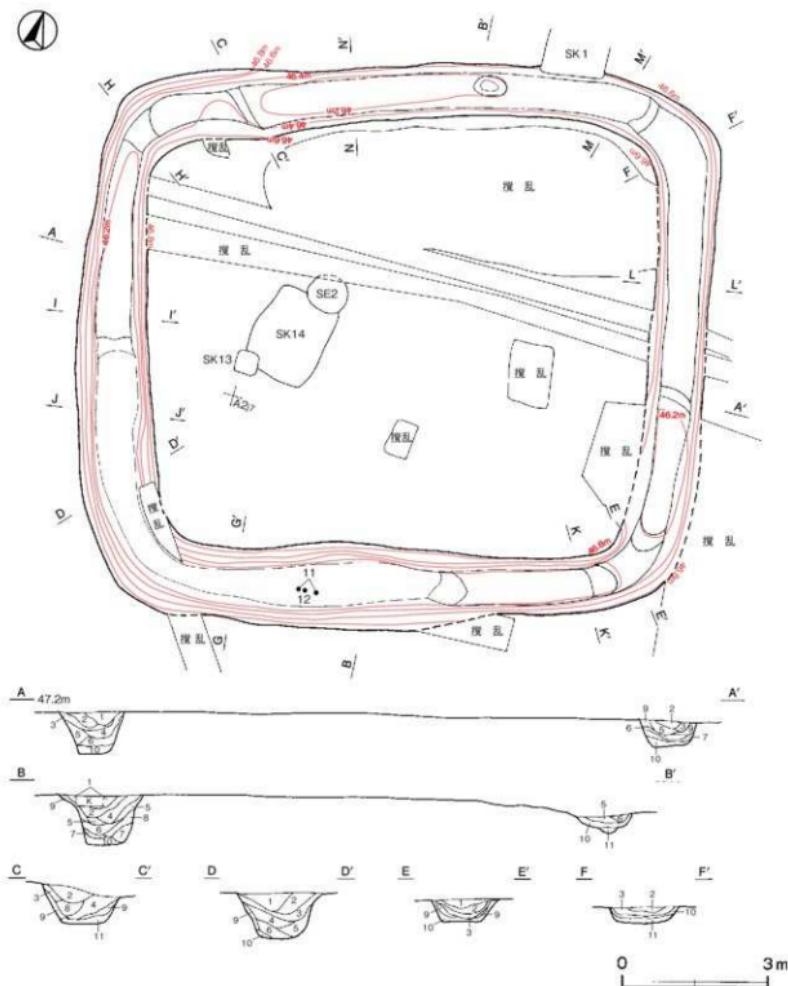
第3号方形周溝墓(第10号墳)(第22~24図)

位置 調査区中央部のA 2g6~B 2a9区、標高47mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第2号井戸、第1・13・14号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 内法が東西軸10.96m、南北軸9.38m、外法が東西軸12.98m、南北軸11.47mである。軸方向は座標北を基準とするとN-15°-Wで、平面形は隅丸長方形である。方台部は上部が削平されており、盛土及び埋葬施設は不明である。

周溝 全周している。上幅 1.05 ~ 1.78 m、下幅 0.40 ~ 0.92 m、深さは 30 ~ 102 cm で、断面は一様ではないがほぼ逆台形を呈する。外縁部は南辺の中央でやや膨らみ、他辺はほぼ直線状である。幅は南辺が最も広く、北東コーナー部が最も狭くなっている。底面は凹凸があり、深さは南辺の中央から西辺の中央にかけて深くなっている。壁は方台部側、外縁部側ともにはば直立



第22図 第3号方形周溝墓実測図(1)

しており、方台部側の傾斜が急である。

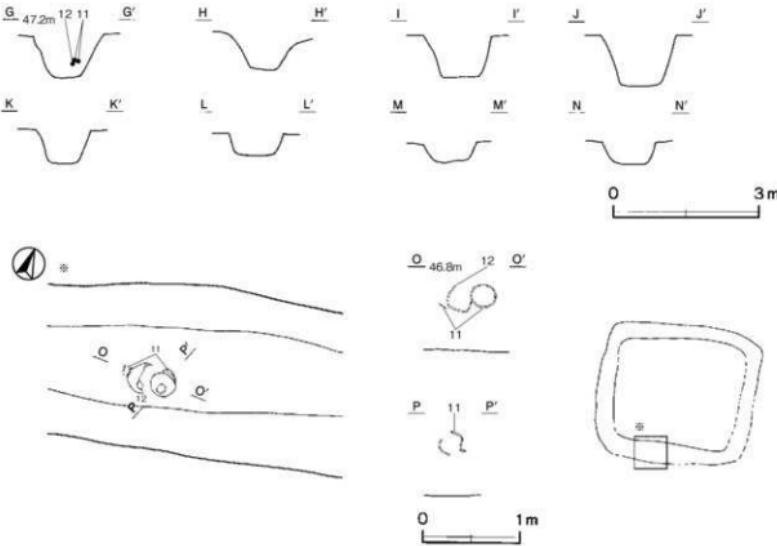
覆土 11層に分層できる。第10・11層はロームブロックを主体とする褐色土で、構築後の早い段階において盛土及び壁面が崩落した流入土である。第4～8層はロームブロック・ローム粒子を多量に含む暗褐色・黒褐色土で、盛土が崩落した流入土である。第9層は第4～8層の埋没過程での壁面の崩落土である。第1～3層は黒色・黒褐色土で、旧表土が周囲から流入した堆積状況を示している。

土層解説

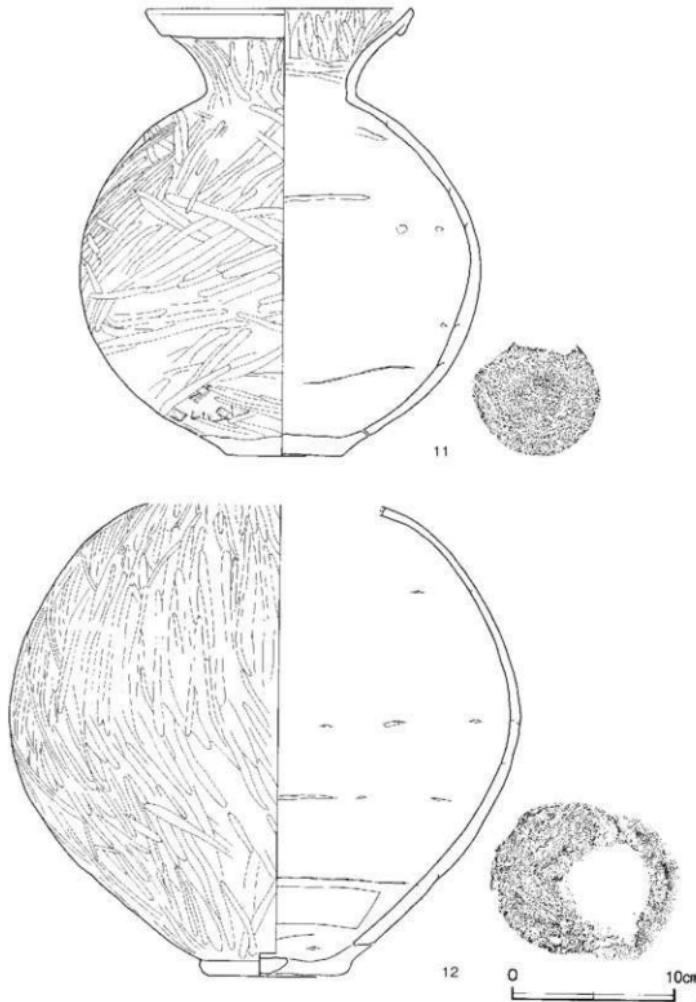
1 黒 土 色 ロームブロック少量	7 黒 暗 色 ロームブロック多量
2 黑 色 ロームブロック少量	8 黑 暗 色 ロームブロック中量
3 黑 暗 色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量	9 暗 暗 色 ロームブロック多量
4 黑 暗 色 ローム粒子多量	10 黑 色 ロームブロック多量、鹿沼バミス中量
5 暗 暗 色 ローム粒子多量、炭化物・燒土粒子少量	11 黑 色 ロームブロック多量
6 暗 暗 色 ローム粒子多量、燒土ブロック・炭化物少量	

遺物出土状況 土師器片9点(壺8、甕1)のほか、縄文土器片4点(深鉢)、礫2点が周溝の覆土中から出土している。隣接している11・12は、南辺中央の覆土中層から横位で出土している。ともに、方台部から転落した状況を呈しており、11はほぼ完形で底部は欠損していた。40cmほど離れた場所で出土した底部が接合したが、転落時に割れたものか、底部打ち欠きによるものかは不明である。12は口縁部から体部上位にかけて欠損しており、底部は内側から穿孔されている。

所見 時期は、出土遺物から4世紀前半に比定できる。遺物は覆土中層から出土しており、構築後、一定期間が経過した段階で、方台部に据え置かれたものが周溝内に転落したと考えられる。12の底部穿孔は葬送儀礼に伴うものと考えられる。



第23図 第3号方形周溝墓実測図(2)



第24図 第3号方形周溝墓出土遺物実測図

第3号方形周溝墓出土遺物観察表（第24図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
11	土師器	壺	162	27.5	7.3	致石・有茎・茎母 滑・赤色粒子・網目	明赤褐色	普通	口縁部外・内面へラ削き 体部外面ハケ目調整 底へラ削き 底部打ちえり	覆土中層	80% PL19
12	土師器	壺	-	(28.9)	8.8	致石・有茎・茎母 滑・赤色粒子・網目	橙	普通	体部外面へラ削き 底部内面から穿孔	覆土中層	70% PL19

第4号方形周溝墓（第11号墳）（第25図）

位置 調査区西部のB1b5～B1c9区、標高47mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第6号墳に掘り込まれている。

規模と形状 北部以外の大部分は調査区域外のため、内法が東西軸12.13m、南北軸3.46m、外法が東西軸14.35m、南北軸4.66mしか確認できなかった。軸方向は座標北を基準とするとN-5°-Wで、平面形は隅丸方形または隅丸長方形と推定される。方台部は上部が削平されており、盛土及び埋葬施設は不明である。

周溝 確認できた規模が限定されているが、他の方形周溝墓の規模と形状との比較から全周しているものと推定される。北辺の東で外縁部が膨らみ、幅が最も広くなり、北東コーナー部で方台部及び外縁部ともにくびれ、幅が最も狭くなっている。上幅0.98～1.91m、下幅0.55～1.45m、深さは19～39cmで、断面は一様ではないがほぼ逆台形を呈する。底面はやや凹凸があり、北辺の中央が最も深く、北東と北西コーナー部が浅くなっている。壁は方台部側、外縁部側ともにはば直立している。

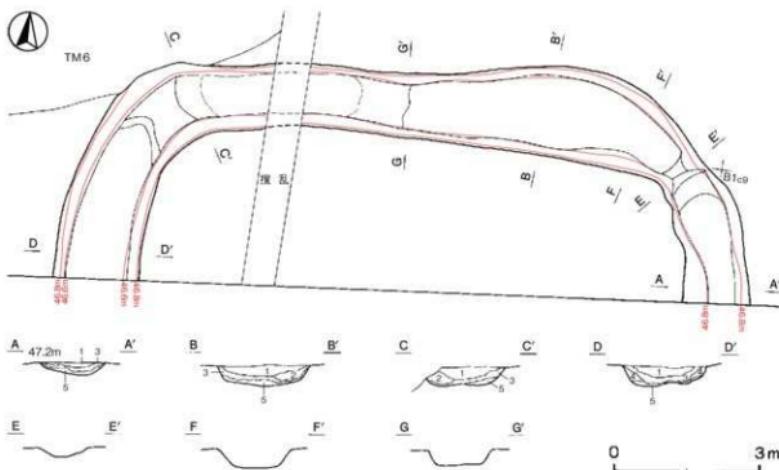
覆土 5層に分層できる。第5層は、ロームブロックを主体とする褐色土で、構築後の早い段階において盛土及び壁面が崩落した流入土である。第2～4層はロームブロック・ローム粒子を含む黒褐色土で、盛土が崩落した流入土である。第1層は黒色土で、旧表土が周囲から流入した堆積状況を示している。

土層解説

1 黒 色 ローム粒子微量	4 黒 棕 色 ロームブロック中量、焼土粒子微量
2 黒 棕 色 ローム粒子少量、焼土粒子微量	5 棕 色 ロームブロック多量、底泥バミス中量
3 黒 棕 色 ロームブロック少量	

遺物出土状況 土師器片2点(甕類)のほか、縄文土器片6点(深鉢)、環2点が、周溝の覆土中から出土している。遺物は細片のため、図示できなかった。

所見 時期は、判断できる遺物は出土していないが、遺構の形状と周囲の遺構との関係から4世紀前半と考えられる。



第25図 第4号方形周溝墓実測図

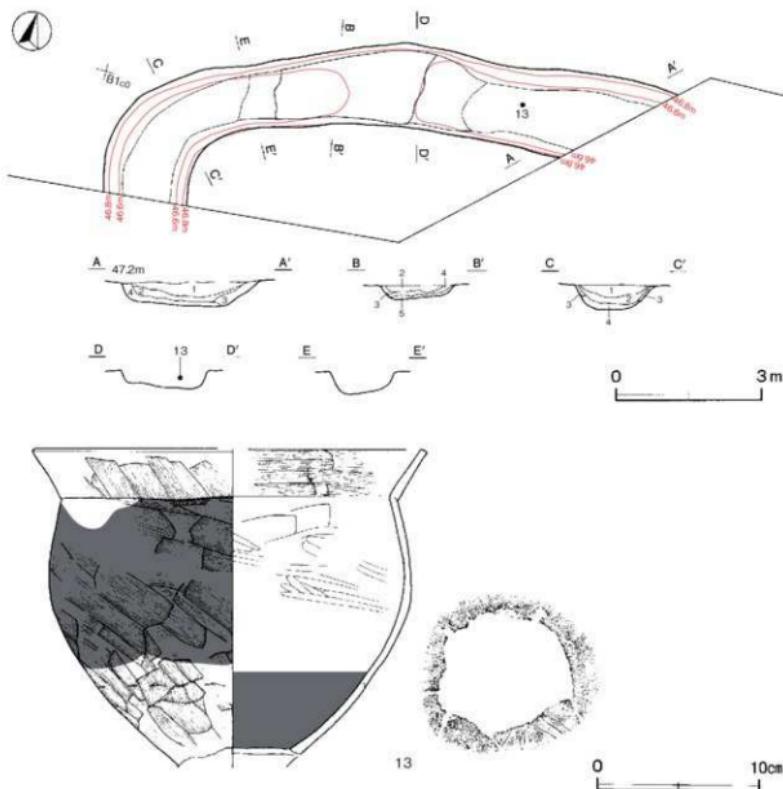
第5号方形周溝墓（第12号墳）（第26図）

位置 調査区中央部のB 1b0～B 2b2区、標高47mほどの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 北西部以外の大部分は調査区域外のため、内法が東西軸7.00m、南北軸2.40m、外法が東西軸10.10m、南北軸4.00mしか確認できなかった。軸方向は座標北を基準とするとN-6°-Wで、平面形は隅丸方形または隅丸長方形と推定される。方台部は上部が削平されており、盛土及び埋葬施設は不明である。

周溝 確認できた規模が限定されているが、他の方形周溝墓の規模と形状との比較から全周しているものと推定される。外縁部は北辺でやや膨らんでいる。上幅1.26～1.82m、下幅0.75～1.48m、深さは24～50cmで、断面は一様ではないがほぼ逆台形を呈する。底面は凹凸があり、北辺の西部が最も浅い。壁は方台部側、外縁部側ともには直立しているが、方台部側の方が傾斜が急である。

覆土 5層に分層できる。第5層はローム粒子を主体とする褐色土で、構築後の早い段階において盛土及び壁



第26図 第5号方形周溝墓・出土遺物実測図

面が崩落した流入土である。第2～4層はロームブロック・ローム粒子を含む黒褐色土で、盛土が崩落した流入土である。第1層は黒色土で、旧表土が周囲から流入した堆積状況を示している。

土層解説

1 黒 色 ローム粒子微量	4 黒 暗褐色 ロームブロック中量
2 黒 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量	5 暗褐色 ローム粒子多量
3 黒 暗褐色 ローム粒子中量	

遺物出土状況 土師器片6点(甕類)のほか、縄文土器片15点(深鉢)が周溝の覆土中から出土している。13は台部が打ち欠かれた台付甕で、覆土中層からつぶれた状態で出土している。

所見 時期は、出土土器から4世紀前半に比定できる。13は、覆土中層からつぶれた破片が不規則な方向で重なり出土している。構築後、一定期間が経過した段階で、儀礼が行われ、台部を打ち欠いた後、周溝内に投棄され、破碎された可能性がある。

第5号方形周溝墓出土遺物観察表(第26図)

番号	種 別	器種	口径	厚高	底様	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴	ほ か	出土位置	備 考
13 土師器	台付甕	[237]	(195)	-	長石・石英・ 黄鐵	にふい青褐	普通	1/2内部・内面ハケ目調 1/2外部・内面ハケ目調 1/2上面ハケ目調 1/2底部打らき	1/2内部ハケ目調 1/2外部ハケ目調 1/2上面ハケ目調 1/2底部打らき	覆土中層 底付着	80% PL19 底付着	

第6号方形周溝墓(第13号墳)(第27図)

位置 調査区中央部のA 23j～B 2a5区、標高47mほどの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 南部が調査区域外で、また方台部及び周溝の上部が擾乱を受けているため、確認できた規模は、内法が東西軸7.51m、南北軸5.55m、外法が東西軸8.90m、南北軸6.45mである。軸方向は座標北を基準とするとN-7°-Wで、平面形は隅丸方形または隅丸長方形と推定される。方台部は上部が削平されており、盛土及び埋葬施設は不明である。

周溝 確認できた規模が限定されているが、他の方形周溝墓の規模と形状との比較から全周しているものと推定される。外縁部は北辺でやや膨らみ、東西辺はほぼ直線状である。上幅0.65～1.20m、下幅0.40～0.88m、深さは30～56cmで、断面は一様ではないがほぼ逆台形を呈する。幅は北辺が最も広く、北西コーナー部が最も狭くなっている。底面はやや凹凸があり、深さは東辺の中央を最も浅く掘り残し、その南北を深く掘り込んでいる。壁は方台部側、外縁部側ともにほぼ直立しているが、方台部側の方が傾斜が急である。

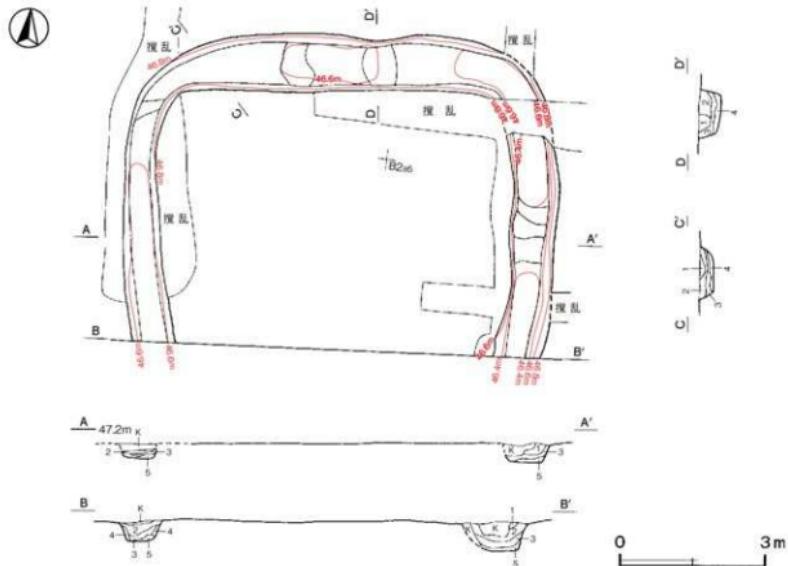
覆土 5層に分層できる。第5層は、ロームブロックを主体とする褐色土で、構築後の早い段階において盛土及び壁面が崩落した流入土である。第2～4層はロームブロック・ローム粒子を含む暗褐色・黒褐色土で、盛土が崩落した流入土である。第1層は黒色土で、旧表土が周囲から流入した堆積状況を示している。

土層解説

1 黒 色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	4 暗褐色 ローム粒子多量
2 黒 暗褐色 ロームブロック中量、白色粒子少量	5 暗褐色 ロームブロック多量
3 黒 暗褐色 ローム粒子多量	

遺物出土状況 土師器片1点(甕)のほか、縄文土器片4点(深鉢)が、周溝の覆土中から出土している。遺物は細片のため、図示できなかった。

所見 時期は、判断できる遺物は出土していないが、遺構の形状と周囲の遺構との関係から4世紀前半と考えられる。



第27図 第6号方形周溝墓実測図

第7号方形周溝墓（第14号墳）（第28図）

位置 調査区東部のB 2a8～B 2d0区、標高47mほどの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 西部は調査区域外のため、内法が南北軸9.73m、東西軸5.00m、外法が南北軸12.35m、東西軸6.40mしか確認できなかった。軸方向は座標北を基準とするとN-18°-Wで、平面形は隅丸長方形または隅九長方形と推定される。方台部は上部が削平されており、盛土及び埋葬施設は不明である。

周溝 確認できた範囲が限定されているが、他の方形周溝墓の規模と形状との比較から全周していると推定される。外線部は東辺の南部でやや膨らみ、南東コーナー部で直線状を呈し、幅が狭くなっている。上幅1.45～2.40m、下幅0.68～1.63m、深さは36～78cmで、断面は一様ではないがほぼ逆台形を呈する。底面はやや凹凸があり、深さは北辺が最も深く、北東コーナー部から南東コーナー部にかけて緩やかな傾斜で浅くなっている。壁は方台部側、外線部側とともにほぼ直立している。

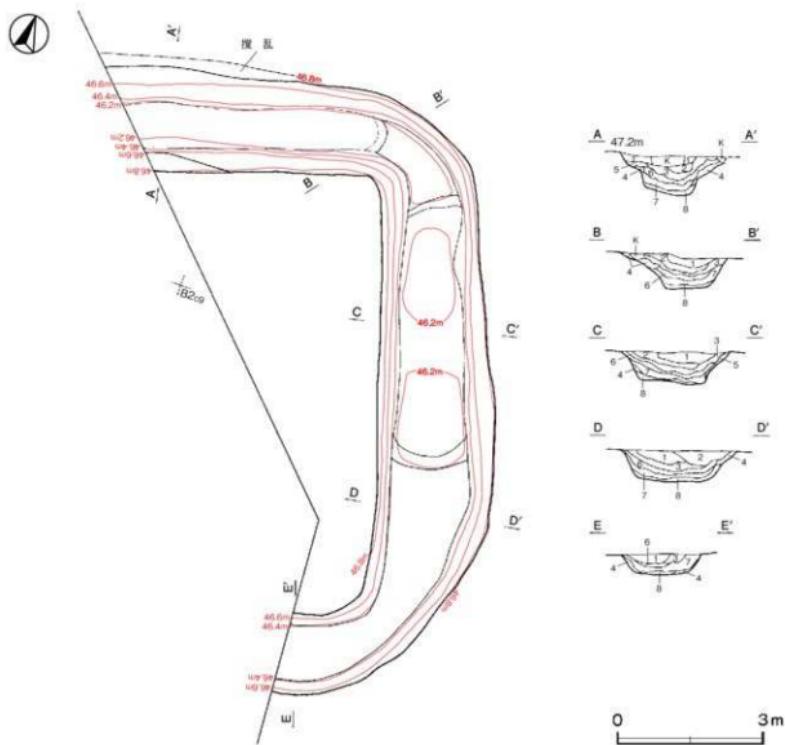
覆土 8層に分層できる。第8層は、ロームブロックを主体とする褐色土で、構築後の早い段階において盛土及び壁面が崩落した流入土である。第4～7層はロームブロック・ローム粒子を含む黒褐色・暗褐色土で、盛土が崩落した流入土である。第1～3層は黒色土で、旧表土が周囲から流入した堆積状況を示している。

土層解説

1 黒 色	ローム粒子少量、桃土粒子・炭化粒子微量	5 黒 褐 色	ロームブロック・炭化粒子少量
2 黒 色	ローム粒子・炭化粒子・砂粒少量	6 黒 褐 色	ローム粒子多量
3 黒 色	ローム粒子少量	7 黒 褐 色	ロームブロック中量、炭化粒子少量
4 暗 褐 色	ローム粒子多量	8 黑 色	ロームブロック多量

遺物出土状況 土師器片5点(壺)のほか、縄文土器片26点(深鉢25、小形壺1)が、周溝の覆土中から出土している。遺物は細片のため、図示できなかった。

所見 時期は、判断できる遺物は出土していないが、遺構の形状や周囲の遺構との関係から4世紀前半と考えられる。



第28図 第7号方形周溝墓実測図

第8号方形周溝墓（第15号墳）（第29図）

位置 調査区東部のA 3j1～B 3b3区、標高47mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第6・9号土坑に掘り込まれている。

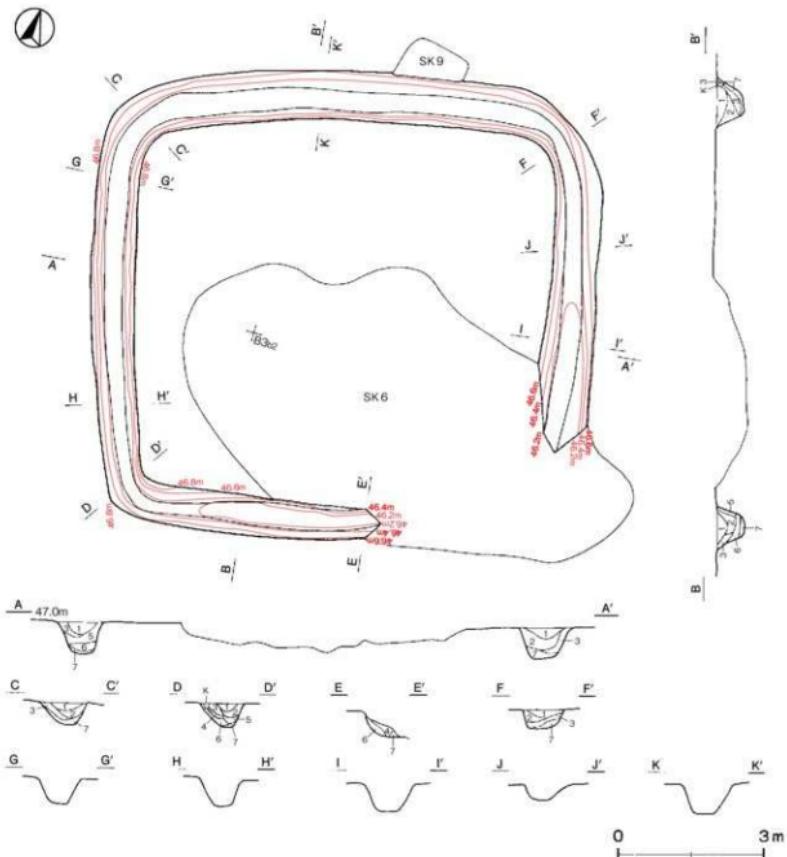
規模と形状 内法が東西軸9.10m、南北軸8.18m、外法が東西軸10.42m、南北軸9.62mである。軸方向は座標北を基準とするとN-14°-Wで、平面形は隅丸長方形である。方台部は上部が削平されており、盛土及び埋葬施設は不明である。

周溝 全周している。方台部側、外縁部側ともに直線状である。上幅 0.70 ~ 1.08 m、下幅 0.20 ~ 0.48 m、深さは 32 ~ 60 cm で、断面は一様ではないがほぼ逆台形を呈する。底面は平坦で、北辺と東辺の中央部がやや深くなっている。壁は方台部側、外縁部側とともにほぼ直立している。

覆土 7 層に分層できる。第 7 層は、ロームブロックを主体とする褐色土で、構築後の早い段階において盛土及び壁面が崩落した流入土である。第 2 ~ 6 層はロームブロック・ローム粒子を含む黒褐色・暗褐色土で、盛土が崩落した流入土である。第 1 層は黒色土で、旧表土が周囲から流入した堆積状況を示している。

土層解説

1 黒 色 ローム粒子微量	5 線 褐 色 ロームブロック中量
2 黒 褐 色 ローム粒子少量	6 黒 褐 色 ロームブロック少量
3 線 褐 色 ローム粒子少量	7 褐 色 ロームブロック多量
4 線 褐 色 ロームブロック少量	



第 29 図 第 8 号方形周溝墓実測図

遺物出土状況 土師器片4点(壺類)のほか、縄文土器片9点(深鉢)、弥生土器片13点(広口壺)、礫1点が、周溝の覆土中から出土している。遺物は細片のため、図示できなかった。

所見 時期は、判断できる遺物は出土していないが、遺構の形状や周囲の遺構との関係から4世紀前半と考えられる。

第9号方形周溝墓(第16号墳)(第30・31図)

位置 調査区中央部のA 2f7 ~ A 2g9区、標高47mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第7号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 大部分が調査区域外にあるため、内法が南北軸0.46m、外法が東西軸10.48m、南北軸1.72mしか確認できなかった。軸方向及び平面形は不明であるが、南辺の中央を掘り残して、陸橋部としている可能性がある。

周溝 上幅1.20~1.52m、下幅0.52~0.96m、深さは42~60cmで、断面はほぼ逆台形を呈する。底面は平坦で、壁は方台部側、外縁部側とともに外傾している。

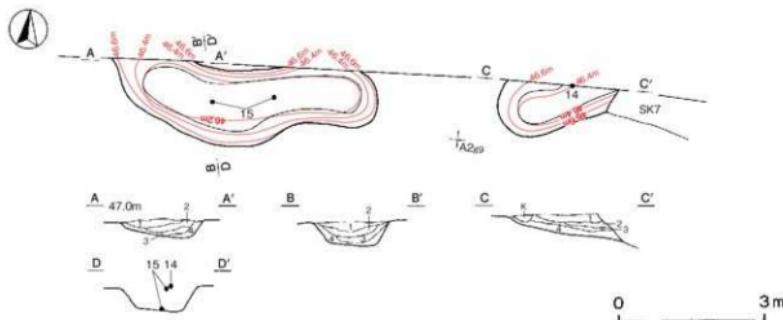
覆土 4層に分層できる。第4層は、ロームブロックを主体とする褐色土で、構築後の早い段階において盛土及び壁面が崩落した流入土である。第2・3層はロームブロックを含む黒褐色・暗褐色土で、盛土が崩落した流入土である。第1層は黒色土で、旧表土が周囲から流入した堆積状況を示している。

土層解説

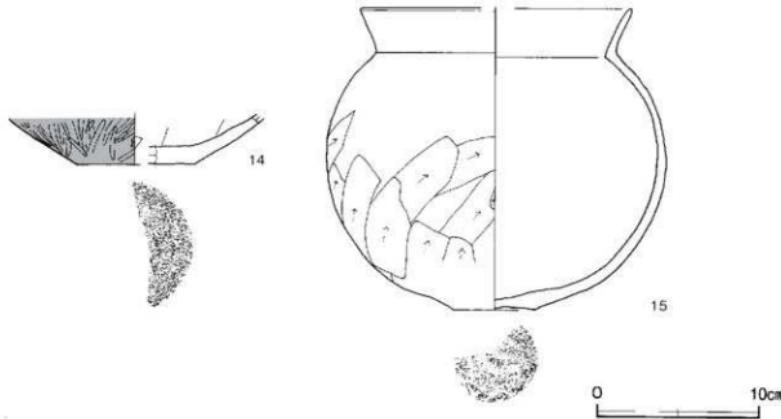
1 黒 色	ローム粒子・炭化粒子少量	3 暗 褐 色	ロームブロック中量
2 黒 褐 色	ロームブロック中量、炭化粒子少量	4 褐 色	ロームブロック多量

遺物出土状況 土師器片9点(壺2、壺7)のほか、縄文土器片3点(深鉢)、弥生土器片12点(広口壺)が、周溝の覆土中から出土している。14・15は南辺の陸橋部を挟んだ東西から出土している。14は東辺の覆土上層から出土している。15は西辺の覆土上層から下層にかけ出土しており、方台部の崩落とともに流れ込んだ様相を呈している。

所見 時期は、出土土器から4世紀前半に比定できる。当遺構は、遺構の遺存状態が不良で判断はできないが、周溝の中央部に陸橋部をもつタイプの可能性がある。当遺構は調査区の北端に位置しており、これより北に同様の形状の方形周溝墓が広がっている可能性がある。



第30図 第9号方形周溝墓実測図



第31図 第9号方形周溝墓出土遺物実測図

第9号方形周溝墓出土遺物観察表（第31図）

番号	種類	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
14	土師器	壺	-	(3.1)	(7.4)	長石・石英・雲母・赤色粒子	赤褐色	普通	底部外面へテラ削き 内面へラナデ 底部ハラナデ 外面赤彩	覆土上層	5%
15	土師器	壺	[166]	18.5	5.0	長石・石英・雲母・赤色粒子・細理	浅黄褐色	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外面へテラ削り 底部 ハラ削り	覆土上層～下層	70% PL16

第10号方形周溝墓（第17号墳）（第32図）

位置 調査区東部のA3g5～A3j6区、標高47mほどの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 東部が調査区域外のため、内法が南北軸9.12m、東西軸7.52m、外法が南北軸10.70m、東西軸8.54mしか確認できなかった。軸方向は座標北を基準とするとN-20°-Wで、平面形は隅丸長方形と推定される。方台部は上部が削平されており、盛土及び埋葬施設は不明である。

周溝 確認できた範囲が限定されているが、他の方形周溝墓の規模と形状との比較から全周しているものと推定される。外縁部は西辺の中央部でやや膨らみ、北辺及び南辺はほぼ直線状である。上幅0.78～1.62m、下幅0.31～0.82m、深さは26～77cmで、断面は一様ではないがほぼ逆台形を呈する。底面はやや凹凸があり、確認できた各辺の中央が深く掘り込まれ、特に西辺の中央部が最も深い。北西及び南西のコーナー部は浅く掘り残されている。壁は方台部側、外縁部側とともにほぼ直立しているが、方台部側の傾斜が急である。

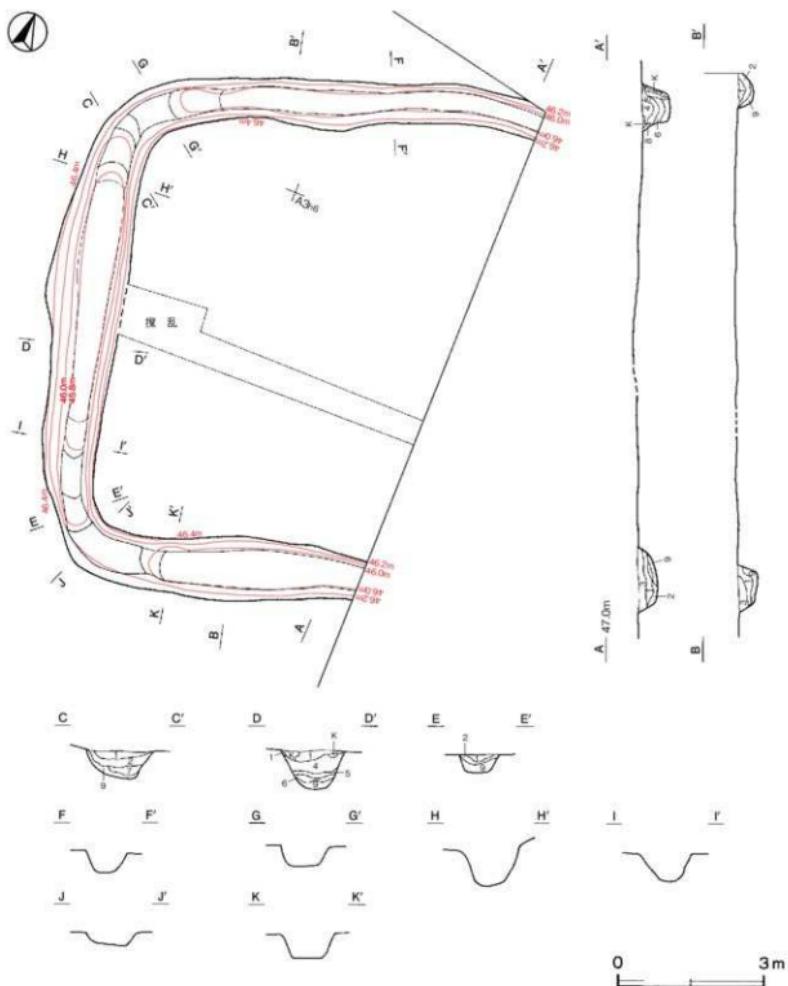
覆土 9層に分層できる。第9層は、ロームブロックを主体とする褐色土で、構築後の早い段階において盛土及び壁面が崩落した流入土である。第4～7層はロームブロック・ローム粒子を含む暗褐色土で、盛土が崩落した流入土で、北辺及び西辺の中央で堆積が確認できた。第8層は第4～7層の埋没過程での壁面の崩落土である。第1～3層は黒色・黒褐色土で、旧表土が周囲から流入した堆積状況を示している。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック微量	6 暗褐色	ロームブロック微量
2 黒色	ローム粒子少量	7 暗褐色	ローム粒子少量
3 黒褐色	ローム粒子微量	8 褐色	ロームブロック中量
4 褐褐色	ロームブロック少量	9 褐色	ロームブロック多量
5 暗褐色	ローム粒子微量		

遺物出土状況 土師器片1点(甕)のほか、縄文土器片4点(深鉢)が、周溝の覆土中から出土している。遺物は細片のため、図示できなかった。

所見 時期は、判断できる遺物は出土していないが、遺構の形状や周囲の遺構との関係から4世紀前半と考えられる。



第32図 第10号方形周溝墓実測図

第 11 号方形周溝墓（第 18 号墳）（第 33・34 図）

位置 調査区南東部の B 2c0 ~ B 3g4 区。標高 47 m ほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 37・38 号土坑を掘り込み、第 34・35 号土坑の上に当遺構の方台部が構築されている。第 33 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 内法が南北軸 1286 m、東西軸 1265 m、外法が南北軸 1740 m、東西軸 1550 m である。軸方向は座標北を基準とすると N - 16° - W で、平面形は隅丸方形である。方台部は上部が削平されており、盛土及び埋葬施設は不明である。

周溝 全周している。上幅 1.37 ~ 3.20 m、下幅 0.52 ~ 1.96 m、深さは 52 ~ 150 cm で、断面は一様ではないがほぼ逆台形を呈する。外縁部は北辺と南辺の中央部で大きく膨らみ、東辺と西辺はほぼ直線である。幅は北辺と南辺が広く、北西及び南東コーナー部が極端に狭くなっている。底面は凹凸があり、各辺の中央部が深く掘られており、特に南辺は確認面からの深さが 150 cm と最も深くなっている。各コーナー部は浅く掘り残されている。壁は方台部側、外縁部側ともにはば直立しており、方台部側の傾斜が急である。

覆土 11 層に分層できる。第 8 ~ 11 層はロームブロックを主体とする褐色・にびい黄褐色土で、構築後の早い段階において方台部側の盛土及び壁面が崩落した流入土である。第 5 ~ 7 層はロームブロック・ローム粒子を中量以上含む暗褐色土で、第 8 ~ 11 層堆積後、時間差のはほとんどない状況で、外縁部側から流入した様相を呈している。北辺・西辺・南辺中央部の掘り込みの深い部分でこのような堆積状況が顕著である。第 4 層は埋没過程での壁面の崩落土である。第 1 ~ 3 層は黒色・黒褐色土で、旧表土が周囲から流入した堆積状況を示している。

土層解説

1 黒 色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	7 暗 褐 色	ロームブロック多量
2 黒 褐 色	ロームブロック少量	8 褐 色	ローム粒子中量
3 黒 色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	9 にびい黄褐色	ロームブロック多量
4 褐 色	ロームブロック中量	10 褐 色	ロームブロック中量、鹿沼バミス少量
5 暗 褐 色	ロームブロック中量	11 褐 色	ロームブロック多量、鹿沼バミス少量
6 暗 褐 色	ローム粒子多量		

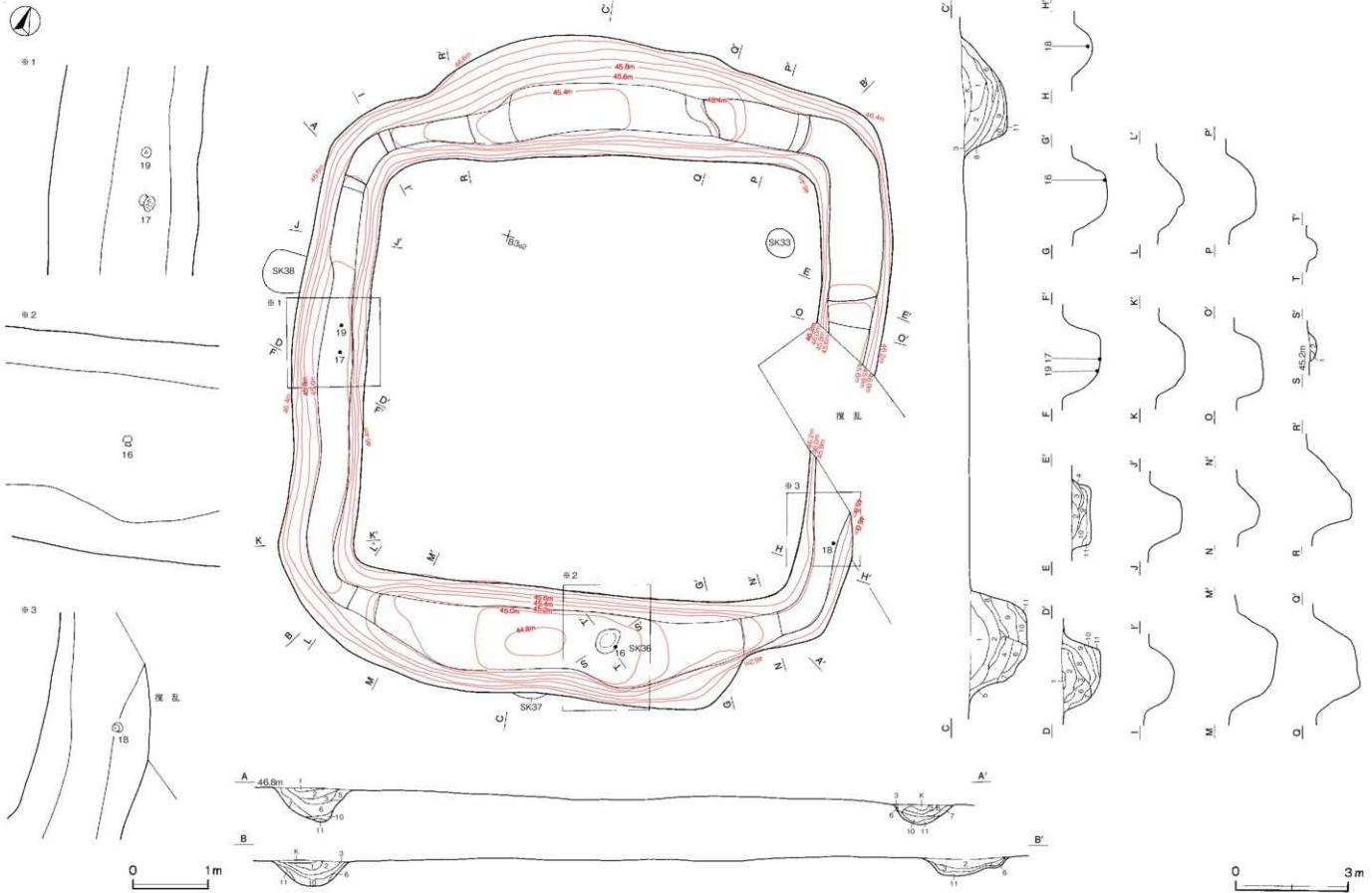
周溝内土坑（第 36 号土坑） 南辺の中央部で確認した。長径 0.75 m、短径 0.57 m の楕円形で、長径方向は N - 37° - E である。深さ 20 cm で底面は平坦である。壁は外傾している。性格は不明である。覆土は、2 層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

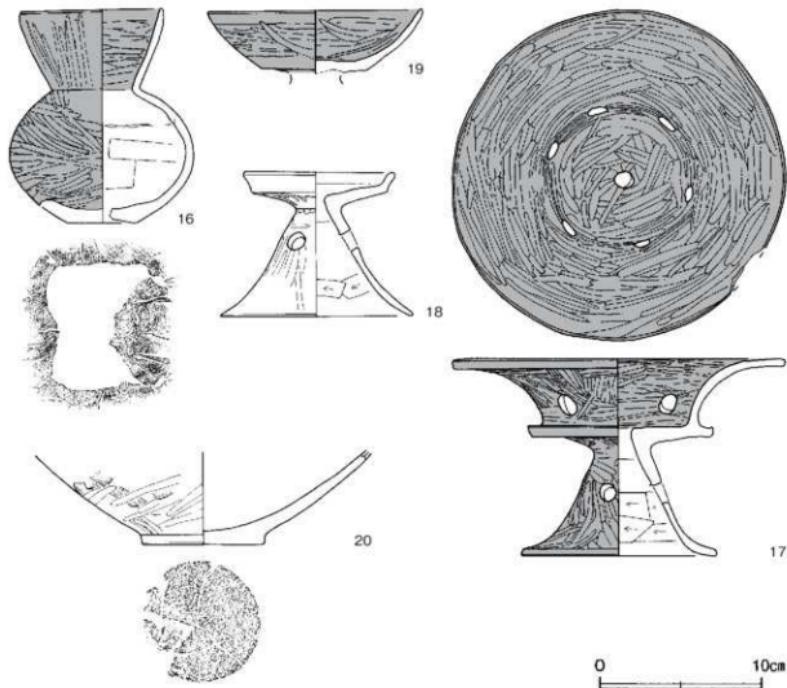
周溝内土坑土層解説

1 褐 色	ロームブロック中量、鹿沼バミス少量	2 褐 色	ロームブロック多量、鹿沼バミス少量
-------	-------------------	-------	-------------------

遺物出土状況 土師器片 25 点（壇 1、器台 1、装飾器台 1、高坏 1、壺 2、甕 19）のほか、繩文土器片 32 点（深鉢）、弥生土器片 16 点（広口壺）、甕 2 点が、周溝の覆土中から出土している。16 は南辺中央部の覆土下層から横位で出土しており、底部は穿孔されている。17・19 は西辺中央部の底面から近接してそれぞれ出土している。17 はほぼ完形で横位で出土している。19 は脚部が欠損しており、坏部のみ逆位で出土している。18 は東辺南の覆土下層から正位の状態で、20 は南辺の覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から 4 世紀前半に比定できる。当遺構は、今回確認された当遺跡の方形周溝墓の中で最大規模である。また、底面及び覆土下層から小形精製土器が出土しており、他の方形周溝墓と出土遺物及び出土層位が異なる。構築後、早い時期に葬送儀礼が行われ、周溝内に転落もしくは遺棄されたと考えられる。





第34図 第11号方形周溝墓出土遺物実測図

第11号方形周溝墓出土遺物観察表(第34図)

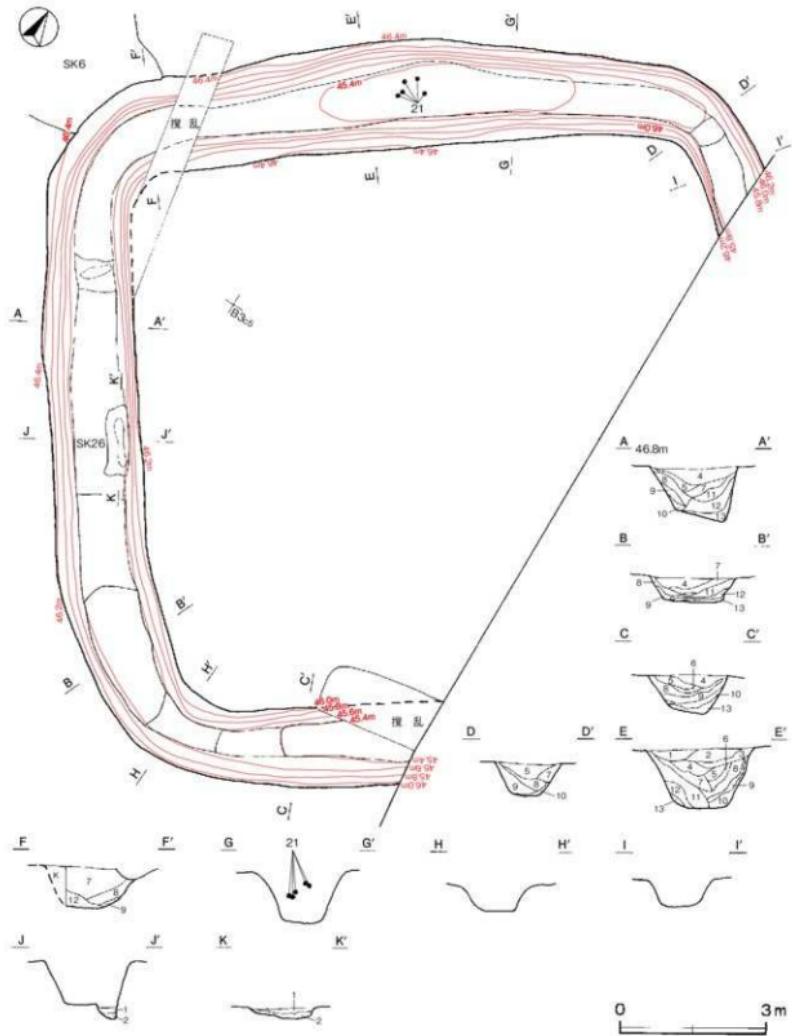
番号	種別	器種	口径	覆高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
16	土師器	壇	8.5	13.2	[4.1]	長石・石英、赤色粒子	細纖	にぶい黄澄	普通 内面ヘラナデ 底部内面から擦痕	山頂部外、内面ヘラ磨き 底部内面ヘラ磨き 底部内面赤彩	覆土下層 90% PL16
17	土師器	表裏合	20.3	12.1	11.9	明赤褐色	普通	山頂部外、内面ヘラ磨き	脚部外面ヘラ磨き 内面ヘラ磨き 脚部内面ヘラ磨き 脚部内孔3箇所	底面 95% PL16	
18	土師器	器台	8.9	8.9	11.6	長石・石英、赤色粒子	輕	普通	多大部外面ヘラ磨き 内面ナデ 脚部外面ヘラ磨き 内面ヘラ磨き 脚部内孔3箇所	覆土下層 90% PL16	
19	土師器	高環	13.0	[3.9]	-	長石・石英、赤色粒子	にぶい橙	普通	環部外、内面ヘラ磨き 外、内面赤彩	底面 50% PL16	
20	土師器	壺	-	(5.7)	7.4	長石・石英、赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ハケ目調節後ヘラ磨き 内面ヘラナデ 底面ヘラナデ	覆土中 30%	

第12号方形周溝墓(第19号墳)(第35~37図)

位置 調査区東部のA 3j4 ~ B 3e6区、標高47mほどの台地縁辺部に位置している。

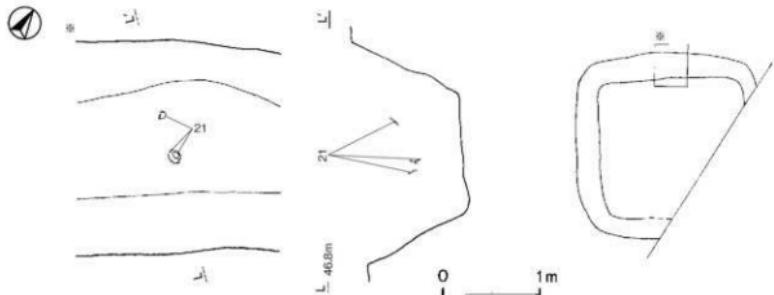
重複関係 第8号土坑を掘り込み、第6号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 東部が調査区域外のため、内法が東西軸12.55m、南北軸12.08m、外法が東西軸14.87m、南北軸15.18mしか確認できなかった。軸方向は座標北を基準とするとN-34°-Wで、平面形は隅丸方形と推定される。方台部は上部が削平されており、盛土及び埋葬施設は不明である。



第35図 第12号方形周溝墓実測図(1)

周溝 確認できた範囲が限定されているが、他の方形周溝墓の規模と形状との比較から全周しているものと推定される。上幅1.36～2.20m、下幅0.47～1.16m、深さは51～125cmで、断面は一様ではないがほぼ逆台形を呈する。外縁部は北辺の中央部でやや膨らみ、西辺及び南辺はほぼ直線状である。幅は北辺で広く、確認さ



第36図 第12号方形周溝墓実測図(2)

れた各コーナー部で狭くなっている。底面は凹凸があり、各辺の中央部が深く掘られており、特に北辺が確認面からの深さが125cmと最も深くなっている。北東及び南西コーナー部は、浅く掘り残されている。壁は方台部側、外縁部側ともには直立している。

覆土 13層に分層できる。第11～13層はロームブロックを主体とする褐色土で、構築後の早い段階において方台部側の盛土及び壁面が崩落した流入土である。第8～10層はロームブロック・ローム粒子を中量以上含む褐色・暗褐色・黒褐色土で、第11～13層堆積後、時間差のほとんど無い状況で外縁部側から流入した様相を呈している。北辺・西辺中央部の掘り込みの深い部分でこのような堆積状況は顕著である。第5～7層はロームブロック・ローム粒子を含む黒褐色・暗褐色土で、盛土が崩落した流入土である。第1～4層は黒色・黒褐色土で、旧表土が周間から流入した堆積状況を示している。

土層解説

1 黒 褐 色	ローム粒子少量、砂粒微量	8 黒 褐 色	ローム粒子中量
2 黒 色	ローム粒子微量	9 暗 褐 色	ローム粒子多量
3 黒 色	ロームブロック微量	10 褐 色	ロームブロック多量、鹿沼バミス少量
4 黒 褐 色	ロームブロック少量、砂粒微量	11 褐 色	ロームブロック中量、鹿沼バミス微量
5 黒 褐 色	ロームブロック少量	12 褐 色	ロームブロック多量、鹿沼バミス微量
6 暗 褐 色	ローム粒子少量	13 褐 色	ローム粒子多量、鹿沼バミス微量
7 黒 褐 色	ローム粒子少量		

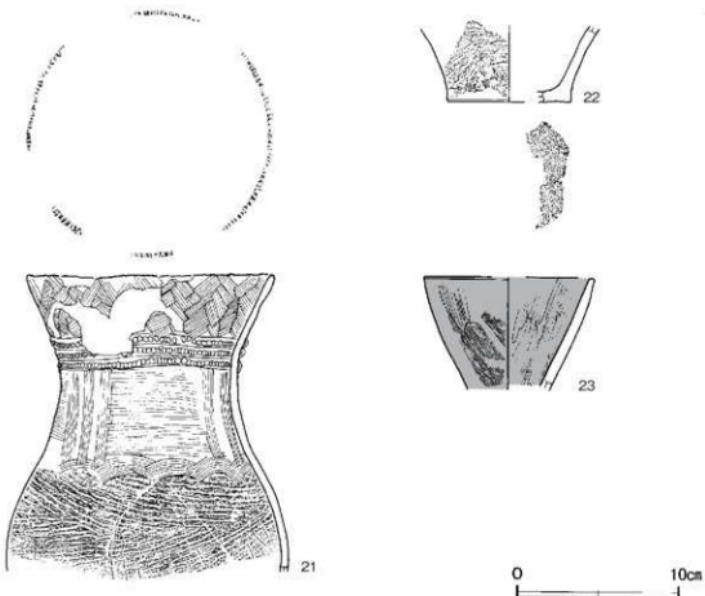
周溝内土坑(第26号土坑) 西辺中央部の方台部側で確認した。長軸1.41m、短軸0.48mの不整長方形で、長軸方向はN-32°-Wである。深さ29cmで底面は平坦である。壁は外傾している。性格は不明である。覆土は、2層に分層できる。各層にロームブロックが多量に含まれていることから埋め戻されている。

周溝内土坑土層解説

1 暗 褐 色	ロームブロック多量
---------	-----------

遺物出土状況 弥生土器片59点(広口壺)、土師器片29点(壺1、甌類28)のほか、繩文土器片62点(深鉢)、礎3点(石英)が、周溝の覆土中から出土している。21は胴部中位から下部が欠損しており、北辺中央部の覆土中層から割れた状態で出土している。22は北辺中央部の覆土中から、23は西辺中央部の覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から4世紀前半に比定できる。当遺跡の方形周溝墓群の中で、唯一軸線が大きく異なっている。造墓集団の違いやわずかな時期差が考えられる。当遺構は調査区の東端に位置しており、これより東に同様の軸線の方形周溝墓が広がっている可能性がある。



第37図 第12号方形周溝墓出土遺物実測図

第12号方形周溝墓出土遺物觀察表（第37図）

番号	種別	器種	口径	縦高	底径	胎	土	色調	焼成	手法の特徴	はか	出土位置	備考
21	生土器	広口壺	150	(18.1)	-	長石・石英・金青石・赤色粒子・粘土状物質	浅黄橙	山形郡に今、該工具による器類。口部は圓錐形工具(6本)による山形文。底部は弦状突出文。側面は斜面状。内側は輪郭線で区切られた斜面状。	輪郭線で区切られた斜面状。	口部は圓錐形工具による器類。口部は圓錐形工具(6本)による山形文。底部は弦状突出文。側面は斜面状。内側は輪郭線で区切られた斜面状。	50%	PL16	
22	生土器	広口壺	-	(4.7)	(7.5)	長石・石英・金青石・赤色粒子	にぶい蘭	普通	輪郭筋加刷法(削痕2mm)による施文施	輪郭筋加刷法(削痕2mm)による施文施	5%	覆土中層	
23	土器類	壺	[10.1]	(6.9)	-	長石・石英・金青石・赤色粒子	にむか	普通	輪郭筋加刷法(削痕2mm)による施文施	輪郭筋加刷法(削痕2mm)による施文施	5%	覆土中	

第13号方形周溝墓（第20号墳）（第38図）

位置 調査区南東部のC 3al～C 3b5区、標高46mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第27・28号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 北部以外の大部分は調査区域外のため、内法が東西軸 11.72 m、南北軸 4.62 m、外法が東西軸 13.65 m、南北軸 5.57 m しか確認できなかった。軸方向は座標北を基準とすると N-10°W で、平面形は四角形または四角形に推定される。方柱部は上部が削平されており、盛土及び埋葬施設は不明である。

周溝 確認できた範囲が限定されているが、他の方形周溝墓の規模と形状との比較から全周しているものと推定される。外縁部は各辺とも直線状を呈している。上幅 $0.98 \sim 1.78$ m、下幅 $0.45 \sim 1.00$ m、深さは $17 \sim 81$ cmで、断面は一様ではないがほぼ逆台形を呈する。底面はやや凹凸があり、確認できた範囲内では、最浅部の北西コーナー部から、東辺中央部の最深部にかけて緩やかな傾斜で徐々に深くなっている。壁は方台部側、外縁部側

ともにほぼ直立している。

覆土 7層に分層できる。第5・6層は、ロームブロックを主体とする褐色土で、構築後の早い段階において盛土及び壁面が崩落した流入土である。第2～4層はロームブロック・ローム粒子を含む暗褐色土で、盛土が崩落した流入土である。第7層は第2～4層の埋没過程での壁面の崩落土である。第1層は黒色土で、旧表土が周囲から流入した堆積状況を示している。

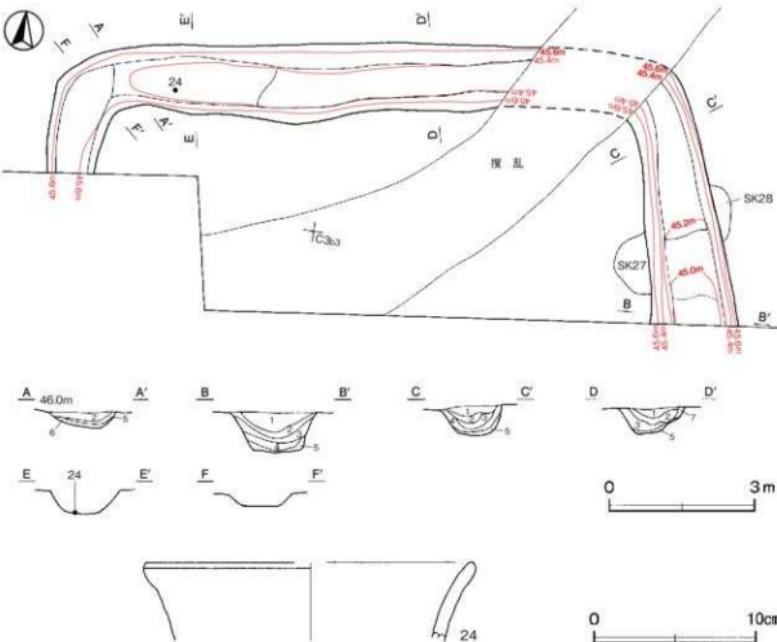
土層解説

1 黒 色	ローム粒子微量	5 黄 色	ロームブロック多量
2 暗 棕 色	ローム粒子微量	6 棕 色	ローム粒子多量
3 暗 棕 色	ローム粒子少量	7 にぶい黄褐色	ロームブロック少量
4 暗 棕 色	ロームブロック少量		

遺物出土状況 士師器片5点(壺1、甕類4)のほか、繩文土器片17点(深鉢)、弥生土器片4点(広口壺)、

環3点が、周溝の覆土中から出土している。24は北辺西の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土遺物と遺構の形状や周囲の遺構との関係から、4世紀前半と考えられる。



第38図 第13号方形周溝墓・出土遺物実測図

第13号方形周溝墓出土遺物観察表(第38図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
24	土器器	壺	[200]	(4.8)	-	長石・石英 珪藻・赤色粒子	にぶい黄褐 色	普通	口縁部・内面ナデ	覆土下層	5%

第14号方形周溝墓（第21号墳）（第39図）

位置 調査区南東部のB35～C3b7区、標高46mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第29・30・31号土坑に掘り込まれている。

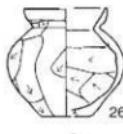
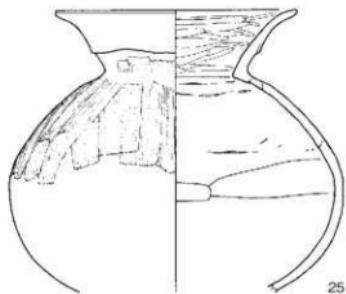
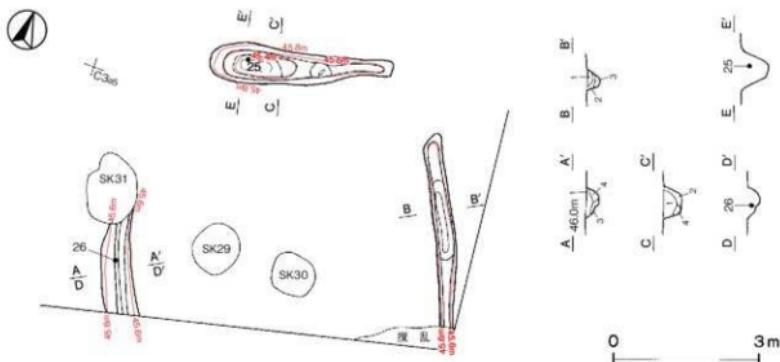
規模と形状 南部は調査区域外のため、内法が東西軸6.50m、南北軸5.38m、外法が東西軸7.24m、南北軸5.86mしか確認できなかった。軸方向は座標北を基準とするとN-20°-Wで、平面形はコーナー部を掘り残した陸橋部を有する方形または長方形と推定される。方台部は上部が削平されており、盛土及び埋葬施設は不明である。

周溝 北東及び北西コーナー部に陸橋部を有している。南部が調査区域外のため、南東及び南西コーナー部の陸橋部の有無は不明である。外縁部は各辺とも直線状を呈している。上幅0.25～0.85m、下幅0.11～0.26m、深さは15～54cmで、断面は一様ではないがほぼ逆台形を呈する。底面はやや凹凸があり、北辺の西部と東辺の北部が深く掘り込まれている。壁は方台部側、外縁部側とともにほぼ直立している。

覆土 4層に分層できる。盛土及び壁面の崩落土が流入した堆積状況を呈している。

土層解説

- | | |
|---------------------------|----------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子中量、燒土粒子・炭化粒子少量 | 3 黑褐色 ローム粒子多量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子中量 | 4 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量 |



0 10cm

第39図 第14号方形周溝墓・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片6点(壺1、小形壺1、甕類4)のはか、縄文土器片7点(深鉢)、弥生土器片1点(広口壺)、礫2点が、周溝の覆土中から出土している。25は北辺の覆土上層から横位で、26は西辺の覆土上層から横位でそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から4世紀前半に比定できる。当遺構は、コーナー部に陸橋部をもつタイプである。造墓集團の違いやわずかな時期差が考えられる。当遺構は調査区の南端に位置しており、これより南に同様の形狀の方形周溝墓が広がっている可能性がある。

第14号方形周溝墓出土遺物觀察表(第39図)

番号	種 別	器種	口径	厚高	底様	胎 土	色 調	施成	手 法 の 特 徴	は か	出土位置	備 考
25	土師器	壺	14.6	(17.4)	-	長石・石英・基母・赤色粘土 粒状物質	にぶい橙	普通 目調整	口縁部外斜面ナダ 内面ヘラ削き 体部外斜面ハケ	費土上層	30%	PL17
26	土師器	小形壺	(4.9)	6.7	(3.2)	長石・石英・基母・赤色粘土 粒状物質	にぶい褐	普通 底削	口縁部外・内面ナダ 体部外・内面ヘラ削り	費土上層	50%	PL17

表4 方形周溝墓一覧表

番号	位 置	地 方 向 (南北と東西方向)	平面部	度 横		周 溝			埋 墓	未 な 出 土 遺 物	備 考
				内法(m)	外法(m)	形態	壁面	底面			
1	A 138- B 2g2	N - 7° - W	[隅丸方形]	11.28 × 10.40	13.70 × 12.95	[全周]	[は] 直立 [は] 直立	[は] 崖面 [は] 直立	21~49	自然	- 土師器、縄文土器、 壁
2	A 2g2- B 2g5	N - 5° - W	[隅丸方形]	9.00 × 8.62	10.78 × 10.92	[全周]	[は] 直立 [は] 直立	[は] 平照 [は] 直立	22~85	自然	- 土師器、縄文土器
3	A 2g6- B 1g9	N - 15° - W	[隅丸長方形]	10.95 × 9.38	12.98 × 11.47	[全周]	[は] 直立 [は] 直立	[は] 四凸 [は] 直立	30~102	自然	- 土師器、縄文土器、 壁
4	B 1g5- B 1g9	N - 5° - W	[隅丸方形] [隅丸長方形]	12.13 × (3.46)	(14.35) × (4.66)	[全周]	[は] 直立 [は] 直立	[は] やや [は] 四凸	19~39	自然	- 土師器、縄文土器、 壁
5	B 1g5- B 1g2	N - 6° - W	[隅丸方形]	(7.00) × (2.40)	(10.10) × (4.00)	[全周]	[は] 直立 [は] 直立	[は] 四凸	24~50	自然	- 土師器、縄文土器
6	A 2g3- B 2g5	N - 7° - W	[隅丸方形]	7.51 × (5.55)	(8.90) × (6.45)	[全周]	[は] 直立 [は] 直立	[は] やや [は] 四凸	30~56	自然	- 土師器、縄文土器
7	B 2g8- B 2g9	N - 28° - W	[隅丸方形] [隅丸長方形]	9.73 × (5.00)	12.35 × (6.40)	[全周]	[は] 直立 [は] 直立	[は] やや [は] 四凸	36~78	自然	- 土師器、縄文土器
8	A 3j1- B 1g9	N - 14° - W	[隅丸長方形]	9.10 × 8.18	10.42 × 9.62	[全周]	[は] 直立 [は] 直立	[は] 平照 [は] 直立	32~60	自然	- 土師器、縄文土器、 壁
9	A 2f7- A 2g2	-	-	(0.46) × -	(10.48) × (1.72)	北辺中央部に 陸橋部	[は] 直立 [は] 直立	[は] 外傾 [は] 直立	42~60	自然	- 土師器、縄文土器、 壁
10	A 3j6- B 2g6	N - 20° - W	[隅丸長方形]	(9.12) × (7.52)	(10.70) × (8.54)	[全周]	[は] 直立 [は] 直立	[は] やや [は] 四凸	26~77	自然	- 土師器、縄文土器
11	B 2e0- B 3g1	N - 16° - W	[隅丸方形]	12.86 × 12.65	17.40 × 15.50	全周	[は] 直立 [は] 直立	[は] 四凸	52~150	自然	- 土師器、縄文土器、 壁
12	A 3j5- B 3j6	N - 34° - W	[隅丸方形]	12.55 × 12.08	14.87 × 15.18	[全周]	[は] 直立 [は] 直立	[は] 四凸	51~125	自然	- 土師器、縄文土器、 壁
13	C 3a1- C 3b5	N - 10° - W	[隅丸方形] [隅丸長方形]	(11.22) × (4.62)	(13.65) × (5.57)	[全周]	[は] 直立 [は] 直立	[は] やや [は] 四凸	17~81	自然	- 土師器、縄文土器、 壁
14	B 3j5- C 3b7	N - 20° - W	[方形-長方形]	6.50 × (5.38)	7.24 × (5.86)	北東・北西 コーナーに 陸橋部	[は] 直立 [は] 直立	[は] やや [は] 四凸	15~54	自然	- 土師器、縄文土器、 壁

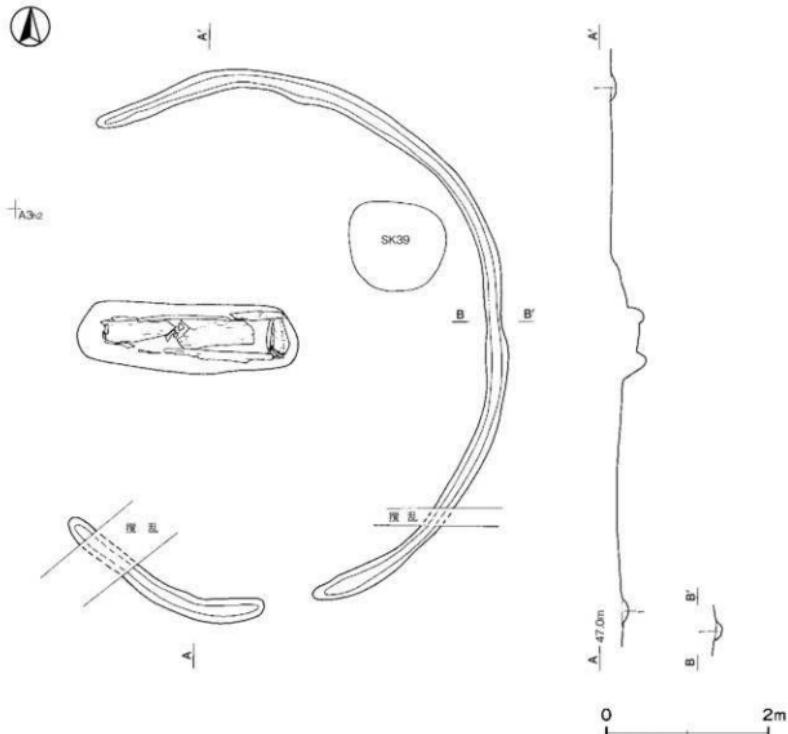
(2) 古墳

第4号墳(第40 ~ 42図)

位置 調査区東部のA 3g2 ~ A 3i3区、標高47mほどの台地縁辺部に位置している。

確認状況 当遺構は、昭和34年発刊の「茨城県古墳総覧」に記載された「32号無名塚」である。昭和61年の瑞竜小学校の用地造成工事中に石棺の一部が露出した。昭和62年の常陸太田市教育委員会の報告書において第4号墳として確認状況が記載されている。今回の調査では、重機による表土除去後、トレンチによる確認作業によって石棺を確認した。上部は擾乱を受けており、蓋石ではなく、石棺内部には土砂とともに割れた石材が流入していた。

重複関係 第39号土坑に掘り込まれている。



第40図 第4号墳実測図

規模と形状 円墳と推定される。墳丘・周溝の上面が擾乱を受けているため、埋葬施設としての箱式石棺と周溝底面の一部のみを確認した。確認できた規模は、墳丘径 6.30 m、周溝外縁径 6.80 mのみであった。

周溝 西部を除き、周回している。上幅 0.16 ~ 0.30 m、下幅 0.06 ~ 0.16 m、深さは 8 cm で、底面は平坦である。壁は外傾しており、断面は浅い U 字状である。墳丘下に掘り込まれた設計線の痕跡であることが考えられる。

覆土 単一層である。覆土が薄いことから、堆積状況は不明である。

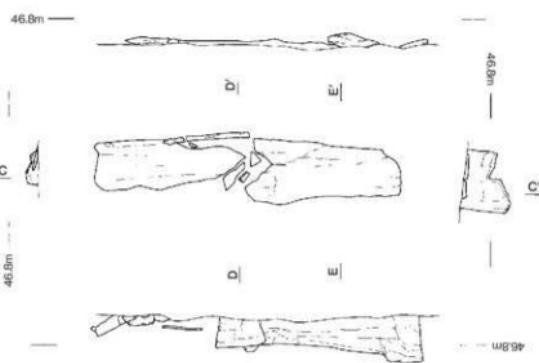
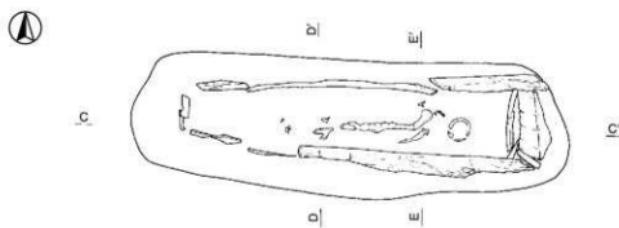
周溝土層解説

1 級 色 ロームブロック少量

埋葬施設 墳丘中央部からやや西寄りに箱式石棺が構築されている。規模は内法で東西軸 1.98 m、南北軸は、東部の最長部で 0.40 m、西部の最短部で 0.25 m の長方形で、頭部側を基準とする長軸方向は、N - 93° - E である。ローム層まで掘り込んで構築しており、確認面から床石までの深さは 14 ~ 20 cm である。石材は雲母片岩を厚さ 4 ~ 10 cm 程の板状に加工したものを使用している。溝状の掘り込みに、妻石は東西共に 2 枚ずつ、側石は北側に 3 枚、南側に 2 枚を組み合わせ、周間に粘土を充填し構築している。床石は大形 2 枚、中形 1 枚

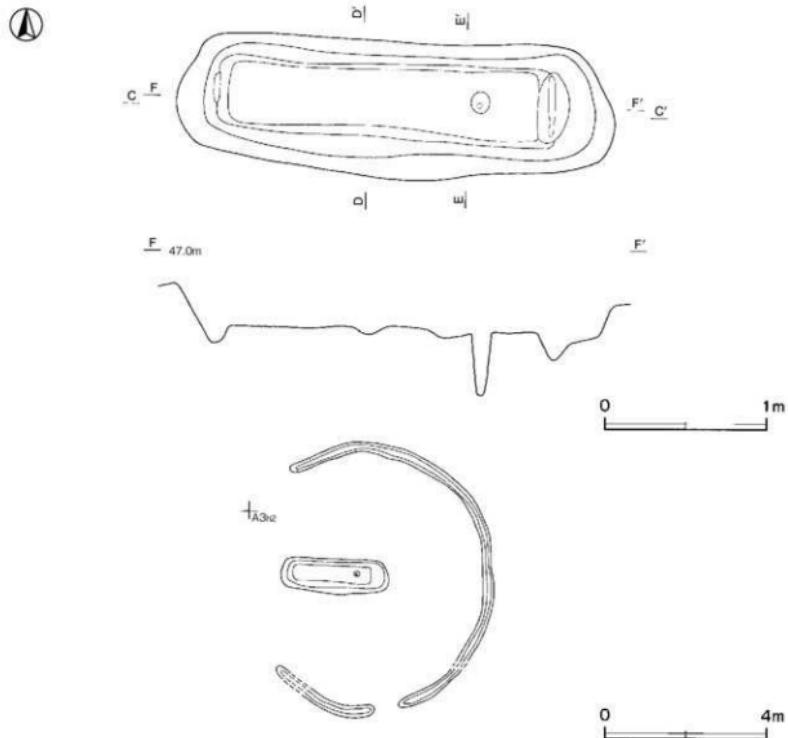


■ 石棺構築材



0 1m

第41図 第4号墳埋葬施設実測図・人骨出土状況図



第42図 第4号墳埋葬施設掘方実測図

を底面に敷き、その間を小形の板石で充填している。構築材の石材は擾乱を受けているため、部分的に原位置を留めていないものがある。

埋葬施設土層解説

1 黒褐色 粘土ブロック中量、ローム粒子微量

埋葬施設掘方 掘方は、東西軸2.67m、南北軸0.85mの長方形に掘りくぼめ、妻石と側石を建てるために中央部を残して周囲を溝状に掘り込んでいる。床石の下から、径0.12m、深さ38cmの小ビットが確認できた。小ビットから周溝までは等距離で約3.15mほどである。構築時に杭を打ち、そこを基準に設計線として構築した可能性が考えられる。

埋葬施設掘方土層解説

- 2 褐色 粘土ブロック少量、ローム粒子微量
- 3 楊暗褐色 ロームブロック微量
- 4 楊暗褐色 ロームブロック少量
- 5 褐色 ローム粒子少量
- 6 黒褐色 ロームブロック少量
- 7 暗褐色 ロームブロック中量

- 8 黑褐色 ローム粒子多量
- 9 暗褐色 ロームブロック少量
- 10 暗褐色 粘土ブロック多量、ロームブロック中量
- 11 黑褐色 ロームブロック中量
- 12 にじむ青褐色 ロームブロック多量
- 13 黑褐色 ロームブロック中量

埋葬の状況 石棺東部から頭蓋骨と下顎骨の一部及び下顎右側犬歯から下顎右側第3大臼歯までの6本の歯牙が出土し、中央部やや南よりから体幹骨及び上腕骨が出土している。下顎右側第1小白歯から下顎右側第3大臼歯までは、下顎骨とともに出土した。下顎右側犬歯のみ5cmほど離れた場所で出土しており、搅乱を受けた際に動いたものと考える。遺存状態が不良のため埋葬状況は明確ではないが、下顎骨や歯牙、体幹骨や上腕骨の出土状況から東頭位で、体正面を北方に向け横向きで埋葬された可能性がある。

遺骸の特徴 頭蓋骨や体幹骨、上腕骨は遺存状態が不良のため、特徴は見いだせない。下顎右側第1大臼歯が12.4mmと現代の日本人の平均値を超える大きさであることから、男性であると判断できる。また、下顎右側第3大臼歯があり、咬耗状況から30歳代～40歳代と考えられる。下顎右側第1大臼歯及び第2大臼歯に咬耗が集中しているため、ある程度歯ごたえのあるものを食べていたと考えられる。

第4号墳出土歯牙観察表

番号	種 別	歯冠の幅 (mm)	特 徴	備 考
1	下顎右側大歯	6.9	咬耗がほとんどない 調査なし	平均値
2	下顎右側第1小白歯	7.3	咬耗がほとんどない 調査なし	平均値
3	下顎右側第2小白歯	7.4	咬耗がほとんどない 調査なし	平均値
4	下顎右側第1大臼歯	12.4	咬合面溝がY型 咬耗が著しく、近心舌側咬頭はエナメル質の下部の象牙質が露出 咬合	平均値以上
5	下顎右側第2大臼歯	10.8	咬合面溝がX型 咬耗が少ないが、遠心舌側咬頭のみ咬耗している 表板は橋状根を呈し 退化頸兜を示している 調査なし	平均値
6	下顎右側第3大臼歯	10.3	咬合面溝がX型 咬耗がほとんどない 調査なし	平均値

遺物出土状況 土師器片1点(甕類)が、埋葬施設の掘方から出土している。遺物は細片のため、図示できなかった。

所見 時期判断できる遺物は出土していないが、昭和61年に常陸太田市が調査した第5号墳で検出された箱式石棺2基と形状及び構築方法が類似し、埴丘部に構築されていた第1石棺と長軸方向及び遺骸の埋葬方向も東頭位で共通している。このような状況から、当遺構は、第5号墳と同時期に構築されたものと考えられる。第5号墳からは、鉄鎌、刀子、形象埴輪(ヘラ状の器物を持つ女子像・人物・馬形)、円筒埴輪が出土しており、箱式石棺の形状と出土遺物から時期は6世紀前半に比定されている。よって、当遺構も6世紀前半に構築されたものと考えられる。また、被葬者が歯牙の観察から、30歳代～40歳代の男性と推測できることから、横幅の最長部が0.40mの箱式石棺に埋葬するには困難であり、体正面を北方に向け横向きに埋葬した可能性が想定できる。

第6号墳(第43図)

位置 調査区西部のA 11l～B 1c7区、標高47mほどの台地縁辺部に位置している。

確認状況 昭和61年の常陸太田市教育委員会によって、当遺構の北部が調査されている。今回の調査では、前回未調査の南部を確認した。

重複関係 第4号方形周溝墓(第11号墳)、第1号炉跡を掘り込み、第1号井戸、第2～5・10・12号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 墳丘径が19.92m、周溝外縁径が23.80mの円墳である。墳丘は削平されており、墳丘及び埋葬施設は不明である。

周溝 全周している。上幅 1.00 ~ 2.87 m, 下幅 0.40 ~ 1.00 m, 深さは 30 ~ 75cm で、断面は一様ではないがほぼ逆台形を呈する。外縁部は南西及び西で大きく膨らみ、幅も南西で 2.80 m, 西で 2.50 m と広くなっている。底面は凹凸が有り、南西が最も深く、東西で北に向かって浅くなっている。壁は埴丘側、外縁部側とともに外傾しており、東で埴丘側、南で外縁部側が急になっている。

覆土 9 層に分層できる。第 9 層はロームブロックを多量に含む褐色土で、構築後の早い段階において埴丘及び壁面が崩落した流入土である。第 3 ~ 8 層はロームブロック・ローム粒子を含み、埴丘及び壁面からの崩落土である。第 1・2 層は黒色・黒褐色土で、旧表土が周囲から流入した堆積状況を示している。

周溝土層解説

1 黒 色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	6 暗 褐 色	ロームブロック中量、炭化粒子少量
2 黒 褐 色	ローム粒子少量	7 褐 色	ローム粒子多量
3 黒 褐 色	ロームブロック中量、焼土粒子微量	8 暗 褐 色	ロームブロック中量
4 黒 色	ロームブロック中量、鹿沼バミス少量	9 褐 色	ロームブロック多量
5 黒 褐 色	ローム粒子多量		

遺物出土状況 土師器片 75 点（壺 3、甕類 72）のほか、繩文土器片 283 点（深鉢）、弥生土器片 104 点（広口壺 103、小形壺 1）、平安時代の土師器片 72 点（壺 70、高台付壺 2）、石器 1 点（磨石）、礫 26 点が周溝の覆土中から出土している。特に周溝の南部から西部にかけて遺物が集中して出土している。27 は南の覆土中層から下層にかけて削れた状態で、28 は東部の覆土中からそれぞれ出土している。

所見 昭和 61 年に常陸太田市が調査した際には、工事用取り付け道路の工事中に周溝が確認され、北部の周溝のみを調査した。その際に埴丘は確認されていない。北部の周溝内から長径 65cm、短径 55cm ほどの円形の土坑が確認され、焼土とともに刀子 1 点が出土している。前回の調査における周溝からの遺物はわずかで、出土状況が明確な遺物はほかに確認されていない。

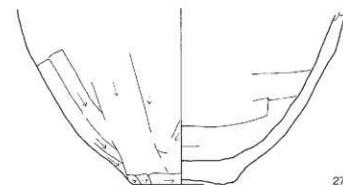
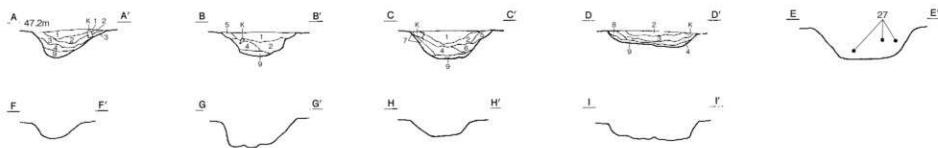
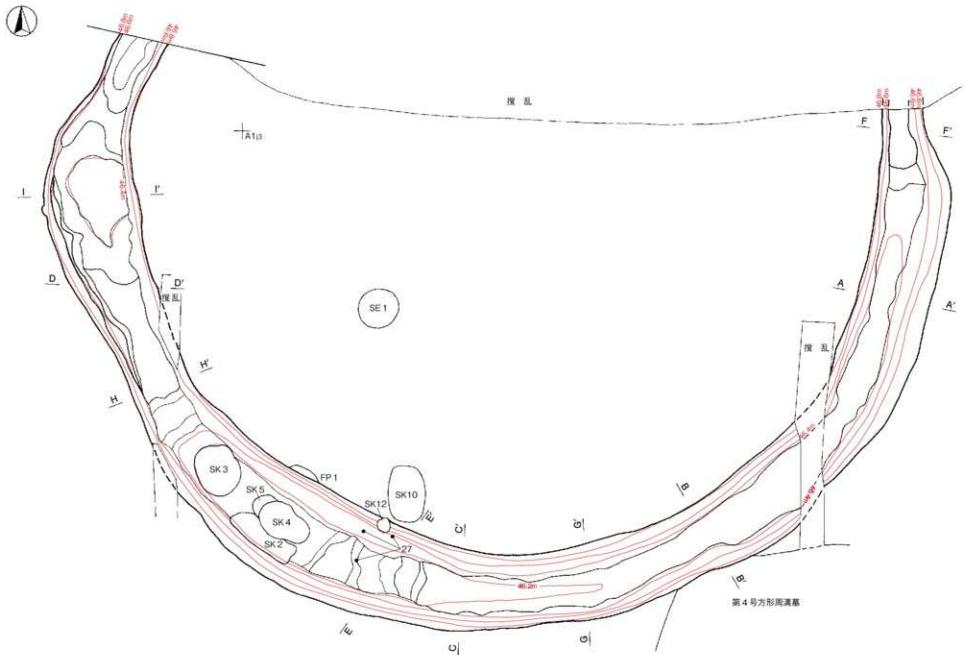
今回の調査において、当遺構は、4 世紀前半と考えられる第 4 号方形周溝墓が完全に埋没した後に構築されていることが確認できた。また、埋葬施設は、埴丘部には確認できず、地山まで掘りこまらずに盛土された埴丘内に構築されたものと考えられる。さらに、周溝内から、埴輪は出土していない。時期は、以上のような遺構及び遺物出土の状況と出土土器から、5 世紀代と考えられる。

第 6 号埴出土遺物観察表（第 43 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
27	土師器	壺	-	(140)	80	灰石・石英・黄 緑・赤色粒子、 針状鉱質・細纖 維状・石英・ 斜方輝石質	にぶい黃褐 普通	体外表面へラ筋り 内面へラナデ 底部へラナデ		覆土中層～ 下層	10%
28	土師器	壺	[15.4]	(32)	-	灰石・石英・ 斜方輝石質	褐 普通	口縁部外・内面ナデ		覆土中	5%

表 5 古墳一覧表

番号	位 置	墳 形	埴 丘 方向	埴 丘 全長(径) (m)	埴 丘 高さ(m)	周 溝				埋葬施設	主な出土遺物	備 考
						上幅 (m)	下幅 (m)	溝さ (cm)	壁面			
4	A 3 g2 ~ B 3 i3	円墳	-	6.30	-	0.16 ~ 0.30	0.06 ~ 0.16	8	外傾 平底 箱式石棺	人骨、土師器	本跡 → SK39	
6	A 1 i1 ~ B 1 c7	円墳	-	19.92	-	1.00 ~ 2.87	0.40 ~ 1.00	30 ~ 75	外傾 凹凸 -	土師器、繩文土器 弥生土器、種	TMI1、FP1 → 本 跡 2 ~ 5 · 10 · 12	



第43図 第6号墳・出土遺物実測図

(3) 土坑

第32号土坑（第44図）

位置 調査区南東部のB316区、標高46mほどの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 東部が調査区域外のため、規模は短径が226mで、長径は332mしか確認できなかった。不整橢円形で、長径方向はN-43°-Eと推定される。深さは154cmで、底面は皿状を呈している。壁は外傾している。

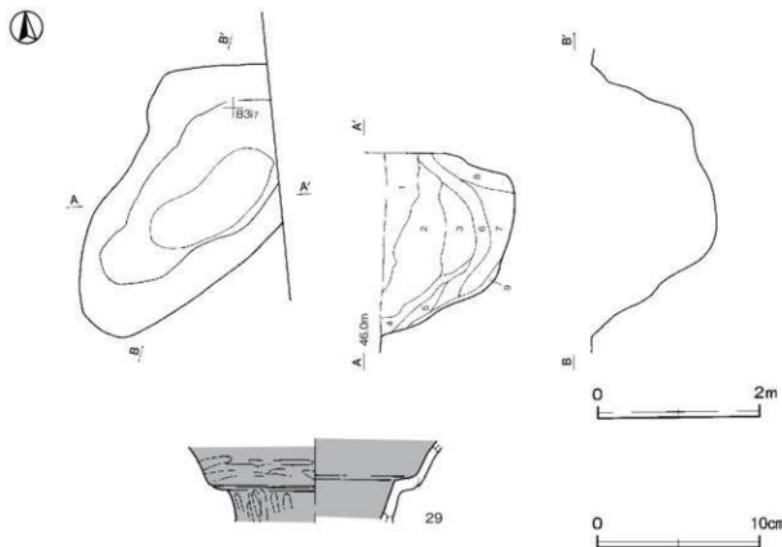
覆土 9層に分層できる。各層にロームブロック・ローム粒子が含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

1 黒 色	ロームブロック少量	6 黒 暗 色	ローム粒子中量
2 黒 色	ロームブロック中量	7 黒 色	ロームブロック多量
3 黒 色	ローム粒子少量	8 暗 暗 色	ローム粒子多量
4 黒 色	ローム粒子多量	9 暗 色	ロームブロック多量
5 暗 暗 色	ロームブロック多量		

遺物出土状況 土師器片14点（壺8、甕6）のほか、繩文土器片3点（深鉢）、弥生土器片9点（広口壺）、甕2点が覆土中から出土している。29は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から4世紀前半に比定できる。



第44図 第32号土坑・出土遺物実測図

第32号土坑出土遺物観察表（第44図）

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	始 土	色 調	地成	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
29	土師器	壺	-	(5.1)	-	長石・石英 青銅	明赤	普通	外面ヘラ磨き 外・内面赤彩	覆土中	5%

4 鎌倉時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、堅穴遺構1基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

第1号堅穴遺構（第45図）

位置 調査区中央部のA3gl区、標高47mほどの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 長軸260m、短軸216mの長方形で、長軸方向はN-1°-Wである。壁は高さ62cmで、直立している。

床 平坦で、明らかな硬化面は認められない。南西部に焼土が確認された。

覆土 5層に分層できる。各層にロームブロック、炭化材、焼土粒子が含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

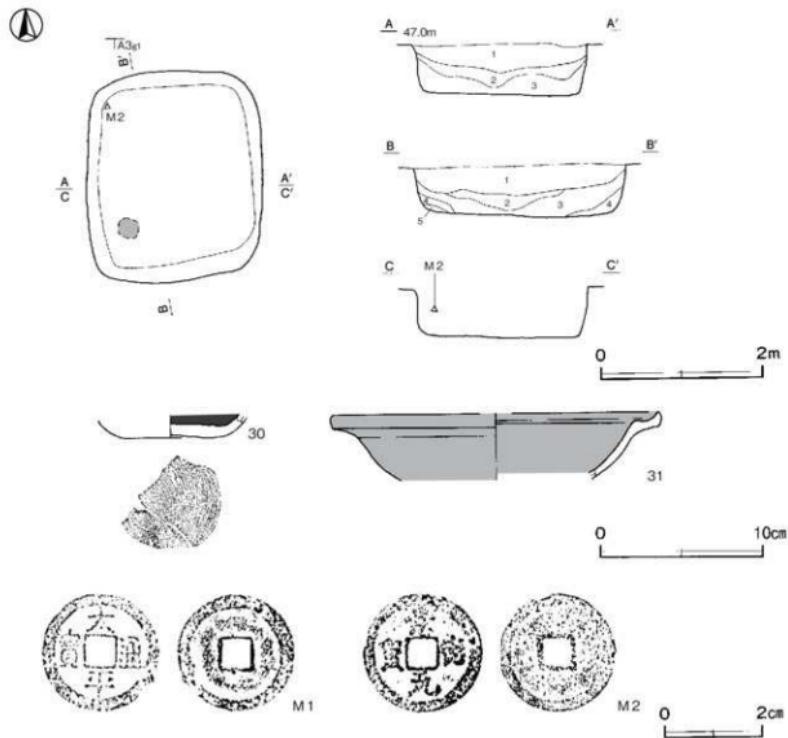
1 黒褐色 ロームブロック少量

2 黒褐色 炭化材少量、ローム粒子・焼土粒子微量

3 極暗褐色 炭化材多量、ロームブロック少量

4 黒褐色 ローム粒子微量

5 暗褐色 ロームブロック少量



第45図 第1号堅穴遺構・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師質土器片1点(小皿), 陶器片14点(壺), 磁器片2点(碗, 盤), 粘土塊3点, 金属製品1点(不明), 銭貨2点のほか, 繩文土器片6点(深鉢), 瓦1点が出土している。30・31, M 1は覆土中から, M 2は北西コーナー部の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土遺物及び形状から13世紀後半に比定できる。銭貨は、埋め戻しの際に投棄されたものと考えられる。

第1号竪穴造構出土遺物観察表(第45図)

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴	ほ か	出土位置	備 考
30	土師質土器	小皿	-	(1.3)	[5.8]	長石・石英	にぶい青白	普通	底部回転各切り		覆土中	39% 内面埋付着
31	磁器	盤	[200]	(40)	-	細密 細灰	折縁口縁	外・内面無文	外・内面	青磁釉	龍泉窯	覆土中 5%
番号	銘種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初開年		特 徴		出土位置	備 考
M 1	太平通寶	25	0.6	0.1	3.0	銅	976	北宋	真書		覆土中	PL22
M 2	聖慈元寶	25	0.6	0.2	3.3	銅	1004	北宋	真書		覆土中層	PL22

5 室町時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、土坑3基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

第6号土坑(第46・47図)

位置 調査区東部のB 3 b2 区、標高47mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第8・12号方形周溝墓(第15・19号墳)、第8号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径9.91m、短径5.65mほどの不整規円形で、長径方向はN-83°-Wである。深さは105cmで、底面はやや凹凸がある。壁は外傾しているが、中位に平坦面を有して緩やかに立ち上っている。底面に円形3か所、長方形2か所、不定形1か所の土坑状の凹みが確認できた。

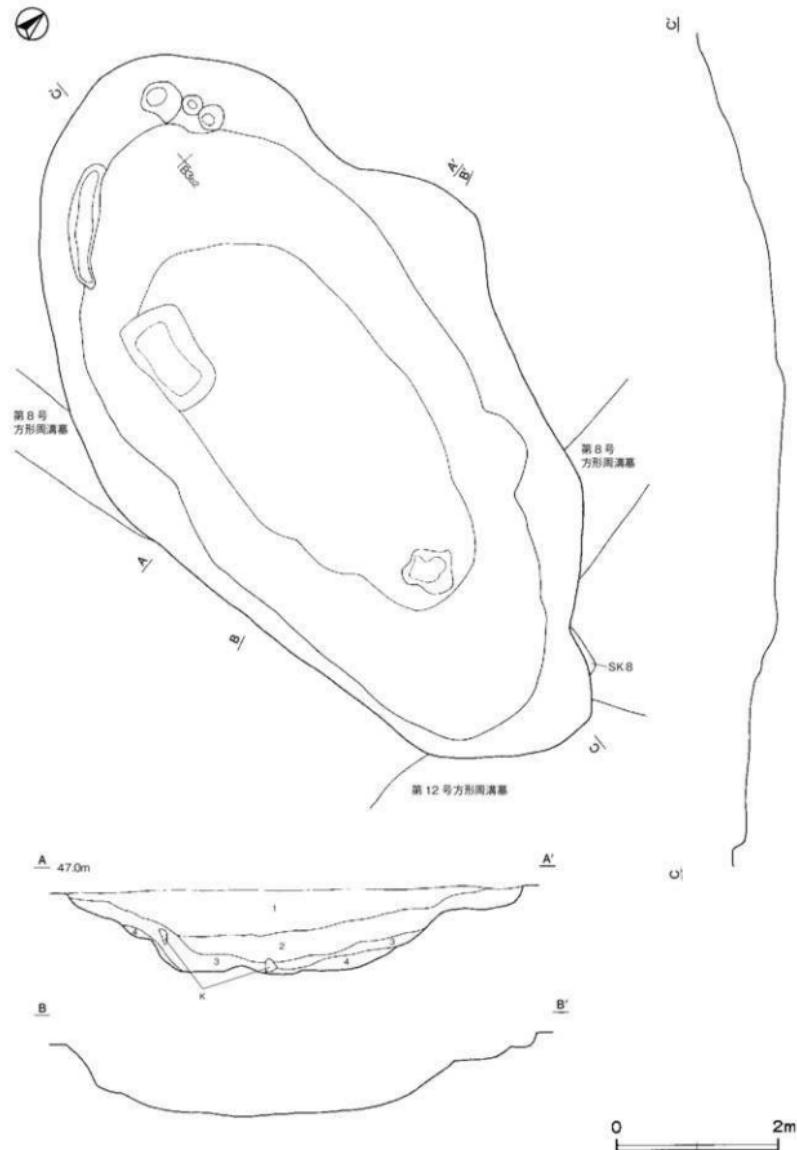
覆土 4層に分層できる。各層に炭化物やローム粒子、焼土粒子などを含んでいることから、埋め戻されている。

土層解説

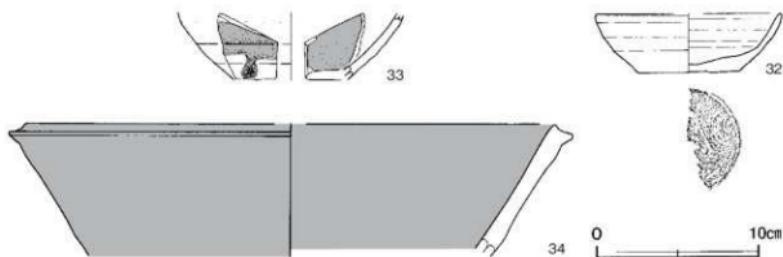
1 黒 褐 色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	3 黒 褐 色	ロームブロック微量
2 黒 褐 色	ローム粒子少量、炭化物微量	4 褐 色	ローム粒子多量

遺物出土状況 土師質土器片7点(小皿), 陶器片6点(平碗1, 鉢1, 壺4)のほか, 繩文土器片5点(深鉢), 弥生土器片1点(広口壺), 土師器片3点(高台付坏1, 壺2), 土製品1点(円筒埴輪), 瓦2点, 鉄滓1点, 自然遺物(馬歛)が出土している。各時代の遺物が混在しており、埋め戻しの際に周囲の遺構から流れ込んだと考えられる。32~34はそれぞれ覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から15世紀代と考えられる。性格は不明であるが、規模が大きいことから、土木工事に伴う土取りの可能性が考えられる。



第46図 第6号土坑実測図



第47図 第6号土坑出土遺物実測図

第6号土坑出土遺物観察表（第47図）

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
32	土器質土器	小鉢	[114]	3.6	(6.2)	板石・石英・ 玉子・赤色粒子	にふい根	普通	底部回転系切り	覆土中	30%

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
33	陶器	平輪	-	(4.1)	-	緻密 短柱リーブ灰・ 黄根	灰釉浅け掛け	灰釉	瀬戸・美濃系	覆土中	5%
34	陶器	鉢	[326]	(8.1)	-	緻密 にふい根・根	外・内面施釉	黒釉	常滑	覆土中	5%

第10号土坑（第48図）

位置 調査区西部のB1b4区、標高47mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第6号墳を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.52m、短径0.98mの楕円形で、長径方向はN~O°である。深さは60cmで、底面は平坦である。壁は直立している。

覆土 3層に分層できる。各層にロームブロック・ローム粒子を含んでいることから、埋め戻されている。

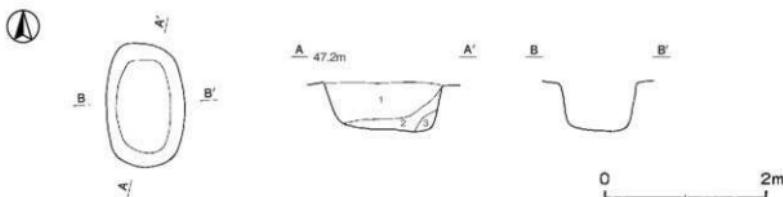
土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量

3 黒褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 陶器片1点（甕）が出土している。常滑焼の甕の体部片が覆土上層から出土しているが、細片のため、図示できなかった。

所見 時期は、出土土器と当遺構周辺の第11号土坑と覆土が類似していることから、14世紀後半と考えられる。



第48図 第10号土坑実測図

第 11 号土坑（第 49 図）

位置 調査区西部の B 1 a8 区、標高 47 m ほどの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 長径 0.61 m、短径 0.52 m の隅丸長方形で、長径方向は N - 5° - W である。深さは 26 cm で、底面は皿状である。壁は外傾している。

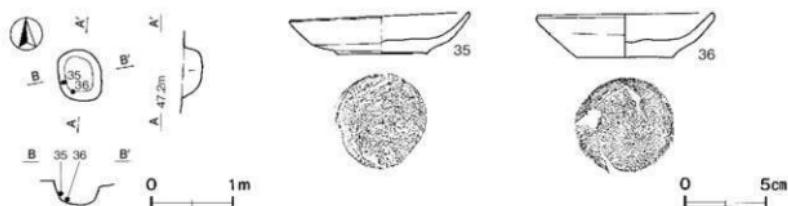
覆土 単一層である。ロームブロックを含み、遺物の出土状況からも埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師質土器片 2 点（小皿）が出土している。35 は正位、36 は逆位ではほぼ完形の状態で、底面から隣接して出土している。

所見 時期は、出土土器から 14 世紀後半に比定できる。底面に据え置かれた状況から、埋納されたものと考えられる。



第 49 図 第 11 号土坑・出土遺物実測図

第 11 号土坑出土遺物観察表（第 49 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
35	土師質土器	小皿	109	25	55	灰石・石英・赤色粒子・ 母貝・無釉	褐色	普通	底部回転糸切り	底面	99% PL20
36	土師質土器	小皿	106	27	58	灰石・石英・赤色粒子・ 母貝・無釉	褐色	普通	底部回転糸切り	底面	80% PL20

表 6 室町時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底面	側面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径 × 短径 (m)	深さ (cm)					
6	B 3 b2	N - 83° - W	不整格円形	9.91 × 5.65	105	やや凹凸	外傾	人為	土師質土器、陶器、構造土器、漆器、土製品、鐵、 自然遺物	TM15 - 19, SK 8 →本跡
10	B 1 b4	N - 0°	楕円形	1.52 × 0.98	60	平坦	直立	人為	陶器	TM 6 → 本跡
11	B 1 a8	N - 5° - W	隅丸長方形	0.61 × 0.52	26	皿状	外傾	人為	土師質土器	

6 その他の遺構と遺物

今回の調査で、時期や性格が明確でない円形周溝状遺構 1 基、井戸跡 2 基、炉跡 1 基、土坑 25 基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 円形周溝状遺構

第1号円形周溝状遺構（第50図）

位置 調査区西部のB 1 b1～B 1 d2区、標高47mほどの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 西部及び南部が調査区域外のため、確認された規模は内径7.60m、外縁径8.10mである。平面形は北部が途切れた円形と推定される。周溝は上幅0.41～0.72m、下幅0.20～0.44mで、深さは16～32cmである。壁は外傾し、断面形は逆台形を呈している。底面は平坦である。

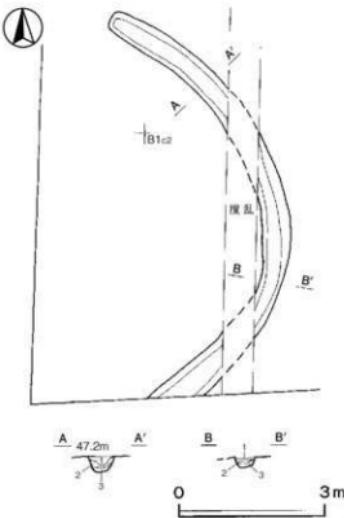
覆土 3層に分層できる。壁面の崩落土及び旧表土が流入した堆積状況を示している。

土層解説

- 1 黒色 ローム粒子中量
- 2 楊葉褐色 ローム粒子中量
- 3 黄色 炭化材多量、ローム粒子中量

遺物出土状況 弥生土器片9点（広口壺）、土師器片1点（甕）が出土している。遺物は細片のため、図示できなかった。

所見 時期判断できる遺物は出土しておらず、明確な時期及び性格は不明である。周囲の遺構との関係から、古墳の周溝の可能性があり、周溝内側の精査を行ったが、盛土及び埋葬施設の痕跡は確認できなかった。



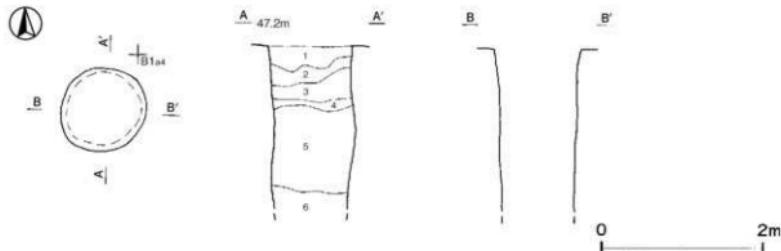
第50図 第1号円形周溝状遺構実測図

(2) 井戸跡

第1号井戸跡（第51図）

位置 調査区西部のB 1 a3区、標高47mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第6号墳の墳丘を掘り込んでいる。



第51図 第1号井戸跡実測図

規模と形状 確認面は長径 1.04 m、短径 1.01 m の円形である。確認面から深さ 200cmまで円筒状に掘り込んでいることを確認した時点で、崩落のおそれがあることから調査を断念した。そのため、下部の構造は不明である。

覆土 6 層に分層できる。各層にロームブロックや礫が含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	4 暗褐色	ロームブロック・礫少量
2 黒褐色	ローム粒子微量	5 黒褐色	ロームブロック少量
3 黒褐色	礫少量、ロームブロック微量	6 岩色	ロームブロック中量

所見 時期は、周囲の遺構との関係から室町時代の可能性があるが、出土遺物がなく明確な時期は不明である。

第2号井戸跡（第52図）

位置 調査区中央部の A 217 区、標高 47 m ほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第3号方形周溝墓（第10号墳）、第14号土坑を掘り込んでいる。

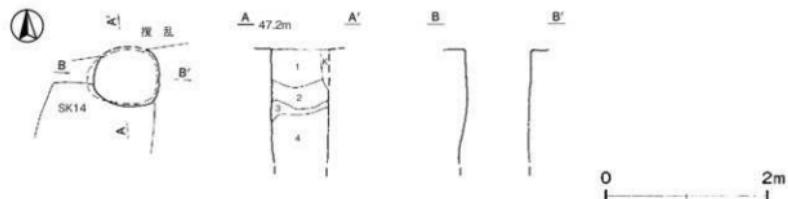
規模と形状 確認面は長径 0.84 m、短径 0.73 m の梢円形で、長径方向は N - 83° - E である。確認面から深さ 140cmまで円筒状に掘り込んでいることを確認した時点で、崩落のおそれがあることから調査を断念した。そのため、下部の構造は不明である。

覆土 4 層に分層できる。各層にロームブロック・ローム粒子や礫、白色粘土ブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・礫中量	3 黒褐色	白色粘土ブロック・礫中量
2 黒褐色	ローム粒子微量	4 黒褐色	ロームブロック少量

所見 時期は、周囲の遺構との関係から室町時代の可能性があるが、出土遺物がなく明確な時期は不明である。



第52図 第2号井戸跡実測図

表7 その他の井戸跡一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 規		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径 × 短径 (m)	深さ (cm)					
1	B 1 a3	-	円形	1.04 × 1.01	(200)	-	直立	人為		TM 6 → 本跡
2	A 217	N - 83° - E	梢円形	0.84 × [0.73]	(140)	-	直立	人為		TM 10, SK14 → 本跡

(3) 炉跡

第1号炉跡（第53図）

位置 調査区西部のB 1 b3区、標高47mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第6号墳に掘り込まれている。

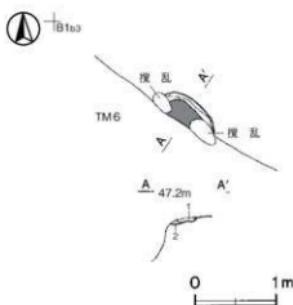
規模と形状 第6号墳に掘り込まれ、さらに搅乱を受けているため、確認できた規模は長径0.80m、短径0.33mで、形状は梢円形と推定される。長径方向はN-57°-Wである。深さは6cmで、浅く掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。底面は平坦で、壁はほぼ直立している。

覆土 2層に分層できる。第2層は炉床で燃焼に伴う焼土粒子や炭化粒子を含み、赤変硬化している。第1層はロームブロックが多量に含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 基 地色 ロームブロック多量、焼土粒子微量
- 2 基 赤褐色 焼土粒子多量、炭化粒子少量

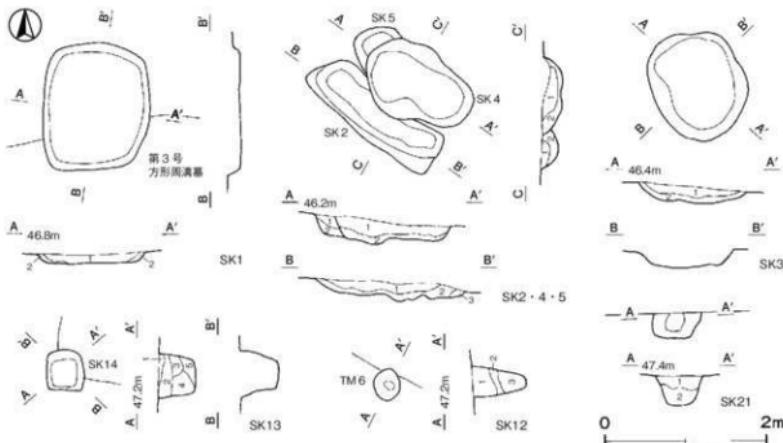
所見 時期は、第6号墳に掘り込まれていることから、5世紀以前であるが、出土遺物がなく明確な時期は不明である。豊穴建物跡の可能性も考え、周囲を精査したが、ピット等は確認できなかった。



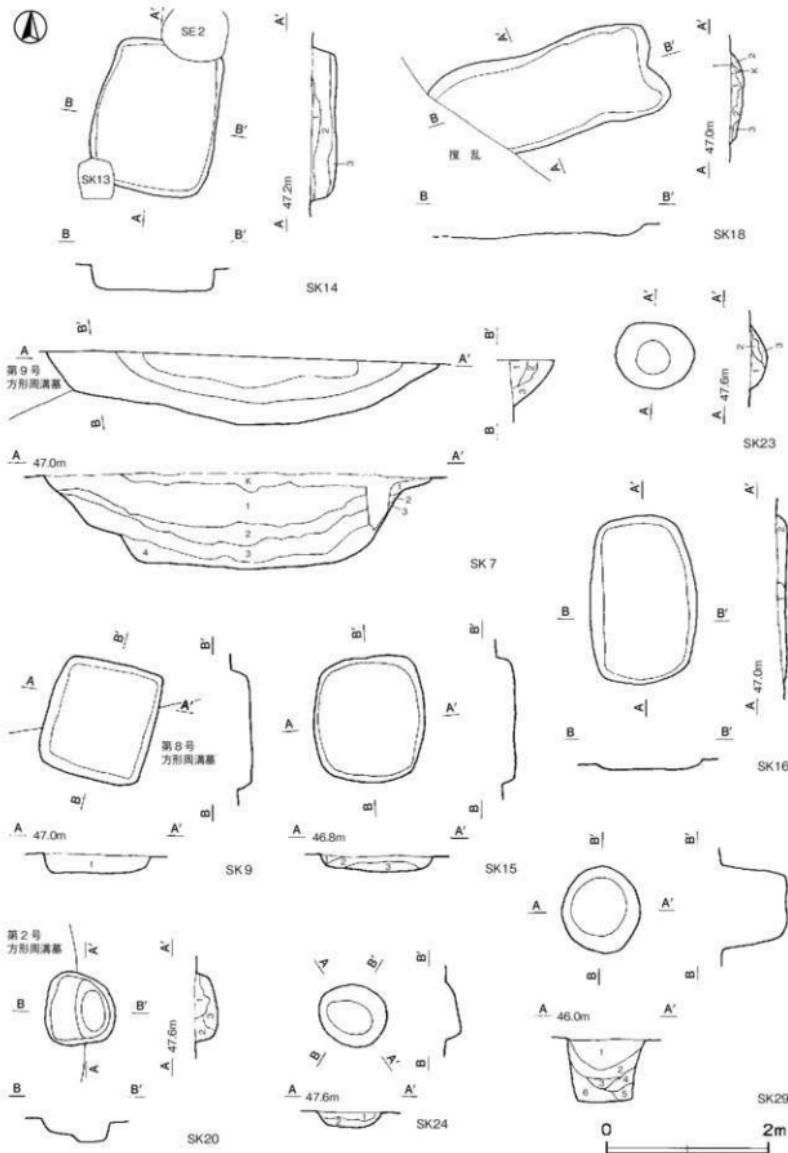
第53図 第1号炉跡実測図

(4) 土坑

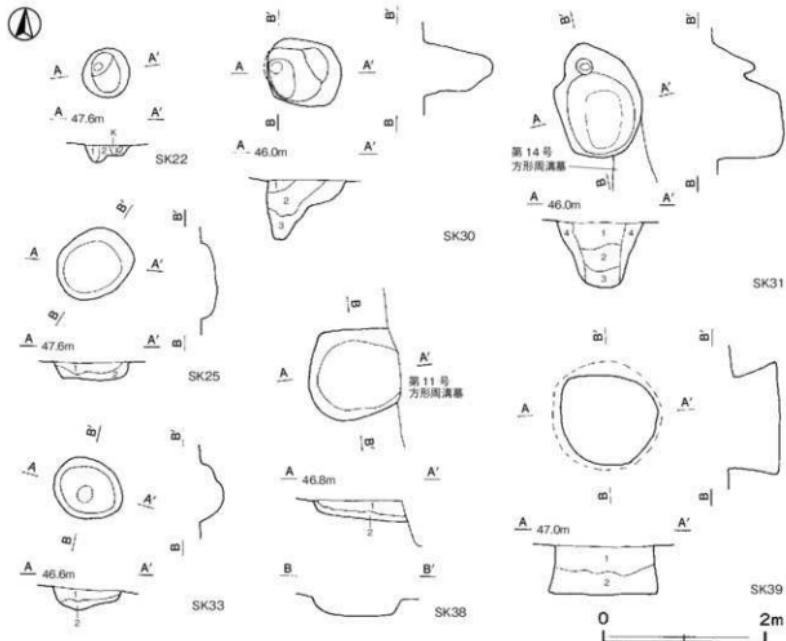
時期や性格が明確でない土坑に関しては、規模・形状などを実測図（第54～56図）と土層解説及び一覧表で掲載する。



第54図 その他の土坑実測図(1)



第55図 その他の土坑実測図(2)



第56図 その他の土坑実測図(3)

第1号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子多量、炭化物中量
- 2 暗褐色 ロームブロック多量

第2号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・鹿沼バミス少量
- 3 閑色 ローム粒子多量

第3号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、炭化物少量
- 2 黒褐色 ローム粒子多量

第4号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック多量

第5号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック多量、粘土ブロック・炭化物中量
- 2 閑色 ロームブロック多量

第7号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量
- 3 にぶい黄褐色 ローム粒子多量
- 4 褐色 ロームブロック多量

第9号土坑 土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子中量

第12号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量

第13号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量
- 5 黒褐色 ロームブロック微量

第14号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量

第15号土坑 土層解説

- 1 閑色 ローム粒子多量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック多量

第 16 号土坑 土層解説

- 1 細褐色 ロームブロック中量
2 黒褐色 ロームブロック中量

第 18 号土坑 土層解説

- 1 細褐色 ローム粒子少量
2 褐色 ロームブロック中量
3 黄褐色 ロームブロック多量

第 20 号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
2 細褐色 ロームブロック・炭化粒子中量
3 にい黄褐色 ロームブロック多量

第 21 号土坑 土層解説

- 1 細褐色 ロームブロック少量
2 褐色 ロームブロック多量

第 22 号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量
2 にい黄褐色 ロームブロック中量

第 23 号土坑 土層解説

- 1 灰褐色 ロームブロック少量
2 黒褐色 ロームブロック少量
3 褐色 ロームブロック多量

第 24 号土坑 土層解説

- 1 にい黄褐色 ロームブロック少量
2 褐色 ロームブロック中量

第 25 号土坑 土層解説

- 1 にい黄褐色 ロームブロック少量
2 褐色 ロームブロック中量

第 29 号土坑 土層解説

- 1 黑褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
2 黑褐色 ロームブロック中量・焼土ブロック少量
3 黑褐色 ローム粒子中量
4 細褐色 ロームブロック多量
5 黑褐色 ローム粒子少量
6 細褐色 ローム粒子多量

第 30 号土坑 土層解説

- 1 細褐色 ロームブロック中量
2 にい黄褐色 ロームブロック多量
3 細褐色 ロームブロック多量

第 31 号土坑 土層解説

- 1 黑褐色 ロームブロック多量
2 黑褐色 ロームブロック中量・焼土ブロック・炭化粒子少量
3 黑褐色 ロームブロック少量
4 黑褐色 ロームブロック中量

第 33 号土坑 土層解説

- 1 黑褐色 ロームブロック中量・焼土粒子・炭化粒子微量
2 にい黄褐色 ローム粒子多量

第 34 号土坑 土層解説

- 1 黑褐色 ロームブロック少量
2 黑褐色 ローム粒子多量

第 39 号土坑 土層解説

- 1 黑褐色 ロームブロック・炭化物中量・焼土ブロック少量
2 細褐色 ローム粒子多量・焼土ブロック少量

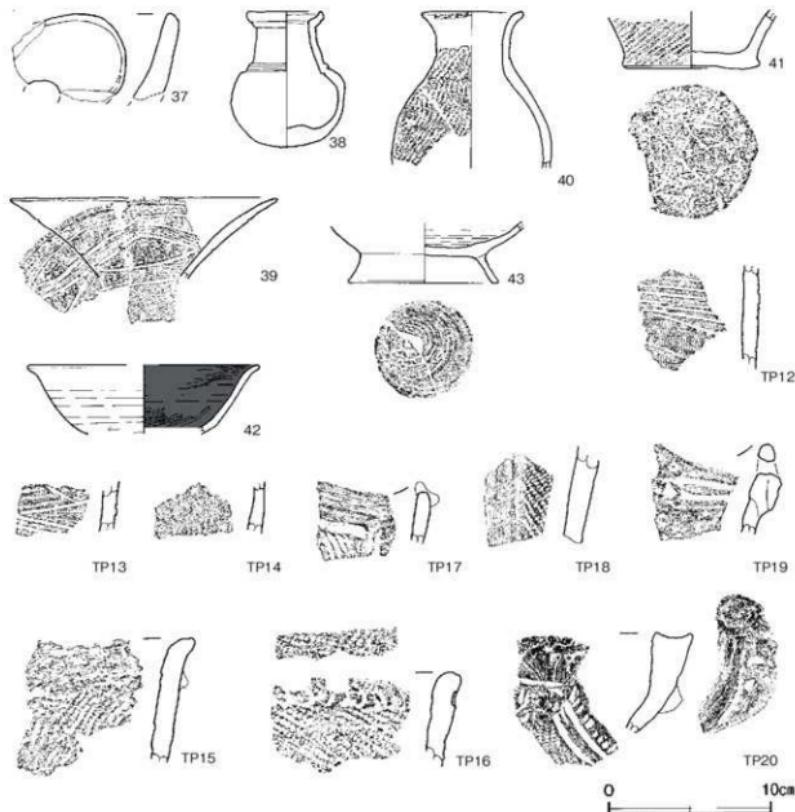
表 8 その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	A 2g8	N-0°	楕丸長方形	1.56 × 1.30	14	平坦	外縁	人為		TM10→本跡
2	B 1b3	N-55°-W	楕丸長方形	1.82 × (0.57)	20	凹凸	外縁	人為	土器、火生土器	TM 6→本跡 →SK 4
3	B 1b2	N-20°-W	楕円形	1.35 × 1.15	20	やや凹凸	外縁 破綻	人為	馬齒	TM 6→本跡
4	B 1b3	N-54°-W	(不整)楕円形	1.40 × 1.02	32	やや凹凸	外縁 破綻	人為	火生土器、馬齒	TM 6, SK 2 →本跡
5	B 1b3	N-61°-E	(円形-楕円形)	0.60 × (0.25)	(24)	平坦	外縁	人為		TM 6→本跡 →SK 4
7	A 2f9	-	[楕円形]	(4.82) × (0.85)	120	平坦	外縁	自然		TM16→本跡
9	A 3j2	N-15°-E	方形	1.45 × 1.32	25	平坦	外縁	人為	火生土器	TM15→本跡
12	B 1b3	N-10°-E	楕円形	0.38 × 0.33	65	盤状	外縁	自然	绳文土器	TM 6→本跡
13	A 2i7	N-2°-W	方形	0.50 × 0.46	47	平坦	外縁	人為		TM10, SK14→本跡
14	A 2i7	N-9°-E	楕丸長方形	1.85 × 1.51	31	平坦	外縁	人為	土器、稚	TM10→本跡 →SE Z, SK13
15	A 2g7	N-4°-W	楕丸長方形	1.56 × 1.36	20	平坦	外縁	人為		
16	A 2g0	N-3°-W	楕丸長方形	2.06 × 1.30	13	平坦	外縁	人為		
18	A 3g4	N-72°-E	(不整長方形)	(2.74) × 1.22	18	平坦	破綻	自然		
20	A 2h5	N-30°-W	(不整)楕円形	1.00 × 0.90	26	有段	外縁	人為		TM 9→本跡
21	A 2f8	N-86°-E	(円形-楕円形)	0.60 × (0.30)	36	平坦	外縁	自然		
22	A 2g4	-	円形	0.60 × 0.60	22	有段	外縁	自然		
23	A 2g2	N-85°-W	楕円形	0.98 × 0.80	22	盤状	外縁 破綻	自然		
24	A 2g2	N-69°-W	楕円形	0.84 × 0.72	20	盤状	外縁 破綻	人為	绳文土器	
25	A 2g1	N-50°-E	楕円形	0.95 × 0.78	20	凹凸	外縁	人為	绳文土器	
29	C 3a5	-	円形	1.06 × 0.98	82	平坦	外縁	人為		

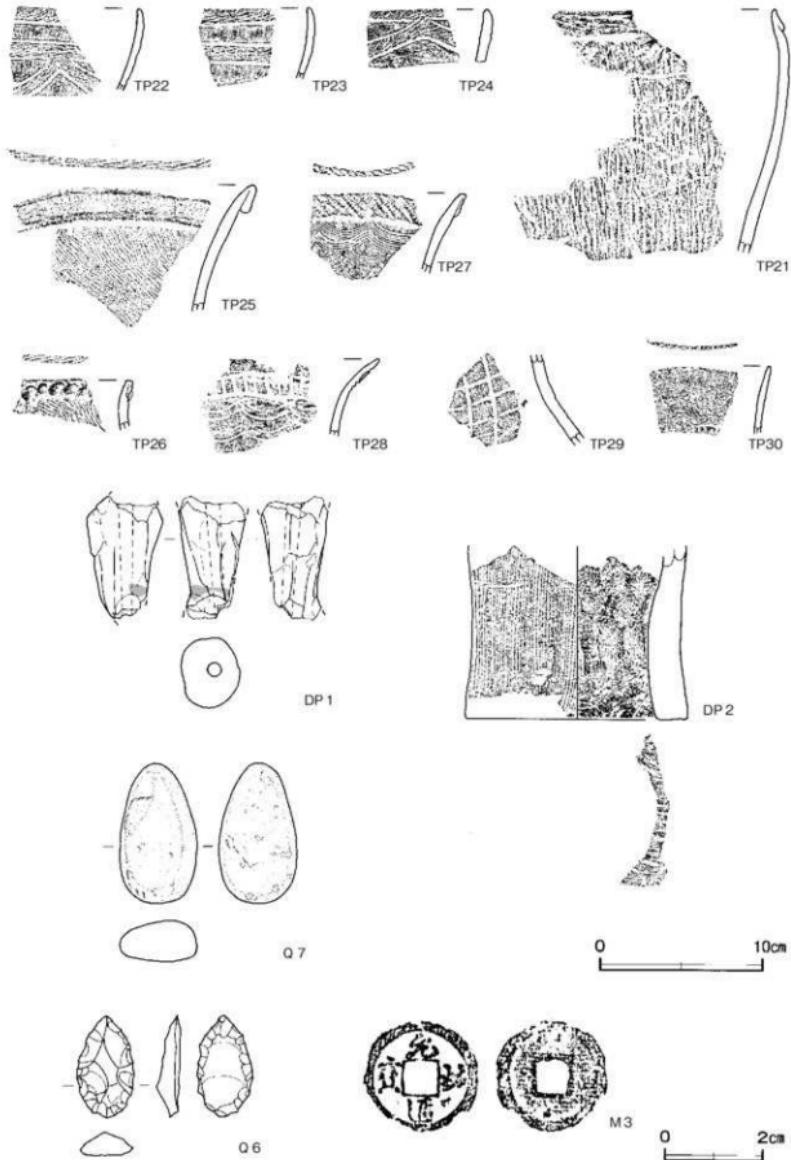
番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
30	C 3a6	N - 68° - W	楕円形	0.94 × 0.80	86	有段	外縁 直立	人為		
31	C 3a5	N - 18° - W	不整楕円形	1.42 × 1.03	82	平坦	外縁 直立	人為 陶文土器、轍	TM21 → 本跡	
33	B 3d3	N - 57° - W	楕円形	0.86 × 0.74	30	皿状	外縁 直立	自然		TM18 → 本跡
38	B 2e0	N - 82° - E	【楕円形】	(1.16) × 1.09	20	平坦	外縁 直立	自然		本跡 → TM18
39	A 3a3	-	円形	1.25 × 1.15	57	平坦	内縁 直立	人為		TM 4 → 本跡

(5) 遺構外出土遺物(第 57・58 図)

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物について、実測図と観察表で掲載する。



第 57 図 遺構外出土遺物実測図(1)



第58図 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表（第 57・58 図）

番号	種別	器種	口径	厚さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
37	繩文土器	縲鉢	-	(5.1)	-	長石・石英・細纖維	橙	普通	口縁波状部	TM18	5%
38	繩文土器	小形鉢	4.4	8.3	-	長石・石英	黄褐色	普通	頭部撥帶 外面磨き	TM14	95% PL16
39	弥生土器	広口壺	[16.2]	(4.9)	-	長石・石英・赤色粒子	に赤い黄褐色	普通	口縁部・肩部・腹部内面消	TM 6	10% PL21
40	弥生土器	小形壺	6.1	(9.5)	-	長石・石英・針状物質	に赤い黄褐色	普通	口縁部・胴部 RL 1段多条繩文施文	TM 6	30% PL16
41	弥生土器	広口壺	-	(3.6)	8.0	長石・石英・難	に赤い黄褐色	普通	附加条一様 (附加 2 条) 繩文施文 底部木葉痕	TM19	5%
42	土師器	环	[14.0]	(4.2)	-	長石・石英	に赤い黄褐色	普通	外側下端斜削へ剥り 内面へ剥き	TM 6	10%
43	土師器	高台付环	-	(3.8)	(9.2)	長石	橙	普通	底部回転希切り	TM 6	30%

番号	種別	器種	胎土		色調	文様の特徴ほか				出土位置	備考
TP12	繩文土器	縲鉢	長石	石英・細纖維	に赤い黄褐色	沈繩文施文後貝殻縲繩文施文	SI 8	PL21			
TP13	繩文土器	縲鉢	長石	石英・細纖維	に赤い赤褐色	沈繩文施文後貝殻縲繩文施文	表土	PL21			
TP14	繩文土器	縲鉢	長石	石英・細纖維	橙	貝殻縲繩文施文	表土	PL21			
TP15	繩文土器	縲鉢	長石	石英	黒褐色	口縁部・隣帯 脱胎無節縲繩文施文	表土	PL21			
TP16	繩文土器	縲鉢	長石	石英	に赤い黄褐色	口縁部・隣帯 斧部半截管による刺突文 隣部 RL 単脚 横文施文	TM 6	PL21			
TP17	繩文土器	縲鉢	長石	石英	橙	口縁部隣帯で口両側無節縲繩文施文	TM14	PL21			
TP18	繩文土器	縲鉢	長石	石英	に赤い黄褐色	側部 LR 単脚縲繩文施文後磨削	TM18	PL21			
TP19	繩文土器	縲鉢	長石	石英・雲母	に赤い橙	底面部に孔 口縁部二条の沈繩文 円形刺突文施文	TM18	PL21			
TP20	繩文土器	縲鉢	長石	石英・雲母	橙	口縁部次孔 刃目 一条及び二条の沈繩文 円形刺突文 LR O段多条縲繩文多方向に施す	TM19	PL21			
TP21	弥生土器	鉢	長石	石英・針状物質	に赤い黄褐色	口縁部折り返し 口縁部・側部 横文施文	TM15	PL21			
TP22	弥生土器	広口壺	長石	石英	暗灰黒	熱帯文施文後沈繩による変形工字文で区画 区画内磨消	TM 6	PL21			
TP23	弥生土器	広口壺	長石	石英	黄褐色	熱帯文施文後沈繩による変形工字文で区画 区画内磨消	TM 6	PL21			
TP24	弥生土器	広口壺	長石	石英・赤色粒子	に赤い黄褐色	熱帯文施文後沈繩による変形工字文で区画 区画内磨消	TM 6	PL21			
TP25	弥生土器	広口壺	長石	石英・針状物質	に赤い黄褐色	口縁部折り返し O部唇・側部 横文施文	TM18	PL21			
TP26	弥生土器	広口壺	長石	石英・針状物質	橙	口縁部折り返し 工具による押圧 O部唇・口縁部 横文施文	TM19	PL21			
TP27	弥生土器	広口壺	長石	石英	明黄褐色	口縁部折り返し O部唇・口縁部 RL 単脚縲繩文施文 頭部側面	TM15	PL21			
TP28	弥生土器	広口壺	長石	石英・雲母・繩繩	に赤い黄褐色	口縁部折り工具による沈繩文施文 O部唇から横横幅の頸 頭部側面文施文	TM19	PL21			
TP29	弥生土器	広口壺	長石	石英・針状物質	橙	頭部折り工具による沈繩文	TM18	PL21			
TP30	弥生土器	広口壺	長石	石英	に赤い黄褐色	口縁部折り工具による削み日 口縁部側面状工具 (4 本)による波状文	TM 9	PL21			

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 1	形象埴輪	(7.5)	(4.1)	(4.6)	(10.0)	長石・石英・細纖維	に赤い橙	人物埴輪左腕 手首部分に赤色 木芯中空技法	表土	PL22

番号	器種	径	器高	底径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 2	円筒埴輪	-	(10.6)	(13.6)	(303.0)	長石・石英・赤色粒子	橙	基部外面タテハケ 内面裏面の粉ナゲ 底部ヘラ削り	SK 6	PL21

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 6	罐	21	12	0.5	L1	チャート	両面押圧直面 円窓	TM 8	PL22
Q 7	磨石	8.6	4.7	2.7	161.6	安山岩	側面全面擦痕	TM 6	PL22

番号	鉢種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初期年	特徴	出土位置	備考
M 3	元祐通寶	24	0.7	0.2	(2.5)	銅	1086	北宋 銀 行書	表土	PL22

第4節 まと め

1はじめに

瑞龍古墳群は、久慈川の支流である里川とその流域の沖積地を望む標高約47mの台地縁辺部に立地している。当地域は、その恵まれた地理的環境の中で、古代から人々が連続と生活を営んできた。

今回の調査で、当遺跡は、縄文時代から室町時代にかけての複合遺跡であることが確認できた。遺構は縄文時代の竪穴建物跡3棟、土坑5基、弥生時代の土坑1基、古墳時代の方形周溝墓14基、古墳2基、土坑3基、鎌倉時代の竪穴遺構1基、室町時代の土坑3基のほか、時期不明の円形周溝状遺構1基、井戸跡2基、炉跡1基、土坑25基である。特に、古墳時代において墓域が形成され、4世紀前半に方形周溝墓が群集して築造されていたことが当遺跡の性格を特徴づける。

昭和61年の常陸太田市による調査に加え、今回の調査結果から、当遺跡の全体像が徐々に明らかになってきた。しかし、調査区は遺跡の一部分に過ぎず、さらなる広がりが推定される。ここでは、前回と今回の調査成果から、当遺跡の各時代の様相を概観した上で、中心となる古墳時代の方形周溝墓について考察を加えるものとする。

2 各時代の様相

(1) 縄文時代

縄文時代の遺構は、竪穴建物跡3棟と土坑5基が確認できた。遺構の形状及び出土遺物から、竪穴建物跡は前期初頭に、土坑は中期と考えられる。ここでは、竪穴建物跡の出土土器群について述べていくこととする。出土土器群の特徴は以下のようにまとめられる。

- ・器壁が厚く、胎土に纖維を含んでいる。
- ・口縁部文様帶には、撚糸圧痕文、半截竹管や円形竹管による刺突文が施される。
- ・胴部には無節や單節の縄文が施され、羽状を構成するものがある。
- ・縄文は口唇部や隆帶上にも施文される。
- ・内面には貝殻条痕文や擦痕文が見られる。

これらの特徴から竪穴建物跡出土の縄文土器は遠下式に比定される¹⁾。周辺では日立市遠下遺跡、那珂市森戸遺跡、伊達遺跡、茨城町奥谷遺跡で出土しており、県北地域の前期初頭の土器として位置づけられる。出土例が少なく、当地域の縄文時代前期初頭を知る上で貴重な資料になり得る。

また、確認された竪穴建物跡は、校庭造成に伴う搅乱を免れたわずか147m²ほどに集中して確認できた。本来は、当遺跡全体に縄文時代の遺構が広がっていた可能性は高い。当該期以外にも、表土や方形周溝墓・古墳の覆土からは、早期の田戸下層式（TP12～TP14）、中期の加曾利E II式（TP17・TP18）、後期の堀之内I式（TP19）、安行2式（TP20）、晩期の大洞式（38）等の土器片が出土している。このことから、当遺跡や遺跡周辺では、縄文時代に長期間にわたり生活が営まれていたことが推定できる。

(2) 弥生時代

弥生時代の遺構は、後期前半に比定できる第8号土坑のみ確認できた。しかし、表土や方形周溝墓・古墳の周溝からは当該期以外の弥生土器も出土している。瑞竜小学校に保存されていた当遺跡出土とされる壺は、胴部全体に縄文が施文され、頸部と胴部の間に3条の結節文が周回しており、中期の様相を呈している²⁾。また、今回の調査で出土した40は、口唇部及び胴部に1段多条縄文が施文された小形壺である。

折り返し口縁である TP21 は、口縁部及び胴部に撚糸文が施文された鉢で、ともに中期に比定される。39・TP22～TP24 は、撚糸文施文後、沈線による変形工字文で区画されており、その文様帯から中期の野沢 I 式に比定される。

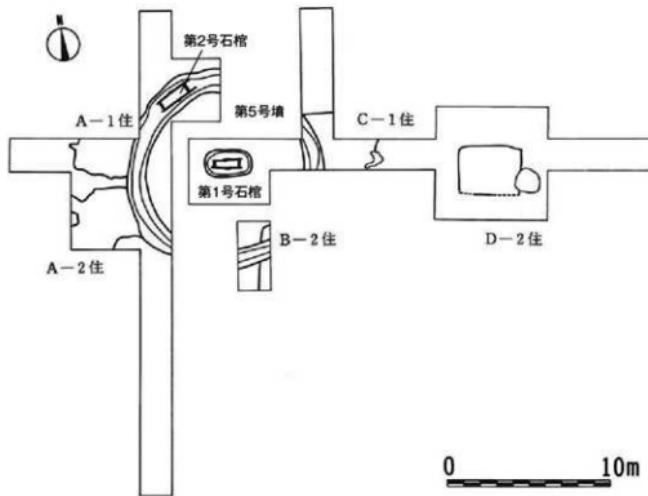
さらに、第 8 号土坑と同時期の後期前半の土器群は、TP25～TP29 で東中根式及び松原式の様相を呈している³³。後期後半の十王台式（TP30）も出土しており、縄文時代同様、弥生時代においてもこの地に集落が営まれていた可能性が高いと考えられる。

(3) 古墳時代

昭和 61 年の常陸太田市の調査によって、円墳 2 基と箱式石棺 1 基が確認されている。前回と今回の調査結果から、当遺跡の古墳時代の様相に近づいていきたいと考える。前回の調査は、今回の調査区の北側（現体育館）でトレンチ調査を行い、調査面積は 222m² であった（第 59 図参照）⁴¹。

調査の結果、当遺跡は、古墳時代に入ると墓域として利用されることが明らかとなった。4 世紀前半から方形周溝墓が築造されはじめ、台地縁辺部に広がっていく。今回の調査では 14 基の方形周溝墓を確認したが、さらに調査区域外に広がっていくことが確実に考えられる。方形周溝墓の県北地区での確認例は少ない上に、このように群集している事例は、当遺跡の性格を際立たせている。

方形周溝墓の築造後、第 6 号墳の円墳が構築されたと考えられる。第 6 号墳は昭和 61 年に、工事用取り付け道路建設時に確認され、その際に円墳の北部を調査している（第 66 図参照）。刀子 1 点が周溝内の土坑から出土している。今回の調査では、それに続く南部を調査した。遺構に伴うと考えられる出土遺物は発見のみであるが、第 4 号方形周溝墓が確認面まで埋没した段階で、それを掘り込み構築されており、埋葬施設の掘り込みが地山まで及んでいないことや埴輪の出土もないことから 5 世紀代と考えられる。

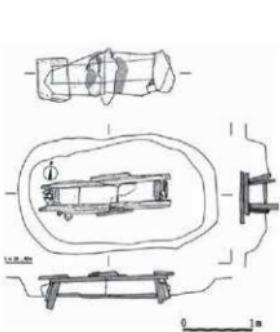


第 59 図 昭和 61 年度調査区域図 註 4 文献より転載（一部改変）

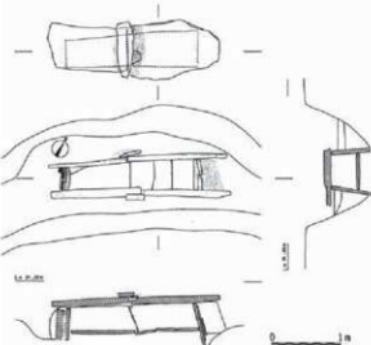
その後、第4・5号墳が築造されたと考えられる。第5号墳は、前回調査時には箱式石棺が墳丘中央部(第1石棺)と周溝内の北西部(第2石棺)で確認されている(第60・61図参照)。第1石棺は第60図のように主軸を東西にとり、楕円形の土坑内に構築されていた。被葬者は、東頭位で埋葬されていたと推定される。石棺内からは、人骨の一部と副葬品として鉄鏃10点、刀子1点が出土している。第2石棺は、周溝内の北西部で主軸は北東方向をとる。伸展葬のほぼ完全な人骨1体が北東頭位で遺存し、遺骸に織物が付着していたことからアンペラ状の織物で被ったのではないかとされている。また、周溝からは、人物埴輪・馬形埴輪・円筒埴輪が出土しており、その中でも常陸太田市指定文化財である「ヘラ状の器物を持つ女子像埴輪」が特筆される。時期は箱式石棺の形状や出土遺物から、6世紀前半に比定されている。

第4号墳は前回調査時、第6号墳と同様、工事中に確認されたが未調査であった。今回の調査において、箱式石棺及び設計線と思われる周溝を確認した。また、石棺の中から遺骸の一部が出土し、頭蓋骨や下頬骨、歯牙の出土状況から東頭位で体正面を北方に向け横向きで埋葬されたと考えられる。箱式石棺の構築方法や規模、軸線が第5号墳と同様であることから6世紀前半と考えられる。

このように当遺跡は、古墳時代には墓域として方形周溝墓群が築造され、その後、円墳が築造されていったことがわかった。方形周溝墓は、調査区の東と南にも広がっていくことが想定される。また、今回の調査区の西側の畑で箱式石棺が耕作中に見つかっており、円墳群が北や西に広がっているものと考えられる。



第60図 第1石棺実測図 註4文献より転載



第61図 第2石棺実測図 註4文献より転載

(4) 平安時代

前回の調査において、10世紀代と考えられる竪穴建物跡5棟が確認されている⁵⁾。いずれも、一部のみの調査か遺存状態が不良なため、形態等は明確ではない。出土遺物の大部分は、土師器の壺・高台付壺で、半数以上が内面黒色処理が施され、底部は回転糸切りが主体である。竪穴建物跡5棟のうち4棟は、第5号墳の周溝や墳丘を掘り込んでいるため、10世紀代には墳丘は失われていたと考えられる。今回の調査では、5世紀から9世紀代の遺物は当遺跡では殆ど見られないことから、その時代は墓域として機能し、墳丘が遺存していたものと考えられる。

(5) 鎌倉時代・室町時代

当該期の遺構は、鎌倉時代の竪穴造構1基、室町時代の土坑3基である。平安時代末期以降、当地方は佐竹氏の本拠地となり、多くの城館や寺社が存在している。当遺跡では当該期の遺構はわずかで、城館に

関わるものは確認できなかった。しかし、14世紀後半に比定できる第11号土坑は、土師質土器の小皿2点が正位と逆位で埋納されていた。当遺跡から1kmほど南の小野崎城跡でも多数の土師質土器の小皿が、1辺50cmほどの方形の土坑に埋納されていた。その中には、「東」「西」「南」「北」と墨書きされていたものがあり、地鎮に関する埋納の可能性がある⁶⁾。当遺跡の土坑も形状が似ており、当該期の埋納土坑として関連が考えられる。

3 方形周溝墓について

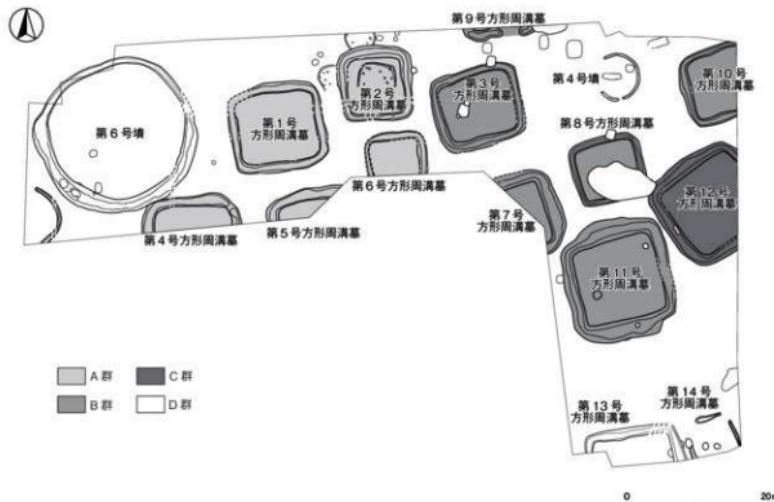
(1) 方形周溝墓の群構成及び形態的特徴

今回の調査において、14基の方形周溝墓が群集して確認できた。まず、遺跡内における群構成及び形態的特徴について検討していく。

塙谷修氏は茨城県域の方形周溝墓の群構成を以下のように分類している⁷⁾。

- I 単独で存在する。
- II a 数基で隣接して存在する。
- II b 数基で連接して存在する。
- II c 数基が散在して存在する
- III 10基以上が群集する。

当遺跡はこの分類によれば、IIIにあたり、方形周溝墓13基が群集する水戸市の赤塚古墳群や23基が群集する土浦市の山川古墳群と同様の群構成をなしている（表9参照）。さらに、赤塚古墳群は3基前後にによる主軸の異なる3～4の主軸群が存在することが指摘されている⁸⁾。当遺跡の14基は主軸方向及び配置によって、下記の4群に分類できる（第62図参照）。



第62図 瑞龍古墳群方形周溝墓群構成図

A群 N - (5°～7°) - W: 第1・2・4～6号方形周溝墓

B群 N - (14°～20°) - W: 第3・7～11号方形周溝墓

C群 N - 34° - W: 第12号方形周溝墓

D群 N - (10°～20°) - W: 第13・14号方形周溝墓

それぞれが近接して築造されており、集団ごとに与えられた区域に方形周溝墓が順次構築されていった様子がうかがえる。

次に、各方形周溝墓の平面形態であるが、茨城県域における方形周溝墓の形態は、牛久市の姫神遺跡や五霞町の同所新田遺跡で長方形を呈するものが見られるが、正方形を呈しているものが大部分を占める^⑨。姫神遺跡や同所新田遺跡は南関東系の弥生土器の系譜上にある装飾壺が出土しており、当遺跡よりも古段階に位置づけられる。当遺跡のものは、平面形態がほぼ正方形を呈している。しかしB群は、わずかではあるが、東西辺が長く、長方形を呈する傾向がある。

また、周溝は全周が確認できたものが5基、形状から全周すると思われるものは7基である。A群は周溝幅が狭く、北辺で外縁部がやや膨らむ傾向が見られる。それに対して、B群はA群と比較すると周溝の幅が広く、掘り込みも深い。当遺跡で最大規模の第11号周溝墓を除いては、南辺の外縁部が膨らむ傾向がある。第11号周溝墓は南北辺で外縁部が大きく膨らみ、規模・形状からも他の遺構とは異質であり、当遺跡の中心的な方形周溝墓と考えられる。また、C群の第12号周溝墓も北側で外縁部が膨らむ傾向がある。古墳時代の方形周溝墓は全国的に周溝が全周するタイプが多く、茨城県域でも周溝が全周するタイプが多く確認されている。当遺跡でも、同様の傾向が確認できた。

第9号周溝墓は南辺の中央が陸橋部となる可能性があるが、確認できた範囲が限られているため明確ではない。さらに第14号周溝墓は北東・北西コーナー部に陸橋部が確認された。南部が未調査のため、4隅に陸橋部を有するかは不明である。県北部の日立市滑川浜館遺跡でも2か所のコーナー部に陸橋部を有する方形周溝墓が確認されており、陸橋部が2か所のみとなる可能性もある^⑩。このような周溝が全周しないタイプは、本県域では鉢釜遺跡、赤塚古墳群、中畠遺跡、花室城跡、堂東遺跡、中妻遺跡などでも確認されている。

(2) 出土土器及び出土状況

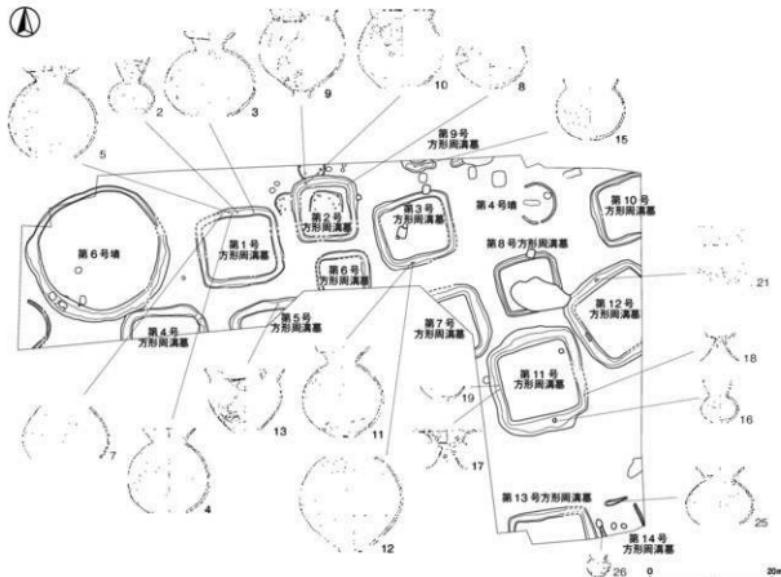
方形周溝墓からの主な出土土器と遺構は第63図のとおりである。ここから、当遺跡の土器の出土状況は次のようにまとめられる。

- ・第1・3号方形周溝墓の出土土器は壺主体である
- ・第2・5・9号方形周溝墓の出土土器は壺主体である。
- ・第11号方形周溝墓の出土土器は堆・装飾器台・器台・高坏などの小形精製土器からなる。
- ・第12号方形周溝墓の出土土器には弥生土器が含まれる。
- ・第14号方形周溝墓からは小形壺が出土している。

このように遺構ごとに出土土器に違いが認められる。まず、当遺跡において、最大規模である第11号周溝墓に着目してみたい。第11号周溝墓は前述したように、周溝の形状も南北で外縁部が膨らみ、他の方形周溝墓と異なっている。そして出土土器は東辺南部から器台が正位で、南辺中央部から赤彩の堆が底部を打ち欠かれた状態で横位で、西辺中央部から赤彩の高坏が脚部を欠損した状態で逆位で、同じく西辺中央からほぼ正形の北陸系の赤彩の装飾器台が横位で出土している。それぞれが底面及び覆土下層から出土している。これに対して、その他の方形周溝墓は、壺と壺が主体で覆土中層から、南または北の特定方向

の周溝から出土している。そこから、第11号周溝墓とその他の造構では、葬送儀礼の形態及び時期の違いが推定される。第11号周溝墓は、築造後間もなく葬送儀礼が行われ、方台部に据え置かれたものが転落もしくは周溝内に遺棄された可能性がある。それに対して、それ以外の方形周溝墓では一定期間の経過後、中形の壺・甕類を使った葬送儀礼が営まれ、方台部に据え置かれたものが、覆土中層に転落したものと考えられる。弥生時代から古墳時代にかけての、他県の例を見ると、壺・甕類に対して、小形精製土器は底面もしくは覆土下層から出土することが多く、そこから葬送儀礼の違いも想定されているが、当遺跡でも同様の出土状況を確認することができた¹⁰。このような方形周溝墓の規模・形状の違い及び出土土器、想定される葬送儀礼の違いから集団内における被葬者層の差異を考えることは可能と思われる。

また、当遺跡では、方形周溝墓からの出土土器を壺主体と甕主体に分けることができた。葬送儀礼に伴う土器への変形行為は、全て焼成後に行われていた。壺は底部を打ち欠いたもの4点、底部を穿孔したものの1点が確認できた。その中で第3号周溝墓では壺2点が周溝南部の覆土中層から隣接して出土した。12は工具によって内面から底部が穿孔されていた。11は底部が欠損しており、40cm程離れた所でその底部が出土している。土器を観察する限り、内側から工具類で穿孔した痕跡は確認できない。しかし、外側から打ち欠いた可能性は否定できず、その場で打ち欠き行為を行った可能性は残しておきたいと考える。また、甕類は底部・台部穿孔もしくは打ち欠き後、周溝内で破碎された状態で出土しているものが確認できた。第2号周溝墓の9と10は同じ場所から重なって出土しており、調査時には当初1個体であると考えられた。そのような出土状況から、転落し割れたとは考えがたく、葬送儀礼としての破碎行為が行われたと考えられる。当遺跡においては、壺類においては底部穿孔もしくは打ち欠き、甕類においては底部・台部穿



第63図 瑞龍古墳群遺物出土状況図

孔もしくは打ち欠き後破碎という行為が行われていたことが確認できた。また、当遺跡の方形周溝墓の出土土器は壺主体と甕主体に分けることができたが、ここからも集団内での被葬者の差異を考えることができるのはないだろうか。

さらに、方形周溝墓からは、形や大きさ、色調が類似し、一对の土器として、葬送儀礼に使用されたと考えられる土器の出土が指摘されている¹²⁾。当遺跡の出土土器を見ると第1号周溝墓の3と5、4と7の壺、第2号周溝墓の9と10の台付甕と甕、第3号周溝墓の11と12の壺が、形や大きさ、色調がそれぞれ類似しており、一对の土器として使用され、供獻された可能性がある。葬送儀礼の一形態として捉えることができる。

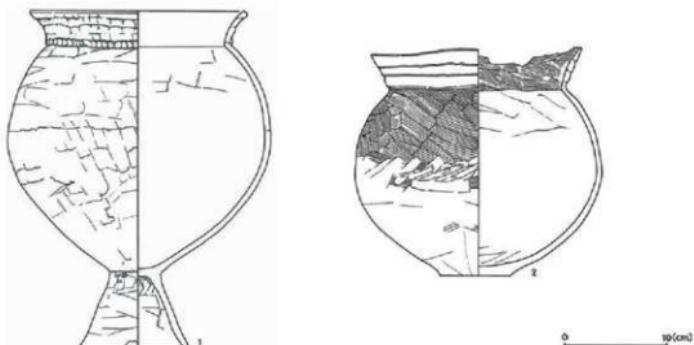
次に、特異な土器として第12号周溝墓の弥生土器と第14号周溝墓の小形壺が挙げられる。第12号周溝墓から出土した21の弥生土器は、久慈川流域以北の十王台式5期に比定できる¹³⁾。21は胴部中位から下半部が欠損し、覆土中層から割れた状態で出土している。当該期の十王台式と土師器の共伴事例は郡河川流域、酒沼川流域では確認されているが、久慈川流域では明確ではない。21は他の方形周溝墓の壺・甕類の出土と同様に覆土中層からの出土であるが、出土土器が少なく器種も限定されていることから、その評価について周辺遺跡の類例を待って慎重に検討していく必要があると考える。

また、第14号周溝墓からは、26の小形壺が出土している。この小形壺は弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落遺跡から出土することで知られる。26は比田井克仁氏の型式分類のA2類に比定できる¹⁴⁾。県域においては、県南部に集中している傾向があり、それぞれ竪穴建物跡や土坑からの出土である。県域での集成を試みた駒澤悦郎氏は、比田井氏の「集落紐帯を意味する屋内祭祀儀礼に関わる器」という性格に加え、県域の出土状況から「住居廃絶儀礼に関わる器」という性格も指摘している¹⁵⁾。今回、方形周溝墓から出土したことにより、「葬送儀礼に関わる器」としての小形壺の性格も加えて考えられる。

(3) 方形周溝墓の築造時期と周辺遺跡との関係

当遺跡の方形周溝墓は、出土土器から4世紀前半に比定できる。各遺構間及び主軸群に時期差があることは想定できるが、土器が出土していない遺構もあり明確にはできない。そして、出土土器の時期差は小さく、4世紀前半の範疇で考えられるものである。短期間に、集団の長及び成員の墓が順次築造されていったものと考える。しかし、当該期はすでに、当遺跡から南西6.5kmほどの久慈川支流の山田川右岸には、梵天山古墳や星神社古墳などの前期の大形前方後円墳が築造されており、そのような古墳への被葬者との間の階層差がすでに存在していたことが想定される。当地方の弥生文化にはない方形周溝墓という墓制を有した集団が久慈川から里川を北上し、この地で生活を営んだか、あるいは、そのような集団と交流をもつ人々が、方形周溝墓を採用し築造したと考えられる。

また、当遺跡から8kmほど南の久慈川右岸台地上に森戸遺跡がある。森戸遺跡からは豪族居館の堀が確認されており、そこから多数の古墳時代前期の土師器が出土している。その中に、東京湾岸の内房地域から搬入された忠実品とされる「く」の字状輪積口縁付甕と「く」の字状輪積口縁平底甕が出土している。このことから、田中裕氏は当遺跡を造営した集団を「面的な支配や交流関係ではなく、内房地域とピンポイントに関係を有していたか、少なくとも内房地域と直接的関係を有していた茨城県南の特定集団と選択的に関係を有していた可能性がある」としている¹⁶⁾。当遺跡の第2号周溝墓から出土した9と10は、この系譜上にある土器である。「く」の字状輪積口縁甕は、弥生時代末から古墳時代初頭に出現し消失していく限定的な土器であり、当遺跡の方形周溝墓の被葬者と森戸遺跡の豪族居館の居住者集団との関連、さらには東京湾岸周辺との直接的・間接的な関連が推定される。



第64図 森戸遺跡出土土器 註17文献より転載

(4) 集落との関係

今回の調査において古墳時代の集落は確認できなかったが、被葬者集団は同じ台地上に集落を営んでいたと考えられる。約1km南に位置する瑞龍遺跡では、古墳時代前期の堅穴建物跡が確認されており、当遺跡との関連が想定される。しかし、それ以外にもこの台地上に集落が営まれていた可能性は高い。

本県域における集落と方形周溝墓の関係について、塩谷氏は次のように分類している¹²⁾。

- ① 尾根上に連接して構築され、集落から隔離し独立した墓域を形成するもの
- ② 10基以上が台地縁辺に群集して墓域を形成し、近隣に同時期の集落が存在するもの
- ③ 同時期集落に隣接して墓域を形成するもの
- ④ 同時期集落内に1基だけ存在するもの
- ⑤ 同時期集落内に数基存在するもの
- ⑥ 集落から離れて、単独で1基だけ存在するもの

この分類では、当遺跡は周辺に集落が想定されることから②に該当し、前述した赤塚古墳群、山川古墳群と同じ形態をとる。また、本県域の方形周溝墓における土器の出土状況と集落の位置を分析した皆川修氏は、土器は集落を意識した方台部に据えおかれた可能性を指摘している¹³⁾。当遺跡において、A群は土器が北に集中しており、B群では南に集中している傾向がある。方形周溝墓の周溝の形態も外縁部が、A群は北辺の中央で膨らみ、B群は南辺の中央で膨らんでいる。この周溝の形状と遺物の出土状況の関連も考えられる。皆川氏の論によれば、当遺跡では、それぞれの集団の集落は南北にそれぞれ立地していた可能性が考えられるのではないかだろうか。

(5) 茨城県域の方形周溝墓の特徴と瑞龍古墳群

ここでは、当遺跡に見られる特色を茨城県域で確認された方形周溝墓と比較し、方形周溝墓の立地及び受容と展開について記述していくこととする。第65図及び表9に見られるように、本県域において、49遺跡163基の方形周溝墓が確認されている。

第65図からその立地を見ると、塩谷氏が指摘しているように、「主要水系の支流沿いやその谷筋など地理的にやや奥まったところに位置するものが多く、限られた小領域内に方形周溝墓をもつ遺跡（集落）

が集中して分布する」という傾向がうかがえる¹⁹⁾。当遺跡も、主要水系である久慈川の支流である里川沿いの台地縁辺部に立地しており、他の方形周溝墓と同様の立地である。また、調査の多寡に違いはあるが、県南部に多く、県北部には少ない傾向が見られる。特に、久慈川以北では、5例が確認されているのみであり、今回の当遺跡での方形周溝墓の確認は、古墳時代前期の当地域の様相を知るばかりではなく、茨城県域における方形周溝墓の展開を考える上で特筆すべきものである。

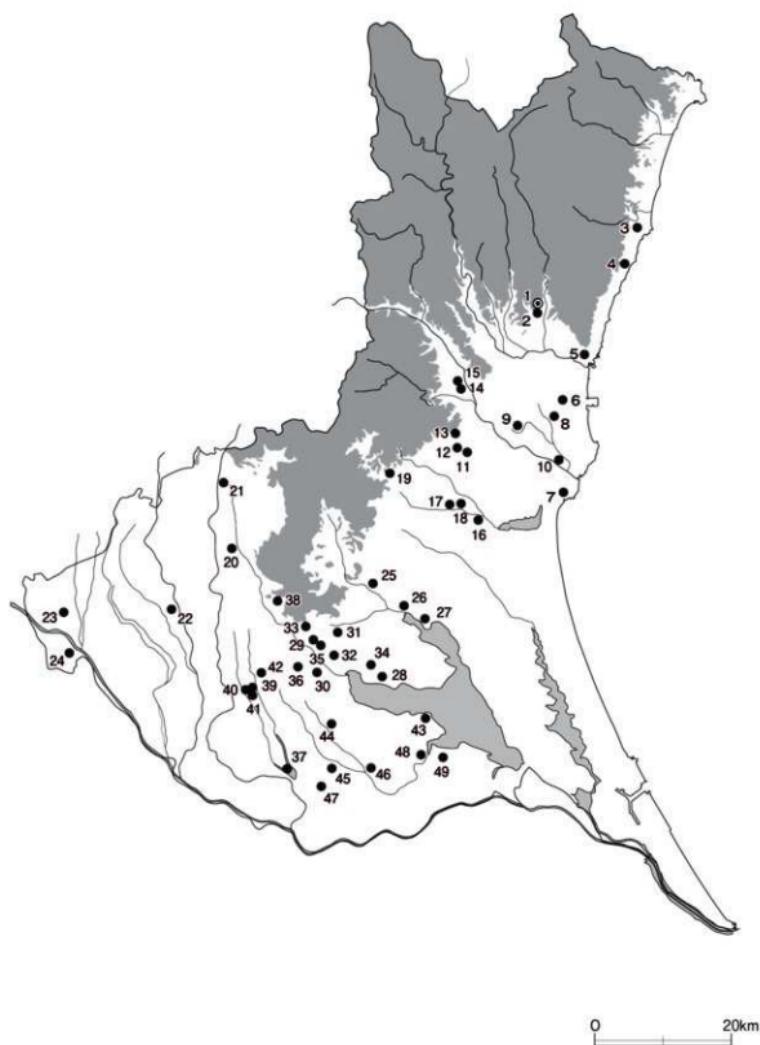
そして、潤沼川を境界とする県南部と県北部で方形周溝墓の受容と展開の在り方に差異があることが指摘されている²⁰⁾。県南部では、姥神遺跡や泊崎城址、權現平古墳群、面野井古墳群のように下総地域の弥生土器の系譜上の土器群が出土しており、下総地方との近縁性が認められる。下総地方と茨城県域の間での文化交流は房総-日光線の分水嶺を超えて、印旛沼周辺のルートを通じてなされていたと考えられている。印旛沼周辺には、湿地帯が広がり遺跡が所在しない無住域が存在する一方、当該期の遺跡が集中する地域がある。この周辺を経由して、茨城県域への理想的水上交通路が存在していたと推定されている²¹⁾。

また、下総地方では、弥生時代末から古墳時代にかけて、方形周溝墓が集落に1~3基程度存在し、銅鏡やガラス製の玉などの副葬品が見られ、被葬者が特定階層に限られていると考えられている。これは、県南部の方形周溝墓の特徴と類似する。前述した面野井古墳群では、方台部中央に設置された木棺直葬の埋葬施設が構築され、その中から石製の勾玉や管玉、ガラス製の玉などの副葬品が出土した。さらに、周溝からは装飾壺が出土するなど下総地方との関連が想定される²²⁾。

一方、潤沼川以北の県北部は、出土土器から県南部に比べて新しい様相を示している。県南部に方形周溝墓が波及した後、霞ヶ浦・北浦などを経由し、那珂川・久慈川沿いに伝播していくことが想定される。那珂川・久慈川沿いは東海地方からのS字状口縁台付壺の分布域であり、移住者の存在が指摘されている地域である。また、前述した森戸遺跡や瓜廻城跡No.4地点²³⁾などから出土する東京湾岸に系譜の求められる土器も同時に見られ、田中裕氏が述べているように東海や上総、下総などの土器分布図が斑状に形成されているといえる²⁴⁾。当遺跡においても、前述したように東京湾岸の内房地域の土器の影響が見られ、そのような土器分布図の一つを形成していると考えられる。また、県南部が特定階層に限定され、共同体の首長墓的様相が見られるのに対して、県北部では、周溝墓群間、または周溝墓内で階層差が見られ、集団のメンバーへと造墓階層を拡大していったとされている²⁵⁾。当遺跡においても、これまでの考察に見られるように、方形周溝墓の規模や形状、遺物の種類や出土状況の違いから被葬者層の差異を想定することが可能である。

以上、まとめると方形周溝墓は、第一波として下総地方から本県域南部へ、第二波として、霞ヶ浦・北浦を経由し那珂川・久慈川へと、東京湾周辺を経由した東海系の文化とともに波及したと考えられる。その一連の人の動きの中で、瑞龍の台地上に、東京湾周辺から移住または移住した人々と交流した人々によって集落が形成され、方形周溝墓が築造されていったと考えられる。

また、当地方は久慈川を通じて福島県域の中通り地方、太平洋を通じて浜通り地方、さらに仙台地方へと水路、陸路での移動が可能であり、文化が波及していく過程で経由地となったと考えられている²⁶⁾。当遺跡周辺も里川から中通り地方へと、人の動きがあった可能性は高い。古墳時代前期、当地方は多様な文化の交錯する地域であったと言える。そのような大きく人の移動、文化が波及した時代に、当地で方形周溝墓が築造されていったと考える。



第65図 茨城県域方形周溝墓分布図

表9 茨城県域方形周溝墓一覧

市町村	番号	遺跡名	方形周溝墓数	群構成	集落との関係	市町村	番号	遺跡名	方形周溝墓数	群構成	集落との関係	
常陸太田市	1	瑞龍古墳群	14	III	②	小美玉市	27	椎規平古墳群	2	II b	-	
	2	小野崎城跡	1	-	-		28	戸崎中山道跡	1	I	④	
日立市	3	十王台古墳群	1	I	-	土浦市	29	上坂田北部貝塚	1	-	-	
	4	滑川浜館遺跡	3	II a	-		30	宍塙遺跡	1	-	-	
東海村	5	金井戸遺跡	1	I	④	31	原出口遺跡	8	II a	③	-	
	6	須和間古墳群	6	II b	①		32	山川古墳群	23	III	②	-
大洗町	7	倪釜遺跡	3	II a	⑤	33	田宮梶の宮遺跡	3	II a	⑤	-	
	8	下高場遺跡	1	[II a]	-		34	壺谷清水西遺跡	1	I	⑥	-
ひたちなか市	9	天神山遺跡	1	[III]	-	35	赤路堂遺跡	1	-	-	-	
	10	下高井遺跡	4	II a	③		36	花室城跡	2	II a	-	-
水戸市	11	赤塚古墳群	13	III	②	37	泊崎城址	1	[I]	[④]	-	
	12	大塚新地遺跡	1	I	④		38	北条中台古墳群	2	II a	⑤	-
	13	向井原遺跡	5	II c	⑤	39	島名前野東遺跡	3	II a	⑤	-	
	14	十万原古墳群	1	I	④		40	島名ツバタ遺跡	3	II a	-	-
	15	二の沢古墳群	5	II a	⑤	41	島名境松遺跡	1	[I]	[④]	-	
茨城町	16	小堀貝塚	1	[I]	-		42	面野井古墳群	4	II a	-	-
	17	南小堀遺跡	1	[I]	[④]	43	根本遺跡	1	I	[④]	-	
	18	中畠遺跡	4	II a	⑥		44	実穀寺子遺跡	2	II a	⑤	-
笠間市	19	新善光寺跡	2	II a	⑤	45	源台遺跡	6	II b	-	-	
	20	中妻遺跡	3	II a	-		46	姥神遺跡	3	II c	⑤	-
筑西市	21	堂東遺跡	5	II a	⑤	47	廻り地 A 遺跡	4	II a	-	-	
	22	一本木遺跡	1	[I]	-		48	幡の台古墳群	1	[I]	[④]	-
古河市	23	积迦才仏遺跡	6	II a	-	49	立切遺跡	1	I	⑥	-	
	24	同所新田遺跡	1	I	-							
石岡市	25	後生車古墳群	3	II a	①							
	26	上野遺跡	1	-	-							

※群構成及び集落との関係は塙谷氏の分類による。 P27, P81 参照

※表中の遺跡名は「茨城県道遺跡地図(地名表編・地図編)」に基づいて作成した。

4 おわりに

以上、瑞龍古墳群について時代ごとの様相を概観した上で、当遺跡を特徴づける方形周溝墓について先行研究に則しながら、特徴を示してきた。

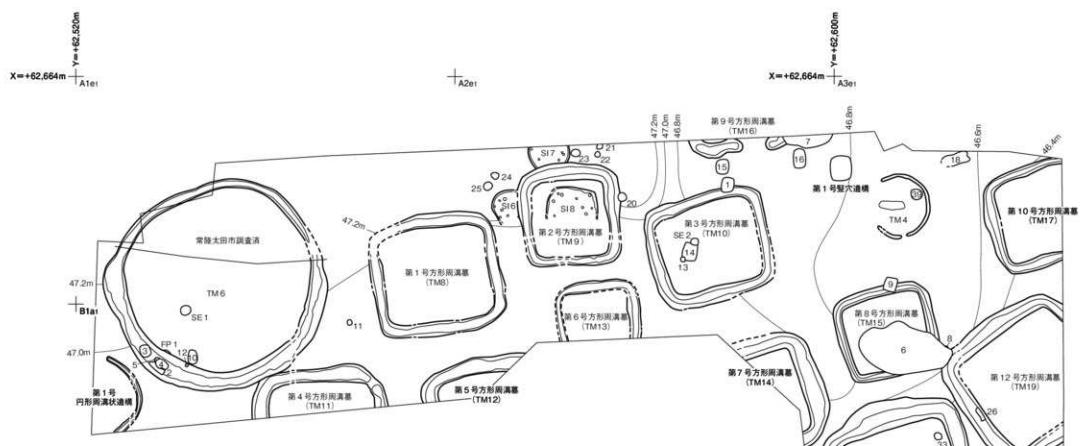
当遺跡及びその周辺では、縄文時代早期から弥生時代後期にかけて、擾乱のため遺構の確認はわずかではあったが、出土土器から長く生活が営まれてきたことが分かった。恵まれた地理的環境の中で、縄文時代、弥生時代を通じて、台地上に集落を形成し、里川と周辺の沖積地を利用した生活が営まれていたことが想像される。

古墳時代には、台地上に集落及び墓域が形成され、里川とその流域の沖積地を生産域として農耕が行われていたと考えられる。東京湾周辺から新たな文化をもった人々が移住、またはそのような人々との交流を通して、当地方に方形周溝墓が築造されていったことが考えられる。また、その後、古墳時代を通して墓域として古墳群が形成されていたことが分かった。

今回の調査において、県北部では調査例の少ない方形周溝墓の好資料を得ることができた。今後の周辺の調査事例の増加待ち、さらに瑞龍古墳群の全容が明らかになっていくことを期待したい。

註

- 1) a 那珂町史編さん委員会「那珂町の考古学」 1990年1月
- b 茨城県立歴史館「茨城県の縄文土器」「茨城県立歴史館資料叢書9」 2006年3月
- 2) 高橋博之、横倉要次「常陸太田市瑞竜小学校所蔵の弥生式土器について」『婆良岐考古』第5号 婆良岐考古同人会 1983年4月
- 3) a 註1aと同じ
 b 横倉要次「那珂郡那珂町白河内松原遺跡採集の弥生土器について」『婆良岐考古』第23号 婆良岐考古同人会 2001年5月
- 4) 小室勉「瑞龍古墳群発掘調査報告」常陸太田市教育委員会 1987年3月
- 5) 註4と同じ
- 6) 茨城県立歴史館「戦国大名佐竹氏」茨城県立歴史館 2005年2月
- 7) 塩谷修「第五章 茨城県の方形周溝墓」「関東の方形周溝墓」同成社 1991年3月
- 8) 註7と同じ
- 9) a 奥原遺跡発掘調査会「奥原遺跡」牛久市 1989年12月
 b 村田裕「清水道路 同所新田道路 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書」「茨城県教育財团文化財調査報告」第290集 2008年3月
- 10) 小高五十二「一般国道6号（日立バイパス）改築工事地内埋蔵文化財調査報告書 山崎遺跡 滑川浜館遺跡」「茨城県教育財团文化財調査報告」第92集 1994年9月
- 11) 福田聖「方形周溝墓における土器使用と葬構成」「原始・古代日本の祭祀」同成社 2007年7月
- 12) 及川良彦「「方形周溝墓」出土の土器 南関東②東京都」「関東の方形周溝墓」同成社 1991年3月
- 13) 鈴木善行「旅する「十王台式」－弥生時代終末の久慈川・那珂川流域－」「ひたちなか埋文だより」第39号 ひたちなか埋蔵文化財センター 2013年3月
- 14) 比田井克仁「関東における古墳出現期の変革」雄山閣出版 2001年7月
- 15) a 胸澤悦郎「茨城県における弥生時代後期から古墳時代前期の小形壺の系譜（1）－小美玉市出崎遺跡の小さな壺から－」「年報25（平成17年度）」財団法人茨城県教育財團 2006年11月
 b 胸澤悦郎「茨城県における弥生時代後期から古墳時代前期の小形壺の系譜（2）－小美玉市出崎遺跡の小さな壺から－」「年報26（平成18年度）」財団法人茨城県教育財團 2007年11月
- 16) 田中裕「茨城県北部から出土した東京湾岸南部の土器－茨城県那珂市森戸道路「豪族居館」出土の古式土師器の再検討－」「茨城県史研究」95 茨城県立歴史館 2011年3月
- 17) 註7と同じ
- 18) 脊川修「茨城の方形周溝墓の一考察」「領域の研究－阿久津久先生還暦記念論文集－」阿久津久先生還暦記念事業実行委員会 2003年4月
- 19) 註7と同じ
- 20) a 註7と同じ
 b 設楽博巳「常陸地方における方形周溝墓をめぐって」「比較考古学試論」雄山閣出版 1987年6月
- 21) 田中裕のご教示による
- 22) 小林和彦「面野井古墳群 都市計画道路新都市中央通り線バイパス建設事業地内埋蔵文化財調査報告書」「茨城県教育財团文化財調査報告」第391集 2014年3月
- 23) 瓜連町教育委員会「瓜連町文化財調査報告 瓜連城地内埋蔵文化財発掘調査報告書 No.1～No.4地点」1996年 3月
- 24) 註16と同じ
- 25) 註7と同じ
- 26) a 比田井克仁「古墳時代前期における関東土器圈の北上」「史館」第33号 史館同人 2004年5月
 b 比田井克仁「地域政権と土器移動－古墳時代前期の南関東土器圈の北上に着目して－」「古代」早稲田大学考古学会 2004年11月



第66図 瑞龍古墳群遺構全体図

付 章

常陸太田市瑞龍古墳群の円墳および方形周溝墓の周溝覆土における火山灰分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1 はじめに

茨城県常陸太田市に所在する瑞龍古墳群は、茨城県北部を流れる久慈川の支流である里川の右岸に形成された河岸段丘上に位置する。段丘は、下末吉海進の後の小海進（おそらく小原台海進）により形成された海成層を基盤とするとされている（茨城県, 1993）。ことから、その形成時期は南関東のおよそ武藏野面（M1面）に相当すると考えられる。

発掘調査では古墳群を構成する円墳および方形周溝墓に伴う周溝が多数検出されているが、遺物の出土に乏しいために、その詳細な築造年代の決定が課題とされている。本報告では、円墳（TM-6）および方形周溝墓（TM-8）の周溝の埋積層における火山灰（テフラ）の産状を確認することにより、円墳および方形周溝墓の築造に係る年代資料を得ることを試みる。

2 試料

試料は、古墳時代前期頃とされる方形周溝墓を切る円墳周溝（TM-6）、および古墳時代前期頃とされる方形周溝墓周溝（TM-8）に設定された覆土断面から採取された。

TM-6では、厚さ5cmで連続に上位より試料番号1～14までの試料が採取されており、これらのうち、試料番号1～7は埋積層上部を構成する黒色黒ボク土、試料番号8～10は埋積層下部を構成する黒褐色黒ボク土、試料番号11～13は埋積層下底部を構成する暗褐色黒ボク土、試料番号14は、周溝基底直上の褐色土である。分析には試料番号4、9、11の3点を選択した。

TM-8でも同様に厚さ5cmで連続に上位より試料番号1～9までの試料が採取されており、これらのうち、試料番号1～5までは埋積層上部を構成する黒色黒ボク土、試料番号6、7は埋積層下部を構成する黒褐色黒ボク土、試料番号8、9は周溝基底直上の暗褐色土である。分析には試料番号3、5、6の3点を選択した。

3 分析方法

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスについては、その形態によりバブル型と中間型、軽石型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるY字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く延びた繊維束状のものとする。

4 結果および考察

今回分析対象とした6点の試料からは、スコリア・火山ガラス・軽石のいずれも検出することはできなかつ

た。処理後に得られた砂分の状況は、いずれの試料も同様であり、粗粒砂～極粗粒砂径の長石類（ほとんどは斜長石と考えられる）の鉱物片を主体とし、斜方輝石の鉱物片が中量程度混在し、他に单斜輝石の鉱物片や石英の鉱物片が含まれる。

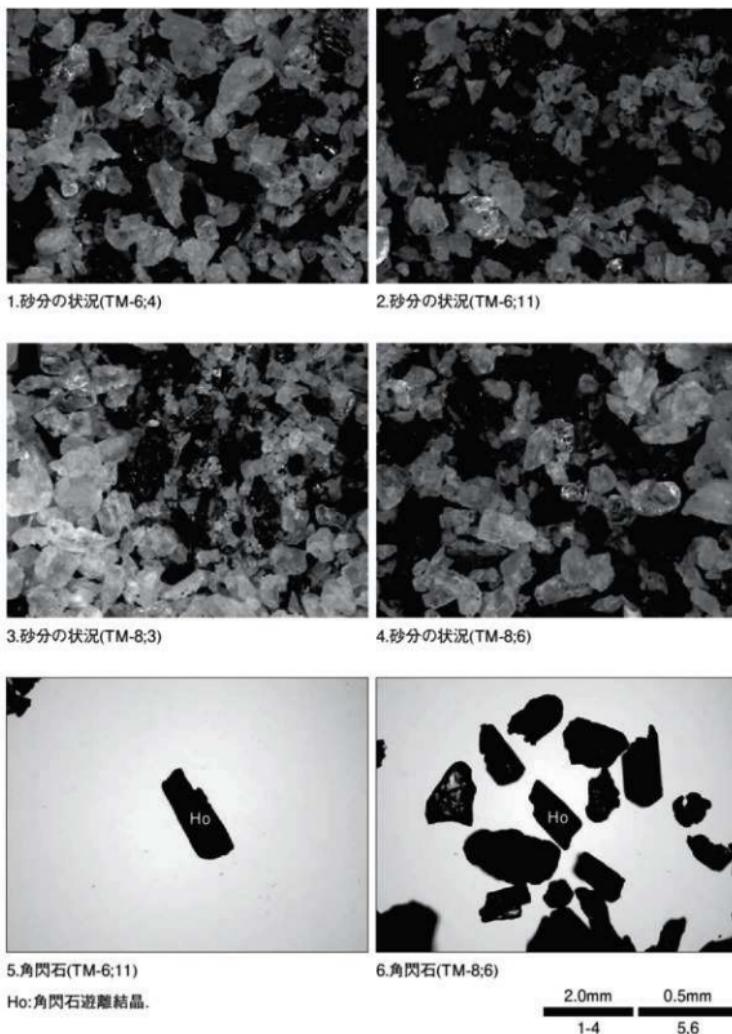
また、6点の試料には中粒砂径以下の自形を呈する新鮮な角閃石の鉱物片が少量含まれていた。この角閃石の鉱物片は、上述した外観から、比較的新しい時代（おそらく完新世）に噴出したテフラ中に含まれる遊離結晶に由来すると考えられる。由来するテフラとしては、瑞龍古墳群の地理的位置とテフラの分布状況（例えば町田・新井（2003）など）から、古墳時代に榛名火山から噴出したテフラである榛名二ツ岳浜川テフラ（Hr-FA）または榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr-FP）（新井, 1979; 早田, 1989）のいずれかに由来すると考えられる。Hr-FAは火碎流の噴出を主体とする活動であり、分布域は給源から東方に広がり、遠隔地では細粒の火山ガラスを含むことを特徴とする。Hr-FPは軽石噴火を主体とする活動であり、その分布軸は北東方向に向いており、遠隔地においても軽石として認められている（早田, 1989）。テフラの噴出年代は、Hr-FAが5世紀末～6世紀第1四半期ぐらいまで（坂口, 1993; 中村ほか, 2008）、Hr-FPが6世紀第二四半期頃（坂口, 1993）とされている。

今回の試料では、軽石も火山ガラスも確認できなかったために、確認した角閃石がいずれのテフラに由来するかはわからない。また、角閃石の産状もとくに多く産出する層位はなかったことから、周溝内に降下堆積したテフラが後に搅乱を受けたか、あるいは周溝構築時にすでに周囲の黒ボク土中に含まれていたテフラが周溝構築後に周溝内に土壌とともに流れ込んだ、などの場合が考えられる。したがって、本分析調査では周溝の構築時期とテフラの降下時期との前後関係を判断することはできなかった。

引用文献

- 新井房夫, 1979. 関東地方北西部の縄文時代以降の指標テフラ層. 考古学ジャーナル, 157, 41-52.
- 茨城県, 1993. 土地分類基本調査「日立」(5万分の1).
- 貝塚寛平・小池一之・遠藤邦彦・山崎晴雄・鈴木綾彦編, 2000. 日本の地形4 関東・伊豆小笠原. 東京大学出版会, 349p.
- 町田 洋・新井房夫, 2003. 新編 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 336p.
- 中村賢太郎・早川由紀夫・藤根 久・伊藤 康・廣田正史・小林純一, 2008. ウィグルマッチング法による榛名浜川噴火の年代決定(再検討). 日本第四紀学会講演要旨集, 38, 18-19.
- 坂口 一, 1993. 火山噴火の年代と季節の推定法. 新井房夫編 火山灰考古学. 古今書院, 151-172.
- 早田 勉, 1989. 六世紀における榛名火山の二回の噴火とその災害. 第四紀研究, 27, 297-312.

図版1 砂分の状況と角閃石の遊離結晶



写 真 図 版



第1号方形周溝墓出土土器



調査区遠景



調査区全景



調査区全景
(東から)

PL2



調査区全景
(北から)



調査区全景
(北から)



調査区全景
(西から)

第6号竪穴建物跡
完 挖 状 況



第7号竪穴建物跡
遺 物 出 土 状 況



第7号竪穴建物跡
完 挖 状 況





第8号竪穴建物跡
完 振 状 況



第1号方形周溝墓
遺 物 出 土 状 況



第1号方形周溝墓
遺 物 出 土 状 況



第1号方形周溝墓
遺物出土狀況



第1号方形周溝墓
完 挖 状 況



第2号方形周溝墓
遺物出土狀況

PL6



第2号方形周溝墓
完 挖 状 況



第3号方形周溝墓
遺 物 出 土 状 況



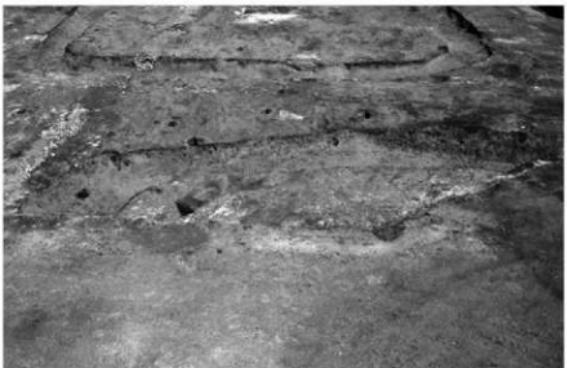
第3号方形周溝墓
完 挖 状 況



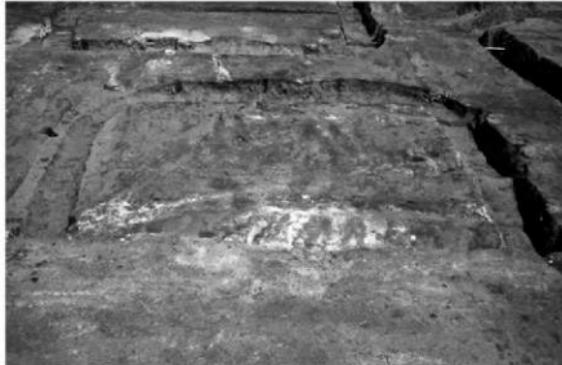
第4号方形周溝墓
完 挖 状 況



第5号方形周溝墓
遺 物 出 土 状 況



第5号方形周溝墓
完 挖 状 況



第6号方形周溝墓
完 挖 状 況



第7号方形周溝墓
完 挖 状 況



第8号方形周溝墓
第6号土坑
完 挖 状 況

第9号方形周溝墓
遺物出土狀況



第10号方形周溝墓
完掘狀況



第11号方形周溝墓
遺物出土狀況



PL10



第11号方形周溝墓
遺物出土狀況



第11号方形周溝墓
遺物出土狀況



第11号方形周溝墓
遺物出土狀況



第11号方形周溝墓
完 挖 状 況



第12号方形周溝墓
遺 物 出 土 状 況



第12号方形周溝墓
完 挖 状 況

PL12



第13号方形周溝墓
完 挖 状 況



第14号方形周溝墓
完 挖 状 況



第 4 号 墓
人 骨 出 土 状 況

第 4 号 墓
人骨出土状况



第 4 号 墓
埋葬施設完掘状况



第 4 号 墓
掘方完掘状况



PL14



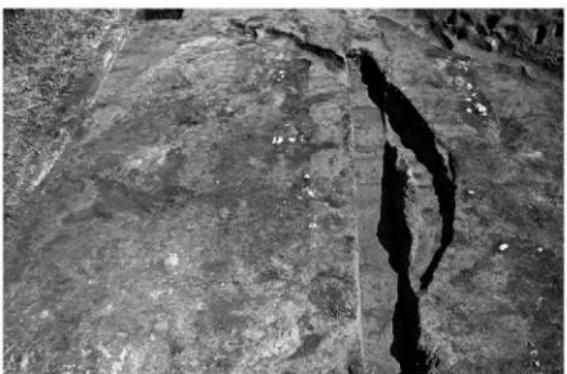
第 6 号 墓
遺 物 出 土 状 況



第 6 号 墓
遺 物 出 土 状 況



第 6 号 墓
完 挖 状 況





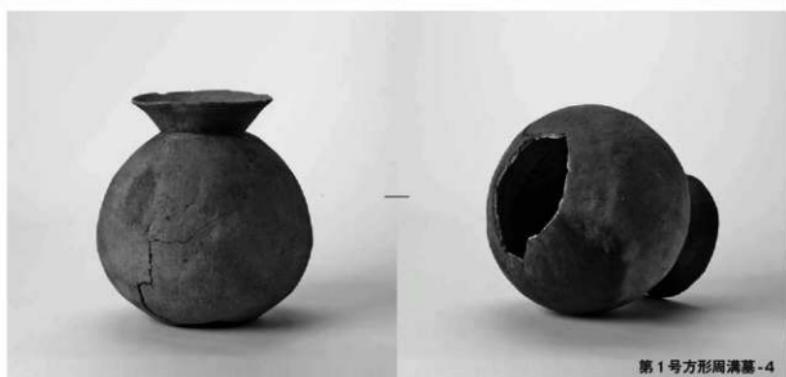
第9·11·12号方形周溝墓，遺構外出土土器



第1·2·14号方形周溝墓出土土器



第1号方形周溝墓-3



第1号方形周溝墓-4

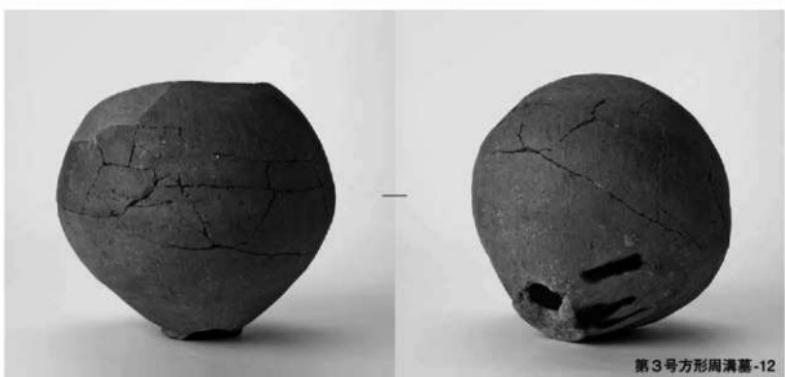


第1号方形周溝墓-5

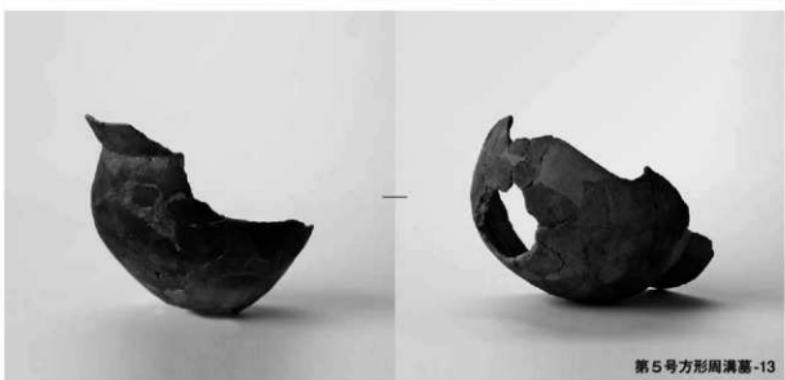
第1号方形周溝墓出土土器



第3号方形周溝墓-11



第3号方形周溝墓-12



第5号方形周溝墓-13

第3・5号方形周溝墓出土土器



SK 11-35



SK 11-36



SI 7-1



SI 6-TP 1



SI 6-TP 2



SI 6-TP 3



SI 7-TP 4



SI 7-TP 5



第8号竪穴建物跡、第8号土坑、遺構外出土遺物



第7·8号竖穴建物跡、第1号竖穴遺構、第27号土坑、遺構外出土遺物

抄 錄

印 刷 仕 様

編 集 O S Microsoft Windows 7
Home Premium ServicePack1
編集 Adobe InDesign CS5
図版作成 Adobe Illustrator CS5
写真調整 Adobe Photoshop CS5
Scanning 6 × 7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000
画面類 RICOH imago MP W4001
使用Font OpenType リュウミンPro・L
写 真 線数 モノクロ175線以上 カラー210線以上
印 刷 印刷所へは、Adobe InDesign CS5でレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第415集

瑞 龍 古 墳 群

県立常陸太田特別支援学校施設
整備事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成28（2016）年 3月15日 印刷

平成28（2016）年 3月18日 発行

発行 公益財團法人茨城県教育財团

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

H P <http://www.ibaraki-mabun.org>

印刷 野崎印刷紙器株式会社

〒311-0114 那珂市東木倉280-3

TEL 029-295-3331